

ルドルフ・シュタイナー ミツバチ講義

〔目次〕

「ミツバチ講義」について

- GA348（第17講）
ドルナハ、1923年2月3日
- GA351（第8講）
ドルナハ、1923年11月26日
- GA351（第9講）
ドルナハ、1923年11月28日
- GA351（第10講）
ドルナハ、1923年12月1日
- GA351（第11講）
ドルナハ、1923年12月5日
- GA351（第12講）
ドルナハ、1923年12月10日
- GA351（第13講）
ドルナハ、1923年12月12日
- GA351（第14講）
ドルナハ、1923年12月15日
- GA351（第15講）
ドルナハ、1923年12月22日

「ミツバチ講義」について

ミツバチは世界の主要な農作物のうち約4分の3の受粉を担っているといわれるが世界的に個体数が激減している。

それは「蜂群崩壊症候群 (CCD)」と呼ばれ主な原因には異常気象や農薬（ネオニコチノイド系）、寄生虫（ダニ）や生息地の喪失が挙げられる。

そのミツバチの問題についてシュタイナーは1923年にまとめた講義を残している。

ドーナッハのゲーテアヌム建設労働者向けに、1923年に行った全9回にわたる

1923年11月26日～12月22日の講義が収められた

GA348（第17講）とGA351（第8講～第15講）だが、

英語では"Nine Lectures on Bees"（ミツバチに関する9つの講義）

として知られている。

この講義ではミツバチの生活が自然科学的な観点だけでなく、精神科学（アントロポゾフィー）の視点から探求され、ミツバチの巣の叡智、人間とのつながり、健康、文明、そして宇宙との関係についてさまざまな角度から論じられている。

講義の主な流れは以下の通り。

第1講義～第3講義（導入とミツバチの霊的構造）

第4講義～第6講義（発達・毒・人間との関係）120

第7講義（三種類のハチと毒の医療的意義）

第8講義（昆虫と植物の真の関係）

第9講義（蟻酸が魂・地球の霊的基盤）

内容をテーマ別に整理すると以下の通りだが（9つの講義とは対応していない）

全体としてこれらのテーマは相互に連動している。

ミツバチを単なる昆虫としてではなく、自然・人間・コスモスの叡智の象徴として描き、現代科学の限界を指摘しながら、ミツバチの毒の摂取や自然養蜂を通じ人間の健康と霊的進化を促しているのである。

①ミツバチの巣の霊的本質と愛の力

- ・ミツバチの巣はその全体が「愛」で満ちている。
- ・働きバチは「金星」の影響で、個々の性的生活を放棄し、それを巣全体の愛の活動に転換している。
- ・蜂の群は個体ではなく一つの統一体（集合魂）として機能し、そこには「叡智」が無意識に働いている。
- ・女王蜂は巣の中心だが、働きバチの犠牲によって愛が生み出されている。
- ・人間の頭部とのアナロジーでいえば、巣は「開かれた頭」であり、外からの霊的影響を受け、内的な組織化を行っている。

②ミツバチの感覚と知覚（化学的・味覚-嗅覚）

- ・ミツバチは紫外線を「見る」のではなく、味覚と嗅覚の融合としての化学反応で感知している。
- ・ミツバチは赤は温かく、青は冷たいというように色を温度として感じ、薄明かりの中で生き、毒が微弱な視力を可能にしている。
- ・花の蜜や花粉の選択は高度な感覚に基づいている。

③巣の構造と六角形の力

- ・ミツバチは植物の愛の部分を集め、六角形の力に変換している。
- ・六角形の巣房は空間最適化だけでなく、地球のケイ酸（石英）結晶と同じ形成力を反映している。
- ・蟻はミツバチの体内で変容したもので、幼虫がこれを吸収して成長する。
- ・人間の身体にも同様の六角形形成力が必要とされ、血を固めることや骨格形成に関わっている。

④ハチミツの役割と人間への影響

- ・ハチミツは植物由来の六角形の力を人間に与え、気体要素と液体要素を結びつける。
- ・また魂の力が身体の器官に正しく働くのを助け、呼吸を整え、強さを与える。
- ・子供にはミルク+蜂蜜でくる病予防・赤血球増加・成長促進に、大人・老人には疲労回復、血の強化、硬化防止に効果がある。
- ・過剰摂取すると、消化の乱れや硬直化を招くことになる。
- ・ハチミツは文明を進展させ、宇宙から人間へと力を導く。

⑤ハチ毒の意義と治療的役割

- ・毒は霊的物質の純粋な凝縮で、植物を「治療」し、腐敗を防ぐが、人間ではリウマチ・痛風・循環障害の治療に有効である（蜂刺し療法）。
- ・毒は血の運動を模倣し、自我組織を強化する。
- ・心臓の弱い者には危険だが、希釈・制御で治癒力を発揮する。
- ・昆虫全体（アリ・ハチ）の毒やギ酸が自然界の癒し役をしている。

⑥生殖・発達・群れの分裂

- ・成熟期間は、女王バチ16日、働きバチ21～22日（太陽周期一致）、雄ハチは23-24日で、その違いは太陽的の一回転との関係による。（女王蜂は完全に太陽的（卵産生能力）であり、働きバチは太陽的+地球的、

雄ハチは完全に地球的（未受精卵から生まれる）である。

- ・新女王の誕生で古い女王が「輝く虫」となり、群れは分裂する。
- ・群れの分裂はギ酸欠乏時の魂離脱の象徴である。
- ・ミツバチは「太陽の生き物であり」、雄ハチは地球の影響を受けている。

⑦現代養蜂の問題と警告

- ・人工女王ハチの育種（労働ハチの幼虫を使用）は群れの力を弱め、80-100年後に絶滅の可能性がある。
- ・砂糖餌・機械化・利益優先が自然の叡智を乱すことになる。
- ・古代人はミツバチを神聖視し、本能的に養蜂を行っていた。
- ・現代の搾取が蜂病・弱体化を招いている。

⑧ミツバチと他の昆虫（アリ・ハチ）の比較と自然界の役割

- ・ミツバチは純粋な植物汁を集め、蜂蜜に変容させる。
- ・ハチは混合汁、アリは動物汁を扱っている。
- ・昆虫は植物にギ酸・毒を与え、腐敗を防ぎ、生命を更新する。
- ・植物は昆虫なしでは死滅する、昆虫は植物の「小さな医師」である。
- ・アリは腐敗物に蟻酸を与え、地球の死を防いでいる。

⑨ギ酸・蔞酸の宇宙的・人間的意義

- ・自然界全体に知性が遍在しているが、それは蟻酸を通じて現れる。
- ・人間の体は絶えずシュウ酸を蟻酸に変換し、これが魂・精神を体に引きつけている。
- ・老化・病気で蟻酸不足になると魂が離れ、死に至る。
- ・地球も蟻酸によって毎年再生され、冬の「死」から春の「生」へと向かう。

第一講義

「労働者講義」より 〔GA348（第17講）後半〕
ドルナハ、1923年2月3日

●基本的な視点

ミツバチを単なる昆虫ではなく、愛と知恵の宇宙的媒介者として描き、その生活全体を魂的な視点から解き明かしている。

ミツバチの生活はアリやスズメバチと似ているようで、実は根本的に異なっている。

その違いは*愛の営み（魂的なもの）」の扱い方にある。

養蜂は、人間を強化し文化を向上させる重要な営みであり、ミツバチの巣は、宇宙（星々）のエネルギーを人間に届ける「迂回路」となっており、宇宙学（Weltenkunde）と人間学（Menschenkunde）を結ぶ存在である。

●要点

○ミツバチの独特な生活の秘密

ミツバチの巣は極めて高度に組織化され、すべての働き蜂が完全に調和して協働している。その理由は、個々の性生活・生殖行為が極端に抑制されていることにある。

繁殖は女王蜂ただ1匹（または少数）に委ねられ、他の働き蜂は性衝動をほとんど放棄している。この抑えられた「愛の営み」は、巣全体の勤勉な労働活動へと昇華・変容される。古代の賢者たちはミツバチの活動を「金星（Venus＝愛の惑星）」の影響と結びつけている。

結果として、ミツバチの巣全体は「愛によって満たされた空気」のような魂的な場となり、無意識の高い知恵に貫かれている。

○花とハチミツのつながり

ミツバチは、花のなかでも特に「愛の営み（開花・受粉のプロセス）」が強く働いている部分（花蜜など）を吸い上げる。それを巣に持ち込み、ハチミツとして蓄える。つまりハチミツには、花の愛の生命が凝縮されている。

働き蜂たちは、個としての愛を放棄する代わりに、
巣全体と花の愛を媒介する存在となっているのである。

○人間にとってのハチミツの意義

ハチミツを摂取すると、人間の体内で
気体成分（魂・空氣的なもの）と液体成分（身体）の
正しい結びつきを促す。
これは魂が身体の器官に適切に働きかけるのを助け、
人間を健全で勤勉な存在にする。

●本文

「第一講義」〔GA348（第17講）主に後半〕

皆さん、おはようございます！ 前回から何か質問したいことは考えてくれましたか？

質問： アブサンの影響、およびミツバチとスズメバチについて、さらに質問があります。

（中略：前半は主にアブサンの影響についての講義）

シュタイナー博士：

（聴講者の一人である）あの紳士は、ご自身がミツバチの専門家（Bienenkenner）であることから、その質問を通じて、ミツバチの生活とスズメバチの生活の間にある違いについて指摘されました。

そこには多くの類似点があります。私は先日、スズメバチの生活について描写しました。ミツバチの生活にも似たところがたくさんあります。しかしその一方で、ミツバチの巣（Bienenstock）というものは、全くもって奇妙で独特な生活を営んでいるのです。一体それは何に起因しているのでしょうか。

もし皆さんが「霊的なもの（Geistiges）」へと視線を向けようとしなければ、このことを説明することは到底不可能です。ミツバチの巣における生活は、並外れて賢く組織されています。ミツバチの生活を観察したことがある人なら、誰もがそう言うことでしょう。

もちろん、ミツバチが人間と同じような「科学（知識）」を持っていると言うことはできません。なぜなら、彼らには人間のような脳の器官などが実際には備わっていないからです。ですから、彼らは普遍的な「世界の知性」を、人間と同じようなやり方で自分の身体の中へと汲み取っているわけではありません。

しかし、地球を取り巻く全世界の環境からの影響は、ミツバチの巣に対して途方もなく強力に作用しています。もし、地球の周囲にあるすべてのものが、まさにミツバチの巣のような存在に対して計り知れないほど強い影響を及ぼしているのだということを考慮に入れさえすれば、ミツバチの生活が本来どのようなものであるか、正しく突き止めることができるはずです。

ミツバチの巣の生活というものは、ミツバチたちが実に見事に、アリやスズメバチよりもはるかに強固に「協働」を行い、すべての作業が完全に調和するように全うしているという事実に基づいています。

そして、その原因が一体どこから来ているのかを突き止めようとするとき、私たちは次のように自分に言い聞かせることになります。すなわち、「ミツバチは、他の動物であれば生殖行為として現れるはずの要素

が、並外れて強く、徹底的に『抑制』されているような生活を送っているのだ」と。この要素が、ミツバチにおいては途方もなく強く退けられているのです。

ミツバチの場合、繁殖 (Fortpflanzung) は常に、厳選されたごくわずかな雌の個体、すなわち「女王蜂 (Bienenköniginnen)」だけが担っています。その他の蜂たち (働き蜂) は、多かれ少なかれ性生活が後ろへと退けられている状態にあります。

しかし、性生活の中には「愛の営み (Liebesleben)」そのものが存在しています。この愛の営みというのは、そもそもは魂的なもの (Seelisches) です。この魂的なものによって身体の特定の器官が動かされるからこそ、それらの器官が愛の営みの表現となるのです。

そして、ミツバチにおいてはこの愛の営みが、実質的にたった1匹の女王蜂だけに集中しているため、それ以外の巣の中にいる蜂たちの性生活は、彼女たちが互いに展開するあのような一切の活動 (勤勉な労働) へと「変容」されることになります。

だからこそ、今日とは全く異なる方法でこの事理を知っていた古代の賢者たちは、ミツバチの巣が営むあの驚くべき活動のすべてを「愛の営み」へと帰属させ、その営みを「金星 (Venus)」という惑星と結びつけて考えていたのです。

したがって、私たちは次のように言うことができます。一方において、スズメバチやアリについて描写するのなら、彼らは惑星・金星の影響からより遠ざかっている動物ですが、これに対してミツバチは、金星の影響にすっかり身を委ねており、ミツバチの巣全体の中に愛の営みを発展させています。それは「知恵に満ちた生活」となっています。それがどれほど賢明であるかは、皆さんも容易に想像がつくでしょう。

私は以前、子孫の誕生についていくつかの描写をしました。そこには無意識の知恵 (Weisheit) が宿っています。ミツバチはこの無意識の知恵を、自らの外的な行動において発揮しているのです。このようにして、私たちが本来、自らの心で愛を育むときにだけ生きられるはずのものが、ミツバチの巣の中では、いわば一つの「実体」のように全体に満ち渡っています。ミツバチの巣の全体が、本来、愛の営みによって貫かれているのです。

個々のミツバチたちは、自分自身の個としての愛を幾重にも放棄する代わりに、ミツバチの巣の全体の中にその愛を発展させています。そのため、ミツバチというものは、完全に「愛によって満たされた空気」の中で生きているのだということがはっきり分かれば、私たちはその生活を理解し始めることができるのです。

そして、このことはミツバチにとって何よりも大きな恩恵をもたらします。なぜなら、ミツバチは本来、植物の諸成分の中でも、これまた植物において完全に愛の営み (受粉・開花プロセス) によって貫かれている部分を糧にして生きているからです。ミツバチは、後にハチミツ (Honig) へと変えるための栄養を、まさに植物の愛の営みの渦中にある成分から丸ごと吸い上げています。つまりミツバチたちは、ある意味で、花々から受け取った「愛の営み」をそのままミツバチの巣の中へと持ち込んでいるのです。

ですから、ミツバチの生活というものは、「魂的な方法 (seelische Art)」で研究しなければならないのだと言わねばなりません。

アリやスズメバチにおいては、そのようなアプローチはそれほど必要ありません。彼らの生活を観察すれば、今お話ししたようなプロセス (愛への昇華) からは身を引き、むしろ再び自分自身の性生活 (個としての生殖活動) へと身を委ねていることが分かります。

女王蜂という例外を除けば、ミツバチは実際、いわば次のように宣言しているかのような存在なのです。「私たちは個々の性生活を放棄し、自分自身を『愛の営みの担い手』にしよう」と。——その結果、彼女たちは本当に、花々の上に生きているものをそのままミツバチの巣の中へと運び入れているのです。このことをこのように正しく深く考えていけば、ミツバチの巣に隠された「すべての秘密 (Geheimnis)」を手に入れることができます。花々の中に広がっている、この瑞々しく芽吹く愛の生命こそが、ハチミツ (Honig) の中にも宿っているのです。

さらに研究を進めるために、今度は実際にそのハチミツを食べてみましょう。ハチミツは一体どのような働きをするのでしょうか？

皆さん、アブサンは人間の液体成分と結びつくことで、空気（気体成分）、ひいては魂的なものを外へと追い出してしまう、人間に（不条理な）快樂をもたらしました。一方、ハチミツがもたらす快感というものは、せいぜい「舌の上」での心地よさに留まります。ハチミツが食べられたその瞬間に、それは人間の体内における「気体（空気）の成分」と「液体成分」との間の、まさに「正しい結びつき（調和）」を促進するのです。

ですから、人間にとって自分の食事に適切な量のハチミツを少し加えることほど、身体に良いことはありません。ミツバチは本来、人間が自分の魂の力を使って、自らの器官へと正しく働きかけるすべを学べるように、素晴らしいお膳立てをしてくれているのです。

ミツバチの巣は、ハチミツを通じて、人間が「自分の肉体の内で、魂を勤勉に働かせるために必要なもの」を再び人間へと還元してくれています。

つまり、人間がアブサンをがぶ飲みするとき、その人は魂を（安易に）享受しようとしています。しかし、人間が食事にハチミツを加えるとき、その人はまさに、自分の魂が身体に対して正しく働きかけ、正しく呼吸できるように整えようとしているのです。

それゆえに、「養蜂 (Bienenzucht)」というものは、本来、文化を途方もなく発展させるものとなります。なぜなら、それは人間を頑健にするからです。これに対して、アブサンをがぶ飲みすることは、人類を少しずつ「絶滅 (aussterben)」へと追いやる原因となるのです。

ミツバチが星々の世界（宇宙）から最大のエネルギーを受け取っているのだと考えるとき、私たちはまた、人間が正しいエネルギーをその内に取り入れるための「仲介役」として、ミツバチが存在しているのだということにも気づくはずです。

生きとし生けるすべてのものは、正しい方法で結びつけられさえすれば、再び正しい方法で互いに協働し合うものなのです。ミツバチの巣を目にする者は誰もが、厳かな気持ちになって自らにこう語りかけるべきでしょう。

「ミツバチの巣という迂回路を経ることで、全世界（全宇宙）が人間の内へと流れ込み、人間を逞しく、有能な存在 (tüchtige Menschen) にしてくれているのだ」と。

これとは逆に、アブサンをがぶ飲みすれば、人間は役に立たない無能な存在になってしまいます。——このようにして私たちは、「人間学 (Menschenkunde)」を「宇宙学・世界学 (Weltenkunde)」へと高めていくことができるのです。

第二講義

ドルナハ、1923年11月10日

〔GA351（第8講）〕

●基本的な視点

養蜂は、人間存在の神秘を映す鏡であり、
人工的な介入（特に女王蜂の機械的育成）は短期的利益はあるが、
自然の深層の「有機的・霊的結びつき」を損ない、
長期的に養蜂を破壊する恐れがある。

ミツバチが「聖なる動物」とされてきたのは、
頭脳と身体の関係、物質の変容、老化と死という
人間自身の内面的プロセスをそのまま示しているからである。

●要点

1. 人工女王蜂育成の問題提起

人工的な女王蜂の育成は、
ハチミツ生産量や労働効率を短期的には向上させるが、
長期的に養蜂全体を衰退・崩壊させる危険性がある。

2. ミツバチの巣と六角形の細胞の深い意味

ミツバチは植物からハチミツと花粉を集め、
体内で蠟に変えて六角形の細胞を作る。
六角形は幼虫が「力」を吸収する形態的・霊的意味を持つ。
幼虫はその六角形の力を体内に取り込み、後で自ら同じ形を築く。
女王蜂は丸い「袋状の王台」で育つ（六角形の影響を受けない）。

3. 発育日数と宇宙的（太陽・地球）対応

女王蜂：16日

（太陽のサイクル未完・純粋な太陽の動物。
幼虫状態に近く、卵を産む力を持つ）

働き蜂：21日

（太陽が自転1回転する期間＝太陽の完全サイクルを体験。）

雄蜂：23～24日

（太陽サイクルを超え、地球の影響に入る。）

→ 受精能力（オス）は地球の力、
卵産み能力（メス）は太陽の力から来る。
21日という時間は極めて重要である。

4. 婚姻飛行と分蜂（群れ分け）の神秘

受精は太陽に向かって高く飛ぶ「婚姻飛行」で行われる。
新しい女王蜂が生まれると、
古い群れの働き蜂の額の単眼が突然「見える」ようになり、
耐えられずに分蜂する。
ミツバチは毒により「薄暗がりの内側世界」に留まり、外界の影響を拒む。
毒が阻害されると外界が見えてしまう。

5. ミツバチの巣箱 = 人間の頭脳・身体の鏡像

人間の頭の中の3種類の細胞がミツバチの3種に対応する。

卵白細胞（中脳） → 女王蜂
血液細胞（赤血球など） → 働き蜂（蠟＝骨・組織を作る）
神経細胞 → 雄蜂（消耗・死滅）

血液は、ミツバチが巣板を作るのと同じように
骨や組織を「蠟状の力」で形作る。
ミツバチの営みは、人間が頭から全身へ向けて行っている
物質変容プロセスそのものを外側に現したものの。

6. ハチミツの人間に対する意義

私たちはミツバチの「清潔な吐瀉物」を食べている。
特に高齢者やくる病の子どもに優れた効果があり
身体に「堅実さ・形態形成力」を与えるが、適量に限る。
養蜂地では果樹などもよく育つ。

●本文

（ミュラー氏のミツバチに関する講演への補足ドルナハ、1923年11月10日）

（中略）

シュタイナー博士：

人工的な養蜂（女王蜂の人工育成）は、いつ頃から始まったのですか？

ミュラー氏：

おそらく12年から15年ほど前から始まっています。

シュタイナー博士：

問題はこういうことです（中略）人工的な養蜂によって、ハチミツの生産量や、全作業、さらには働き蜂の労働能力さえも、ひどく増大させることができるということです。

ただ、それはミュラー氏も今お気づきになった通り、あまりにも合理的（効率主義的）に、またあまりにも商業主義的に行われてはならないのです。

次回、私たちは養蜂についてももう少し深く観察してみることにしましょう。そして、短期間であれば並外れて好都合な措置であり、今日の土台となっているものが、一見すると良く思えるかもしれませんが、もし人工的に育成された蜂だけを使い続けるならば、100年後には養蜂全体が存続できなくなってしまう（全滅してしまう）ということを見ていきます。

短期間であれば非常に有利なことが、時間の経過とともに、最終的にはその営み全体を根絶させる事態へとどのように繋がっていくのか、私たちはそれを確かめたいと思います。そして、まさに養蜂というものが、自然のあらゆる秘密を知る上でどれほど興味深いものであるか、とりわけ、一方で非常な豊かさ（多産）をもたらすものが、他方ではまさに死滅をもたらすという事実を私たちは見ていくことになります。

ですから、養蜂家たちはここ短期間の間に養蜂業が遂げた急成長を非常に喜ぶことはできますが、その喜びは100年も続くことはないのです。

〔第8回講演〕

ドルナハ、1923年11月26日

皆さん、おはようございます！本日は、ミュラー氏の説明に対していくつかの補足をしたいと考えております。もっとも、今日という時代は、こうした事柄を実際の養蜂の実践に今すぐ適用できるような段階にはもちろんありませんが、それでも皆さんにとって興味深い内容になるのではないかと思います。

また、実際の養蜂の実践的なやり方については、これ以上言うべきことはほとんど、あるいは実質的に何もないとも言えます。なぜなら、ミュラー氏がまさに今日行われている通りのやり方を、非常に見事な形で皆さんの前で説明してくださったからです。

しかし、もし皆さんが注意深く耳を傾けていたのであれば、養蜂の全容に関して、いわば一つの「謎に満ちた世界」の存在が少し見えてきたのではないのでしょうか。

養蜂家が、まずは自分が何をすべきか（実践的な作業）に興味を持つのは当然のことです。しかし、実はすべての人類が養蜂に対して最大限の関心を持つべきなのです。なぜなら、人間の生活において、養蜂には私たちが考えている以上に本当に多くのことがかかっているからです。

この事柄を、もう少し広い視野から眺めてみることにしましょう。

ご覧の通り、ミツバチというものは――皆さんもミュラー氏の講演からお分かりになったと思いますが――植物の中にすでにハチミツとして含まれているものを集めることができます。彼らは実のところ、ただハチミツを集めているだけであり、私たち人間は、彼らが巣箱に集めたものの中からほんの一部を、それほど大きな割合ではなく、ただ奪い取っているにすぎません。というのも、人間が奪い取る量は、おそらくおよそ20パーセント程度と言えるからです。人間がミツバチから奪い取るのは、だいたいそれくらいの量なのです。

しかしそれだけでなく、ミツバチはその身体全体、その組織全体を通じて、植物から花粉（Blütenstaub）を奪い取ることもできます。つまりミツバチは、植物の中に本来ごくわずかしが含まれておらず、手に入れるのが非常に困難なものばかりをまさに集めているのです。

花粉は、植物全体に対して存在する割合からすれば極めて微量ですが、ミツバチはそれを（後ろ脚にある）刷毛（はけ）を使って後ろ脚に集めます。そして、それは巣箱に蓄えられ、あるいは消費されるのです。

したがって、私たちはミツバチの中に、自然によって並外れて繊細に精製された物質を吸い上げ、自分たちの生活のために利用している動物をまず見出すことができるのです。

しかし、さらに先があります。ミツバチは、まず自分の消化器官を通じて食物を「蟻（ワックス）」へと変化させます。――これは彼らが自分自身の力で作り出すものです――。そして、卵を産み落とすため、また自分の蓄えを保存するために、独自の小さな容器を作ります。このプロセスは、普段まったく深く考えられていないため、一見すると最も目立たないことかもしれません。

しかし、この独自の小さな容器こそが、いわば「大なる驚異」なのです。この容器は、上から見ると六角形をしており、横から見るとこのようになっています（図を参照）。そして、一方の端は閉じられています。

※図



この中に、卵を産み落としたり、蓄えを保存したりすることができるのです。そこでは、一つの容器がもう一つの容器とぴったり隣り合っています。これらは非常にうまく組み合わさっているため、このような「細胞（セル）」と呼ばれるものが別の細胞と結合している仕切り板（巣板）によって、ミツバチの巣では空間が並外れて効率よく利用されているのです。

「なぜミツバチは本能によって、これほど精巧に形作られた細胞（巣穴）をわざわざ建てるのか？」という問いを投げかけると、人々は普通こう言います。「それは、空間を有効に利用するためだ」と。確かにそれは本当のことです。もしこれ以外のどんな形を思い浮かべたとしても、そこには必ず隙間（無駄な空間）が生じてしまいます。しかし、この（六角形の）形であれば隙間は生まれず、すべてがぴったりと隣り合い、この巣板の空間が完全に使い尽くされるのです。

なるほど、それは確かに一つの理由です。しかし、それが唯一の理由ではありません。皆さんは次のことを考えなければなりません。あの小さな幼虫が中に横たわっているとき、幼虫は完全に閉じ込められています。自然界のどこかに存在しているものが、何の「力」も持っていないなどとは、決して思わないでください。

この六角形の（六つの面を持つ）ケース全体には、それ自体の「力」が宿っているのです。もし幼虫が「球体」の中に横たわっているとしたら、それは全く別なものになっていたでしょう。このような六面体の住まいの中に横たわっているということは、自然界において全く異なる意味を持つのです。幼虫自身がこの形態を体内に取り込みます。そして彼女は、自分が最も柔らかかった幼少期に、このような六角形の細胞の中にいたということを、その身体で感じ取っているのです。そして、そこで吸い上げたのと同じ力を使って、今度

は彼女自身がそのような細胞を建てるようになります。ミツバチがそもそも活動するための「力」は、まさにあの（六角形の）中に眠っているのです。つまり、ミツバチが外側に向かって行うことは、すでにその環境の中に存在しているのです。これが、私たちがまず注目しなければならない最初の事柄です。

しかし、さらに次のような、非常に、非常に奇妙な事実が皆さんに説明されました。巣箱全体の中には、様々な種類の細胞（巣穴）が存在しています。養蜂家であれば、働き蜂の細胞と雄蜂の細胞を極めて容易に見分けることができると思います。それは特に難しいことはありませんよね。そして、働き蜂や雄蜂の細胞と、女王蜂の細胞（王台）を見分けることはさらに簡単です。なぜなら、女王蜂の細胞は、あのよう（六角形の）形をまったくしていないからです。それらは実のところ、まるで「袋」のような形をしています。そして、一つの巣箱の中に存在する数もごくわずかです。

したがって、次のように言わなければなりません。働き蜂と雄蜂は、あのような六面体の細胞の中で発育するのに対し、女王蜂は実のところ、一つの「袋」の中で発育するのだと。女王蜂は、そのような（六角形の）面で囲まれた環境からの影響を受けないのです。

しかし、ここにはさらに別の要素も加わります。女王蜂が完全に発育して一人前の女王蜂として完成するまでには、わずか16日間しかかかりません。それだけでもう、彼女は一人前の女王蜂になります。一方、働き蜂には約21日間かかります。つまり、より長い時間がかかるのです。これを見ると、自然は女王蜂よりも、働き蜂の身体を形作る方へはるかに多くの丹精を傾けている、と言えるかもしれません。これにはまた別の理由があるのですが、それは後ほどすぐに見ていきましょう。とにかく、働き蜂には21日間かかります。そして、用済みになると殺されてしまうオスである雄蜂は、なんと23日から24日間もかかるのです。

これはまた驚くべき事柄です。異なる種類のミツバチたち、つまり女王蜂、働き蜂、雄蜂は、それぞれ発育に異なる日数を必要とします。

この働き蜂が必要とする「21日間」という日数には、実は極めて特別な背景が隠されています。地球上で起こるあらゆる事象において、21日間というのは決してどうでもいい、無意味な時間ではありません。この21日間という期間は、太陽が自らの軸を中心に、ちょうど約1回転（自転）する時間なのです。

ですから考えてみてください。働き蜂は、太陽がちょうど自転を1回するのと同じだけの時間をかけて完成するのです。これによって皆さん、働き蜂は太陽の完全な1回転分のサイクルをまるごと経験することになります。太陽の1回転をすべて潜り抜けることで、太陽が自分に及ぼし得るあらゆる作用を体内に受け入れることができるのです。

そして、もし働き蜂がここからさらに発育を続けようとしたとしても、太陽からはもう同じ作用が繰り返されるだけになります。なぜなら、ここに働き蜂（の卵）を想像し（図が描かれる）、卵が産み落とされたときに太陽があるとすれば、その点がちょうど太陽の正面に位置しているからです。太陽は21日間で自転を1回します。すると太陽は再び元の位置に戻り、その点がまた正面に来ます。ここからさらに時間が進めば、やってくるのはすべて「すでに一度経験した太陽の作用」の繰り返しにすぎません。

つまり働き蜂は、自分が完全に発育するまでに、太陽がもたらし得るすべての恩恵をちょうどぴったりと味わい尽くすのです。もし働き蜂がこれ以上（卵や幼虫のままで）発育を続けたとしたら、彼女は太陽の領域をはみ出して、今度は「地球の領域」へと入り込んでしまうことになるでしょう。なぜなら、太陽の領域はすでに1回経験し、完全に味わい尽くしてしまったからです。

（21日を経た）今や、働き蜂は地球の領域へと入っていきませんが、それはもう「完成した昆虫」として、つまり「完全に成熟した動物」として、外側の世界（地球）の営みに加わるにすぎません。要するに、（地

球に足を踏み入れる直前の) まさに一瞬、ほんのひとときだけを自分の発育の締めくくりに使い、その後は太陽のサイクルに守られたまま発育を終えます。したがって、働き蜂は完全に「太陽の動物」なのです。

では今度は、雄蜂に目を向けてみましょう。雄蜂は、いわばこのプロセスをもう一步先まで引き延ばして考えます。彼は21日が経過しても、まだ自分を発育途上(未完成)の状態にしておくのです。彼は自分が完全に成長しきる前に、すでに「地球の領域」へと足を踏み入れてしまいます。ですから、雄蜂は「地球の動物」なのです。これに対して、働き蜂は完成された「太陽の子」なのです。

では、女王蜂はどうでしょうか？女王蜂は、そもそも太陽の完全な発育サイクル(21日間)を完了することさえしません。彼女はその手前で(発育を)止めるのです。彼女は常に「太陽の動物」のままであります。つまり女王蜂は、ある意味で、他のどの蜂よりも常に自分の幼虫状態に近いところに留まっているのです。そして、幼虫状態から最も遠く離れているのが、オスである雄蜂です。

女王蜂は、[このように幼虫状態に近いところに留まっている]おかげで、卵を産み落とすことができるのです。皆さんはミツバチの姿を通して、「地球の影響下にあること」と「太陽の影響下にあること」が何を意味するのかを、正しく見て取ることができます。なぜなら、一匹のミツバチが女王蜂になるか、働き蜂になるか、あるいは雄蜂になるかは、太陽の発育サイクルを(1回転分)待つか、それとも待たないか、ただそれだけにかかっているからです。

女王蜂が卵を産めるのは、太陽の作用が常に彼女の中に留まっており、地球の発育作用を何一つ受け取らないからです。一方で働き蜂はさらに先へ進み、あと4~5日間発育を続けます。彼女は太陽の作用を最後まで完全に味わい尽くします。しかし、まさにそのことによって彼女の身体は十分に固くなり、先ほど私が言ったように、ほんの一瞬(孵化の直前に)地球の発育作用へと移行してしまいます。そのため、すでに(エネルギーを)完全に吸収し尽くしてしまっており、再び太陽の発育作用へと戻ることができません。その結果、彼女は卵を産むことができなくなります。

雄蜂たちはオスであり、受精(受粉)させることができます。つまり、受精というものは「地球」からやってくるのです。雄蜂たちは、完成された状態ではなく「未完成の発育状態のまま」、数日間長く地球の発育作用に身を委ねることによって、その受精能力を獲得します。ですから、次のように言うことができます。「ミツバチを見れば、オスの受精能力は地球の力から来ていること、そして卵を発育させるメスの生殖能力は太陽の力から来ていることが、極めて明確に分かる」と。

皆さん、これによって、ある生命体が発育する「時間の長さ」が何を意味するのかを、単純に測ることができるでしょう。これは非常に重大な意味を持っています。なぜなら、ある特定の時間の中に進行する事柄は、それより短い時間や長い時間の中では進行せず、そこでは全く別の事柄が進行するからです。

しかし、もう一つ考慮すべき点があります。ご覧の通り、女王蜂は16日間で発育します。太陽の中で彼女の正面にあった(卵が産み落とされたときの)位置は、16日目には(図を黒板に描きながら)まだこの辺りにあるかもしれません。彼女は太陽の発育サイクルの内側に留まっています。

働き蜂たちは、太陽の自転の残りの部分も一緒に体験しますが、彼女たちも太陽の作用の内側に留まっており、地球の発育作用にまではみ出すことはありません。このおかげで、彼女たちは自分たちが女王蜂と同族であると感じるのです。

働き蜂の群れ全体が女王蜂に対して強い繋がりを感じるのは、彼女たちが「同じ太陽の発育サイクル」に属しているからです。彼女たちは自分たちが女王蜂と結びついていると感じています。

一方で、働き蜂たちは雄蜂たちのことをこう言います。「あいつらはもう裏切り者だ。あいつらはすでに地球へと堕ちてしまった。もう本当の意味で私たちの仲間ではない」と。働き蜂が雄蜂を我慢して受け入れているのは、ただ彼らが必要だからにすぎません。では、一体何のために彼らが必要なのでしょう？

時として、女王蜂が受精しないまま、それでも発育可能な卵を産むことがあります。女王蜂は必ずしも受精する必要はなく、それでも卵を産むことができるのです。女王蜂が受精していないことから、ミツバチにおいては（他の昆虫でも一部見られますが）これを「処女繁殖（Jungfernbrut）」と呼びます。科学的な専門用語では「パルテノゲネシス（Parthenogenesis：単為生殖）」と言います。

しかし、この状態で産まれた卵からは、雄蜂しか孵化しません！そこからは働き蜂も女王蜂も二度と出てこないのです。つまり、女王蜂が受精しなければ、働き蜂も女王蜂も生み出すことができず、雄蜂だけが作られることになります。当然ながら、そのような巣箱は役に立ちません。

このように、処女繁殖においてはもう一方の性（オス）だけが生まれ、決して同じ性（メス）が生まれることはありません。これは非常に興味深い事実です。そして、同じ性（メス）を生み出すために受精が必要であるということは、自然界全体の仕組みにとって（もちろん高等動物ではなく、こうした下等動物においてもですが）極めて重要なことです。ミツバチの卵においては、受精が行われないと雄蜂しか生まれないというのは、まさにそういうことなのです。

そもそもミツバチにとって、受精というものは極めて特別な出来事です。それは、ある種の「婚礼のベッド」が用意されていて、受精の間にそこへ引きこもるというような進み方はしません。全く異なる進み方をするのです。受精にあたっては、まさに「公の場」へ、満ち溢れる太陽の光の中へと飛び出していきます。しかも、非常に奇妙に思えるでしょうが、まずはできる限り高く舞い上がるのです。

女王蜂は、自分が属している太陽に向かって、できる限り高く飛び立ちます。私は以前、このことを皆さんに描写しました。そして、自分の「地球の力」をまだ克服することのできる雄蜂——雄蜂は地球の力と結びついてしまっていますから——、つまり、その中で最も高く飛ぶことのできる雄蜂が、はるか上空の空気の中で受精することができるのです。その後、女王蜂は再び巣箱へ戻ってきて、卵を産みます。

ご覧の通り、ミツバチには婚礼のベッドはなく、「婚姻飛行（Hochzeitsflug）」があり、受精を求めるときには、まさに太陽に向かってできる限り突き進んでいくのです。婚姻飛行には良い天気が必要である、つまり本当に太陽が必要であるということのも当然のことで、悪天候のときにはこれは行われません。

これらすべてのことが、女王蜂がいかに太陽との親和性を保ち続けているかを証明しています。そして、このようにして受精が行われると、対応する働き蜂の細胞（巣穴）の中に働き蜂が作り出されます。まずは——ミュラー氏が見事に説明してくれた通り——小さな幼虫などが生まれ、それが21日間かけて働き蜂へと発育するのです。そして、あの袋のような形の細胞（王台）の中では、女王蜂が発育します。

さて、さらにその先を理解するために、私は皆さんに一つのことをお話ししなければなりません。皆さんは最初、そんなことは疑わしいと受け止めるかもしれません。なぜなら、それを理解するにはさらに精密な研究が必要だからです。しかし、実際そうなのです。

その先のことは、成熟し、完成した働き蜂が外へ飛び立ち、花や木々へと飛んでいって、自分の足の爪でそこにしがみつ（図が描かれる）、それからハチミツを吸い上げ、花粉を集めるという事実へと繋がっていきます。

花粉について言えば、彼女はそれを身体に付着させて持ち帰ります。彼女の後ろ脚には、いわゆる「刷毛（はけ）」という特別な装置があり、そこに花粉を付着させることができます。しかしハチミツは、自分の「吸い口（吻：ふん）」を使って吸い込みます。その一部は自分自身の栄養になりますが、大部分は自分の「蜜胃（Honigmagen）」の中に蓄えられます。そして、巣に戻ってきたときに、それを再び吐き出すのです。

つまり、私たちがハチミツを食べるとき、実際には「ミツバチの吐瀉物」を食べていることになります。私たちは本当にこのことを自覚しなければなりません。とはいえ、それは非常に清潔で甘い吐瀉物であり、普段私たちが知っているような吐瀉物とは違いますよね。

このようにして、ミツバチは自分が食べるため、あるいは備蓄するため、また（巣の）加工や蜜蝋などのために必要なものを集めているのです。

ここで私たちは、次のように問い直さなければなりません。「では、ミツバチは一体何によって花へとたどり着くのでしょうか？」

彼女たちは、とてつもない確実さで花へと近づいていきます。しかし、ミツバチの「目」を見ただけでは、その理由を説明することは到底できません。働き蜂の頭部には――雄蜂の目はもう少し大きいのですが――側面に二つの小さな目（複眼）があり、額には三つの本当にごくわずかな、小さな目（単眼）があります（図が描かれる）。雄蜂はそれより少し大きい目です。働き蜂のこれらの目を詳しく調べてみると、彼女たちは視覚としてはほとんど何も見えておらず、額にある三つの小さな目（単眼）に至っては、そもそも最初は全く何も見ることはできない、という結論に達します。

非常に奇妙なことに、ミツバチは実のところ「見る」ことによって花にたどり着いているのではなく、「嗅覚」に似た何かによってたどり着いているのです。彼女たちは匂いを頼りにして手探りで進み、それによって花へと突き当たります。つまり、実質的には「嗅覚と味覚の中間に位置するような、ある種の感覚」が、ミツバチを花へと導いているのです。ミツバチは、飛んでいるとき、すでに遠くから花粉やハチミツを「味わって」います。はるか遠くからそれを味わっているのです。これこそが、ミツバチが目を全く使わなくても動ける真の理由なのです。

ここで、次のことを明確にイメージしてみてください。一匹の女王蜂が誕生したとします。女王蜂は太陽の領域の中で生まれ、その後、太陽の作用を（働き蜂のように21日間かけて）最後まで完全に味わい尽くすことはせず、いわば太陽の作用（の純粋な状態）の中に留まりました。そして、働き蜂の大軍もまた、太陽の作用をさらに一緒に体験し続けましたが、働き蜂たちも地球の発育作用へと完全には移行しませんでした。

今や、これらの働き蜂たちは、女王蜂と強く結びついていると感じています。それは、彼女たちが単に「同じ太陽の下にいたから」というわけではなく、そもそも「太陽の発育サイクルの内側に留まり続けた」からこそ、女王蜂との絆を感じているのです。彼女たちは自分たちの発育過程において、女王蜂の発育過程から分離しなかったのです。雄蜂たちはそこには含まれません。彼らは離れていってしまったからです。

ところが、ここで次のようなことが起こります。新しい女王蜂が誕生するときには、（先ほどの古い女王蜂の）婚姻飛行がすでに過去に行われていたはずですが、その古い女王蜂という生命体は、かつて太陽へと飛び立ちました。そして今、次世代の若い女王蜂が誕生したのです。その瞬間、古い女王蜂と結びつきを感じていた働き蜂の大群全体に、非常に奇妙な現象が沸き起こります。

新しい女王蜂が生まれると、（働き蜂の額にある）あの三つのごくわずかな、小さな目（単眼）が、突然「見える」ようになるのです。

ミツバチたちにとって、これは耐え難いことです。ミツバチたちは、自分たちそのものであるはずの存在が、別の場所（別の身体）からやってくるという事態に耐えることができません。働き蜂の頭部にあるこの三つの小さな目は、完全に身体の「内側」から形成されており、内なるミツバチの血液などが通っています。そのため、これまでは外側の太陽の作用に直接晒されてはいませんでした。

しかし、太陽から生まれ出た新しい女王蜂が、その身体を通じて巣箱の内部へ「太陽の光」を持ち込んでくるため、これらの働き蜂たちは、その小さな目によって突然、いわば「霊視状態（Hellsehend）になってしまうのです。そして、新しい女王蜂が放つこの強烈な光に、耐えることができなくなります。

ここで、群れ全体が一齐に「分蜂（Schwärmen：巣分かれの飛行）」を始めます。それは新しい女王蜂に対する一種の恐怖であり、まるで目を眩まされたかのような状態です。私たちが太陽を直接見上げたときと、全く同じことがミツバチたちに起きているのです。それゆえ、ミツバチたちは一齐に巣から飛び出していきます。

そして人間（養蜂家）は、古い女王蜂と共に、再び新たな巣箱を立ち上げなければなりません。少なくとも、まだ古い女王蜂と結びついている大半の働き蜂たちの結束を維持するためにです。一方で、新しく残された若い女王蜂は、自分自身の新たな民（群れ）を獲得していかなければならないのです。

（巣箱には新しい女王蜂に付いていかなかった）蜂の民も残されますが、彼らはまた別の条件のもとで生まれた者たちです。いずれにせよ、ミツバチたちが一齐に分蜂（巣別れ）する理由は、新しい女王蜂が持ち込んでくる「新たな太陽の作用」に彼らが耐えられないからなのです。

ここで皆さんはこう疑問に思うかもしれません。「しかし、ミツバチたちはなぜ、その新たな太陽の作用に対してそれほどまでに敏感になってしまうのだろうか？」

皆さん、ここには極めて奇妙な事実が存在しています。皆さんもおそらく、ミツバチに出会うと厄介なことになる場合があるのをご存知でしょう。彼らは人を刺します。人間のように大きな生物であれば、せいぜい皮膚が炎症を起こして腫れる程度で済みますが、それでもやはり不快なものです。しかし、小さな動物たちなら、その刺された毒で死んでしまうことさえあります。これは、ミツバチが中にピストンのようなものが上下する一種の管である「針」を持っており、それが根元の「毒囊（どくのう）」へと繋がっていて、そこから毒を流し込むことができるためです。

この毒は、それに見舞われる者にとっては極めて不快なものですが、ミツバチ自身にとっては並外れて重要なものなのです。ミツバチにとって、刺すことでこの毒を体外へ放出せざるを得なくなることは、決して好ましいことではありません。それでも彼らが毒を放つのは、そもそも外世界からのあらゆる影響にうまく耐えることができないからです。彼らは「自分自身の内側」に留まりたいのです。自分たちの巣箱の世界の中に留まりたいのであって、外世界からのあらゆる影響を「妨害」として感じてしまうのです。だからこそ、彼らは自らの毒を使ってそれを防御します。

しかし、この毒には、常にまた別の本質的な意味があります。ミツバチの体内において、この毒は常に極めて微量ずつ、身体全体へと巡らされているのです。この毒がなければ、ミツバチはそもそも生存することすらできません。

そして働き蜂を観察すると、次のことが分かります。働き蜂たちがあの小さな目（単眼）で見ることができないのは、この毒がその小さな目の中にも絶え間なく流れ込んでいるからなのです。

ところが、新しい女王蜂という「新たな太陽の作用」が現れたその瞬間に、この毒の働きが阻害されてしまいます。毒がもはや効力を保てなくなるのです。その結果、あの（盲目だった）小さな目が突然、見えるようになります。つまり、ミツバチが普段通りの状態でいられるのは、そして、いわば常に「薄暗がりの（トランス状態のような）世界」の中で生きていられるのは、まさに自分自身の毒のおかげなのです。

ミツバチたちが、あの袋のような細胞（王台）から新しい女王蜂が這い出てくるときに体験していることを、私が絵画的に描写するならば、次のように言わなければなりません。小さなミツバチは、常に薄暗がりの中で生きており、嗅覚と味覚の中間に位置する感覚（嗅覚的味覚）を頼りに、手探りで進んでいます。薄暗がりの中で生きており、それが彼らにとって心地よいのです。しかし、そこへ新しい女王蜂がやってくると、それはまるで、私たちが6月の暗闇を歩いているときに、蛍が一斉に光を放つかのような状態になります。新しい女王蜂は、ミツバチの群れにとってそのように眩しく輝くのです。なぜなら、その時にはもう彼らの毒が、彼らを内なる世界に留めておけるほど強く作用しなくなっているからです。

ミツバチには世界からの遮断、つまり「薄暗がりによる世界からの遮断」が必要です。彼らは外へ飛び立つときでさえ、その遮断を維持しています。なぜなら、自分の毒によって自分自身を内側に保つことができるからです。彼らが毒を必要とするのは、外から何らかの影響がやってくるのを恐れるときです。巣箱は、完全に自分自身の中に引きこもっていたいのです。

女王蜂が太陽の領域に留まり続けるためには、あのような角のある（六角形の）細胞の中にはならず、丸みを帯びた形の細胞（王台）の中にいなければならないのもそのためです。円形の空間にいて、彼女は太陽の影響下に留まり続けることができるのです。

そして皆さん、ここにおいて私たちは、あらゆる人間が養蜂に対して並外れた関心を持たざるを得なくなるような、ある真実へと突き当たります。

実は、ミツバチの巣箱の内部で起きていることは、ほんの少しの変形を除けば、そっくりそのまま「人間の頭の内部」で起きていることと同じなのです。ただ、人間の頭の中では、それらの物質が（蜂のように）外側へと大きく成長していかないというだけの違いです。

人間の頭の中には、神経（神経細胞）、血管（血液細胞）、そして個別に存在しているいわゆる「卵白細胞（タンパク質細胞）」があり、これらは丸い形のまま留まっています。これらも常に脳内のどこかに存在しています。このように、人間の頭の中にも3種類のもの（細胞）が備わっているのです。

ところで、神経もまた個々の細胞から成り立っていますが、それらは四方八方を肉体によって覆われているため、完全に成長して「独立した動物」になることはありません。しかし、これらの神経細胞は、本当は「動物」になりたがっているのです。小さな動物になりたがっているのです。

もし、人間の頭の中の神経細胞が、ミツバチの巣箱と同じ条件下で四方八方へと自由に発育していくことができたとしたら、その神経細胞は「雄蜂」になっていたでしょう。そして、血管の中を流れる血液細胞（赤血球など）は「働き蜂」になっていたでしょう。さらに、特の中脳に存在する卵白細胞は、最も短い発育過程をたどるため、これは「女王蜂」に匹敵します。

つまり、私たちは自分自身の頭の中に、ミツバチの巣箱と全く同じ「三つの力」を宿しているのです。

さて、働き蜂たちは植物から集めてきたものを家に持ち帰り、自分自身の体内でそれらを「蠟（ワックス）」へと加工し、あの素晴らしい細胞の巣作りをすべて行います。

皆さん、これと全く同じことを、人間の頭から出発する「血液細胞（赤血球など）」も行っているのです！ 彼らは頭部から全身の身体へと巡っていきます。そして、例えば皆さんが一つの「骨」、あるいは骨の破片を（顕微鏡などで）観察してみるならば、そこには至る所にあの「六角形の細胞」が存在しているのを目にするでしょう。

身体の中を循環している血液は、まさにミツバチが巣箱の中で行っているのと全く同じ仕事を果たしているのです。もっとも、他の細胞、例えば「筋肉」などにおいてもこれと似たようなことが起きていますが——筋肉細胞もミツバチの蛹の細胞とよく似ています——、筋肉の場合はあまりにも早く分解されてしまい、まだ柔らかい状態にあるため、私たちはそのことに（肉眼では）気づきにくいだけです。しかし、骨を研究してみれば、その事実を非常によく確認することができます。つまり、血液には「働き蜂」が持っているのと全く同じ「力」が備わっているのです。

このことは（胎児の）「発育の時間的な前後関係」と結びつけて研究することさえ可能です。人間の胚（胎児の芽）において、最初に形成され、その後もそのままの形で残り続ける細胞、すなわち「卵白細胞（タンパク質細胞）」は、胚の最も初期の発育段階からすでに存在している細胞です。これに対して、もう一方の「血液細胞」はそれよりも少し遅れて発生し、そして最も最後に「神経細胞」が形成されます。

これは、まさに巣箱の内部（女王蜂16日、働き蜂21日、雄蜂24日）で起きていることと全く同じ順序なのです！

ただ、人間は「一見すると自分だけに属しているように見える肉体」を構築するのに対し、ミツバチもまた一つの身体を構築します。それが「巣板（ワックスの細胞）」なのです。このミツバチの蛹の建築（巣作り）において起きていることは、私たちの身体の内側で起きていることと全く同じです。ただ、人間の体内においては、血液細胞が一種の「蛹のような物質」からそれ（骨などの組織）を作り上げているのだ、ということを証明するのが（ミツバチの巣のようには目に見えないため）もはやそれほど容易ではないというだけのことです。しかし、私たち自身の肉体も、ミツバチが籠や箱の内部で巣板を形作るのと全く同じように、一種の「蛹」から作られているのです。

ですから、事の真相はこういうことです。人間に「頭」があり、その頭が、実のところ「ミツバチの巣箱」そのものである大きな肉体（全身）に向かって働きかけています。そしてミツバチの巣箱は、あの「女王蜂と働き蜂との関係」の中に、人間の体内における「丸い形のまま留まる卵白細胞と、血液との関係」と全く同じ関係性を内包しているのです。

そして「神経」について言えば、それらは絶え間なく破壊され続けています。私たちは自分自身の神経システムを絶えず消耗させているのです。私たちは体内で一斉に「神経の合戦」を行うわけではありませんから——もしそんなことをすれば、私たちは毎年死んでしまうでしょう——、ミツバチが（用済みの雄蜂を一斉に虐殺する）「雄蜂の刺殺戦（Drohnenschlacht）」を行うようには見えません。しかしそれにもかかわらず、私たちの神経は毎年確実に弱くなっていきます。そして、このように弱りゆく神経によって、人間は実質的に老いて死んでいくのです。私たちはやがて身体を（若い頃のように）感じるができなくなります。人間が死ぬというのは、突き詰めれば常に「自分の神経を使い果たしてしまったこと」が原因なのです。

ここで、まさにミツバチの巣箱を表している「頭」を眺めてみるならば、この人間の頭の中にあるものはすべて（頭蓋骨によって）厳重に保護されていることに気づくでしょう。もし外部から何かがそこへ侵入してくるようなことがあれば、それは恐ろしい「侵害」となります。頭はそれに耐えることができません。これと同じように、あの「新しい女王蜂が誕生するプロセス」に、巣箱（の古い群れ）も耐えることができません。彼らは、この新たな女王蜂と一緒にいなければならないくらいなら、むしろ巣を捨てて飛び去る（分蜂する）ことを選ぶのです。

まさにこのような理由があるからこそ、養蜂という営みは、古来より常に「とてつもなく重大な意味を持つもの」と見なされてきたのです。人間はミツバチからハチミツの20パーセントを奪い取りますが、次のように言うことができます。「このハチミツは、人間にとって並外れて有益（滋養）である」と。なぜなら、人間は普段の食事からは、非常にわずかなハチミツしか摂取できないからです。植物の中において、ハチミツはごく微量ずつ、非常に分散した形でしか存在していないため、そうでなければ私たちは体内にごくわずかなハチミツしか取り込むことができません。

しかし、実のところ、私たちの体内にもすでに「ミツバチ」が棲んでいます。すなわち、私たちの「血液」のことです。この血液こそが、すでにこの（自然界のエッセンスである）ハチミツの力を、身体のかな部分へと運んでくれているのです。しかし、ミツバチが蟻を作り、それによって自分の身体、すなわち巣箱の巣板建築を作り上げるために必要としているものこそが、まさにこの「ハチミツ」に他ならないのです。

私たち人間に対して、とりわけ私たちが歳をとったとき——子どもの場合は、そのように作用するのは（ハチミツではなく）ミルク（母乳）なのですが——、ハチミツは並外れて好ましい（有利な）方法で私たちに作用してくれます。

というのも、ハチミツは私たちの「身体を形作る力（身体的形態形成：körperliche Gestaltung）」を促進してくれるからです。それゆえ、高齢になった人々には、ハチミツの摂取が格段に推奨されます。

ただし、食べ過ぎてはなりません。もしハチミツを過剰に食べ過ぎてしまい、単なる「付け合わせ（隠し味・適量の調味料）」としてではなく大量に摂取してしまうと、そこから（体内に）「形作ろうとする力」が過剰に形成されてしまいます。すると、その形態形成が「脆くパサパサ」になってしまい、あらゆる種類の病気を引き起こす原因になってしまいます。

もっとも、健康な人間であれば、自分がどれくらいの量を食べられるのか（適量か）を感覚的に察知することができます。そして、特に年齢を重ねていく人々にとって、ハチミツは並外れて健康に良い食物となります。なぜなら、ハチミツは実のところ、私たちの身体にしっかりとした「堅実さ（確固たる硬さ・安定性：Festigkeit）」を与えてくれるからです。

したがって、もし「くる病（Rachitis：英国病、骨軟化症）」の子どもたちに対しても、この規則を応用するならば次のようになります。——なるほど、生後まもない最初の数週間は、子どもは本来ミルクだけで生きるべき時期ですから、これをやってはなりません。そこではハチミツはまだ作用しないからです——。しかし、もし本当に「正しい分量（適量）」を処方して、ちょうどそのくる病の子どもが生後9ヶ月から10ヶ月ほどになったときにハチミツを与え始め、それから3歳から4歳になるまでこの「ハチミツ療法（ハチミツ食）」を続けさせるならば、くる病は今あるような深刻な状態（悪化）にはなり得ないでしょう。

なぜなら、くる病の本質とは、「身体が柔らかすぎる状態のまま留まり、内側に向かって潰れていってしまう（骨が変形してしまう）こと」にあるからです。しかし、ハチミツの内部には、人間に「形（Gestalt）」を与え、「確固たる硬さ（Festigkeit）」を与える力が宿っているのです。

まさにこうした（宇宙と人体の）相互関係こそが、徹底的に理解されなければなりません。ですから、次のように言うことができます。「本来であれば、ハチミツの生産、すなわち養蜂という営みに対して、今向けられているよりもはるかに多くの関心（注意）が注がなければならないのだ」と。

また、次のようなことも（自然界では）起こり得ます。自然界においては、あらゆるものの間に奇妙な相関関係が存在しているのです。そこでは、人間が通常の（物質的な）理性（Verstand）だけでは見通すことのできない「目に見えない法則」こそが、実のところ最も重要なものとなります。

なるほど、これらの法則は、常に「ほんの少しの自由」をあえて残すような形でしか作用しません。例えば、地球上における「男女の性別（比率）」がそうです。地球上には、完全に同数の男性と女性が生まれるわけではありませんが、「およそ同数」が生まれるようになっています。地球全体で見れば、それはほぼ均等なのです。これは「自然の英知（Naturweisheit）」そのものによってもたらされています。

以前にも皆さんに一度お話ししたと思いますが、もしも将来、人間が自分の意志によって「性別を意図的に作り出す」ことができるような事態が訪れたなら、その仕組みは一瞬にして大混乱に陥ってしまうでしょう。

しかし、実際の自然界は次のようになっています。例えば、ある地域が激しい戦争によって人口が激減してしまった場合、その直後には、人々の出生率が逆に高くなるのです。つまり自然界においては、「あらゆる欠乏は、それを補おうとする逆の力の中へと作用していく」のです。

今度は次のようなことも言えます。どこかある地域でミツバチたちがハチミツを探すとき、彼らは当然、植物からハチミツを奪い取っています。しかし彼らがハチミツを奪うその植物とは、私たちが普段から必要としており、私たちに様々な果実などをもたらしてくれる植物のことでもあるのです。

そして非常に奇妙なことに、養蜂が行われている地域では、養蜂が行われていない地域に比べて、果樹などの植物がより良く育つのです。つまり、ミツバチが植物からハチミツを奪い取ると、自然は怠けるどころか、かえってそのような実り豊かな植物を「より多く」作り出すのです。

ですから、人間はミツバチがもたらしてくれるハチミツから恩恵を受けるだけでなく、ミツバチが訪れてくれた植物からも、巡り巡って恩恵を受け取っていることになります。これは、私たちが本当にしっかりと観察することのできる、非常に重要な（自然界の）法則なのです。

しかし、これらすべてに結びついているからこそ、このような事柄を見通したとき、私たちは次のように言うことができます。「ミツバチという全体の結びつき、すなわち一つの有機体の本質の中には、自然によって、すでに全く驚くべき英知が注ぎ込まれているのだ」と。

ミツバチたちは、並外れて重要で、本当に驚くべき自然の力（宇宙の力）のもとに置かれています。それゆえに私たちは、これらの自然の力の中に（人間のエゴで）無闇に土足で踏みこむことに対して、ある種の畏怖の念を抱かざるを得ないのです。

実際のところ、今日でも物事は常に次のように証明されています。人間が自然の力の中に無闇に足を踏み入れるとき、人間は物事を良くしているのではなく、むしろ悪化させているのだと。

しかし、人間はそれを「すぐには」悪化させません。なぜなら、自然界の至る所には（人間の介入という）障害が存在しているからです。そのような障害があるにもかかわらず、自然は自分にできる最善の方法で作用し続けます。人間がいくつかの障害を取り除いてあげることで、自然の営みをいくらかスムーズにしてあげることは確かに可能です。そして例えば、昔ながらの藁の籠（丸型巣箱）ではなく、新しく工夫された便利な「木製の巣箱（近代的なラングストロス式などの四角い巣箱）」を使用することによって、人間は養蜂において、一見すると自然の営みを大いに楽にしてあげているように見えます。

しかし、ここで「人工的な養蜂（女王蜂の人工育成）」というテーマが浮上してくるのです。

皆さん、私が精神科学的な観点からだけでなく、（通常の科学の視点から見ても）「人工的な女王蜂の育成には、最初のうちは確かに見るべき利点がある」ということを理解していない、などとは思わないでください。なぜなら、それによって多くの事柄がスムーズになるのは当然だからです。

しかし、これによって、ミツバチの世代、すなわちミツバチの大家族におけるあの強固な結びつき（霊的な一体感）は、長期的に見れば確実に損なわれていくことになります。

今日（1923年現在）の段階では、ミュラー氏が説明してくれたようなすべての予防策（細心の注意）が守られている限り、人工的な養蜂はある意味で「称賛されるべきもの」としてしか世間一般には受け止められないでしょう。

しかし、50年後、あるいは80年後に事態がどうなっているかは、推移を見守らなければなりません。なぜなら、そこでは、これまでミツバチの群れの中で「有機的（生命の神秘として）」に作用していた特定の力が、単に「機械化」されてしまうからです。

「市場で購入してきた（人工育成の）女王蜂」と「働き蜂たち」との間には、女王蜂が自然そのものによって誕生した場合に生まれるような、あの「内面的な深い親族関係（霊的な絆）」を築くことは、もはや不可能なのです。

ただ、導入されたばかりの「ごく最初の時期（数十年）」においては、このような弊害はまだ表面化してこないというだけのことなのです。

もちろん、私は人工的な養蜂に対して狂信的反対運動が巻き起こるようなことは全く望んでいません。実際の生活（実社会の営み）において、そのような極端なことは本来できるものではないからです。

なぜなら、それは今から皆さんにお話しする別の事例とよく似ているからです。私たちは、いつか地球上から「石炭」が枯渇してしまう時期をおおよそ計算することができます。地球の石炭埋蔵量には限りがあり、いつかは尽きてしまうのです。だからといって、今日から石炭の採掘量を極端に減らし、地球そのものが寿命を迎えるまで石炭を持たせようとすることもできますが、「そうすべきだ」と言うことはできません。なぜなら、私たちは「未来に対するある程度の信頼」を持たなければならないからです。

私たちは自分自身にこう言い聞かせなければなりません。「確かに、私たちは地球からすべての石炭を奪い取っている。つまり、私たちの孫から石炭を奪っているのだ。しかし、未来の子孫たちは、石炭を必要としないような別の何かをきつと発明するだろう」と。これと同じことが、人工的な養蜂がもたらすかもしれない弊害に対しても当然言うことができます（過度に恐れて全面禁止にする必要はないという意味です）。

しかし、そうではあっても、自然界においてこれほど見事に形作られているものの中に、何か機械的なもの、人工的なものを持ち込むとき、私たちは実のところ「自然の調和を乱している（妨害している）のだ」という事実を意識しておくことは、やはり良いことです。

なぜなら、養蜂というものは、あらゆる時代において常に「全くもって驚くべきもの」と見なされてきたからです。とりわけ最古の時代において、ミツバチは「聖なる動物」と見なされていました。

なぜでしょうか？ミツバチが聖なる動物とされたのは、彼らのあらゆる仕事（営み）が、まさに「人間自身の内部で何が起こっているか」をそっくりそのまま私たちに教えてくれるからです。

人間が一塊の「蜜蝋」を手にするとき、彼は実のところ、人間の「血液」と「筋肉」と「骨」の間に位置する中間生成物を手にしていることになります。人間の体内（頭脳から全身へ向かうプロセス）においても、物質は一度この「蝋の状態（Wachsstadium）」を内面的に通過しているのです。ただ、人間の体内における蝋は、まだ（蜂の巣のように）固まることはなく、血液や筋肉、あるいは骨の細胞へと移行できる段階になるまで、流動的な状態に留まっています。つまり私たちは、蜜蝋の中に、「かつて自分自身の内側に宿っていた（組織を形作る）力」そのものを目の前に見出しているのです。

昔の人々が蜜蝋で蝋燭（キャンドル）を作り、それに火を灯したとき、彼らはその中に、本当にどこか奇妙で「神聖な行為（儀式）」を見て取っていました。「巣箱から私たちが採ってきたこの蜜蝋は、あそこでは固まっていた。しかし、火がこの蝋を溶かし、この蝋が蒸発していくとき、蝋はまさに、私たち自身の肉体の内部にあるのと同じ（流動的で霊的な）状態へと戻っていくのだ」と。

そして人々は、かつて、蝋燭の中で燃え盛る蝋の中に、「かつて自分たちの肉体の内部にあり、今や天（宇宙）へと向かって舞い上がっていく何か」を直感（予感）していたのです。

この直感こそが、人々の心を特別な「敬虔さ（Andacht：祈りの気持ち）」へと向かわせ、ミツバチを特別な「聖なる動物」として見なすことへと再び導いた理由でした。なぜならミツバチは、「人間が自分自身の内側で絶えず作り出さなければならないもの」を、外側の自然界で代わりに準備してくれているからです。

それゆえに、私たちがより古い時代へと遡れば遡るほど、当時の人々がミツバチという存在全体に対して、いかに深い「畏怖の念」を抱いていたかを発見することになります。もともと、それは当時の段階では（理論的なものではなく）野生的な直感であり、人々はそれを「啓示」として受け止めていました。その後、養蜂は人間の経済の営みの中へと組み込まれていきました。

しかし、ミツバチにおいて現れるこれらすべての事象の背景には、実に「全く驚くべき謎」ばかりが横たわっているのです。そして、私たちがミツバチを本当に心で感じ取ることができるのは、「人間の頭（頭脳）と、その肉体（全身）との間で、一体何が起きているのか」を、深く深く研究したときだけなのです。

ひとまず、皆さんには（本日お伝えしたかった）これらの補足（お話）をいたしました。

水曜日には次の講義（時間）があります。そこではおそらく、今回の話から色々な質問が湧き上がってくることでしょう。また、ミュラー氏ご自身にも何か思い浮かぶこと、付け加えたいことがあるかもしれません。

私はただ、皆さんにこれらの補足をお伝えしたかったのです。これらの事柄は疑いの余地がありません。なぜなら、それらは（単なる思いつきや推測ではなく）本物の「認識（霊的・本質的な真実の探究）」に基づいているからです。

しかし大切なのは、ここからさらに多くの事柄を、より明確に（皆さんの理解へと）深めていくことができるという点にあります。

第三講義

「労働者講義」より〔GA351（第9講）〕

ドルナハ、1923年11月28日

●基本的な視点

ミツバチは「視覚」ではなく
光の化学的作用に極めて敏感な生き物であり、
それを正しく理解しない限り、実験も養蜂も本質を見誤る。

動物の知覚は人間の「自覚的な五感」とは異なり、
化学的感觉（嗅覚・味覚的）が中心である。
猫のネズミ捕り、警察犬の追跡なども化学的作用による。
現代科学は「蚊を象にする」ような浅薄な解釈をしがち。
実践的な養蜂家は本能的に正しいことを行っている。

●要点

1. 科学実験（紫外線視覚説）への批判

フォレルやキューンらの実験
（アリやミツバチが紫外線を見ているとするもの）を強く非難。
これらは「見る」ではなく、化学的作用にすぎない。

例：

シアン化白金バリウムは紫外線で発光するが、
それは「見る」からではなく化学反応。
アリの実験も同じ。
紫外線領域に入ると強力な化学的侵食を受け、
アリはそれを「感じる」（特に眼を通じて）。
ミツバチは嗅覚と味覚の中間にある
「嗅覚的味覚」（化学感覚）で光を捉えている。

人間の色覚ですら眼内で微小な化学変化が起きているのに、
学者たちはそれを理解していない。

2. ミツバチの色覚・光覚の特徴

- ・ミツバチが明確に区別できる色：
黒・白・黄・灰色・青灰色（紫外線を含まない色）。
- ・紫外線領域に入ると強烈な化学的作用を感じ、
不快・異質として反応。
- ・色による違いは温度・化学的作用の差
（赤＝温かい、青＝冷たい）で感じ取る。
- ・複眼は薄暗い光感覚、単眼（3つ）は特に敏感で、
新しい女王蜂の卵・幼虫が放つ微かな「輝き」を強く感じる。

3. 分蜂（巣分かれ）のメカニズム

新しい女王蜂（特に卵・幼虫の段階）が最も強く「輝く」ため、古い女王蜂を連れた群れが巣を離れる（第1分蜂）。古い女王蜂を捕まえて戻せば群れは落ち着くが、それは「若い女王蜂の存在を感じて飛び立った」という説を否定するものではない。

（例え：ストライキで職場を出た労働者が食料が尽きて戻るのと同じ。最初に不満があった事実は変わらない。）

4. その他の実践的課題への回答

- ・未受精女王蜂：雄蜂しか産まず質が悪い。
- ・作業時の光：ミツバチにとって強烈な化学的「振動」となり、神経質に乱舞させる（見えるからではなく、化学的作用で内部が乱れる）。
- ・若いハチは刺さない：針や器官が未成熟のため。
- ・人工飼料（砂糖＋カモミールティー＋塩）：
砂糖だけは不自然。
ミツバチは冬に砂糖をハチミツに変換する必要があり、弱い個体は消耗する。
カモミールは植物内で澱粉→糖
→ハチミツ化を助ける成分を含むため、体内変換作業を肩代わり。
塩は消化を助ける。

●本文

皆さん、おはようございます！

何か質問したいことなど、思い浮かんだことはありますか？

（ここで『スイス養蜂新聞 新シリーズ』1923年2月号・3月号（第2・3号）に掲載された、オルデンプルクのビュッテル＝レーペン教授による論文「蜂は私たちに見えない色を見ているか？」が朗読される。）

シュタイナー博士：

さて、この件について少しお話ししましょう。フォレルや、キューン、ポールらが行ったこれらの実験は、現在いかに深く考えもせずに実験が推し進められているかを実によく示しています。

もちろん、実験の解釈としてこれほど不条理なものは他に考えられません！

考えてみてください。それなら私も次のような実験を行うことができるはずです。ある物質があるとして。そのような物質は実際に存在するのですが、それは紫外線、つまり青や紫を越えたところにある色に対して特に敏感な物質です。例えば、この記事にも登場するシアン化白金バリウムがまさにそれです。この物質は、他の色をすべて遮断しても発光します。

ですから、私も赤、オレンジ、黄、緑、青、インディゴ（藍）、そして紫を遮断します。つまり、手元には赤、オレンジ、黄、緑、青、インディゴ、紫があるわけです。ここで遮光板を使い、スペクトルのこれらをすべて覆い隠します。すると、ここには人間には見えない、いわゆる紫外線だけが残ります。

そこに、白い粉末であるこの物質「シアン化白金バリウム」を入れ、シャッターを閉めると、これが発光し始めます。私たち人間は、この暗くした部屋の中では何も見えません。そこで、これらの光線を引き込み、引き込む場所以外を遮断して、紫外線だけを中に入れます。

しかし、そこにシアン化白金バリウムを入れると、何が起こるでしょうか？ その時、この物質が「見える」のです。

アリを実験に使う場合も、やっていることはこれと何ら変わりません。私はシアン化白金バリウムの代わりにアリを使います。アリたちが砂糖に向かって進むので、私は「アリは見えている」と言います。しかし、シアン化白金バリウムが発光するのに「見る」必要がないのと同様に、アリたちも見る必要など微塵もないのです。ここで私が主張できる全容は、どこかに何らかの物質があれば、それがアリに影響を及ぼすということだけです。それ以上のことを主張してはなりません。つまり、件の学者たちはこの上なく浅はかであり、純然たる妄想にすぎない事柄を主張しているのです。

唯一主張できること、そしてこの記事に基づけば、眼にニスを塗るともはや影響が生じなくなることから証明されていること、それは「感覚器官を通じて、これらの昆虫に多少なりとも影響が及んでいた」ということです。さらに特徴的なのは、この学者がミツバチで気づいたことを、アリやスズメバチにそのまま当てはめている点です。このことから、いかに深く考えもせずにこうした実験が行われているかが分かります。

しかし、ここからさらに次のような話になります。ここから先へ進むと（図を参照）、いわゆる紫外線に行き着きます。つまり、ここには赤、オレンジ、黄、緑、青があり、さらにインディゴ、紫と続きます。こちら側には赤外線があり、あちら側には紫外線があります。このように右側に紫外線があるわけですが、紫外線には「非常に強い化学作用を及ぼす」という特有の性質があります。これは彼自身も記事の中でそう表現しています。したがって、紫外線の領域に持ち込まれたものは、強力な化学的侵食を受けます。その結果、そこにアリを一匹連れていくと、そのアリはすぐに強力な化学的侵食を受けることになります。アリはそれを感じ取ります。まさにその通りで、アリはそれを主に眼で感じるのです。それは、紫外線の中に置かれたときに、誰かにむず痒く（くすぐったく）されているかのような感覚であり、シアン化白金バリウムが化学的な領域に置かれたときに影響を受けるのと全く同じです。まさにそれと同じことなのです。部屋の中をすべて遮光し、紫外線だけを室内に残したとすると、アリはすぐに「ここで何かが起きている」と気づきます。

※図



赤外線 (ultrarot)

可視光線 (r, o, g, b, i, v)

〔赤 (Red)、橙 (Orange)、黄 (Yellow)、緑 (Green)、青 (Blue)、藍 (Indigo)、紫 (Violet) の頭文字〕

紫外線 (ultraviolet)

とりわけ、そこにアリの卵（幼虫）がある場合、それらは完全に変化してしまいます。この強力な化学作用が起きれば、瞬時に死滅してしまうでしょう。だからこそ、アリたちは卵を救い出すのです。したがって、この記事で扱われているのは、化学的な方法による影響にほかなりません。私が先日主張したことはやはり正しいのです。私はこう言いました。「ミツバチは一種の『嗅覚的味覚』、つまり臭いと味の間後に位置するような感覚を持っている」と。ミツバチが感じ取っているのはこれであり、アリの場合も同様なのです。

この紳士（学者）たちは、問題の本質をほとんど理解していません。例えば、人間自身が色を感知するとき、紫色の光線を感知するだけでも、眼の中で小さな化学変化が起きていることすら彼らは知らないのです。人間の色知覚においてさえ、すでに化学的な方向への働きかけが存在しています。したがって、ここでミツバチを対象に調査されたことの全容は、ミツバチが紫外線の中で生きているときに、その体内で生じる「内部の化学変化への影響」にほかなりません。

ミツバチが自由に感知できるのは、黒、白、黄、灰色（これは単に暗い白にすぎません）、そして青灰色の領域にあるものすべてです。なぜなら、これらの色には紫外線が一切含まれていないからです。つまり、ミツバチが紫外線の中に入ったときにそれほど強く感じる「化学的な影響」は、これらの色には存在しません。ミツバチが黒、白、黄、青灰色の領域から（紫外線の）領域に入ると、紫外線において自分にとって異質なものを感じ取ります。そこではミツバチはどうすることもできません。すべては、ミツバチが一種の「嗅覚的味覚」を持っているという点に帰結します。私たちは、匂いを嗅ぐこと（嗅覚）と味わうこと（味覚）を明確に区別していますよね。味覚とは、とりわけ化学的な感覚です。それは完全に化学に基づいています。ミツバチは、この嗅覚と味覚の間に位置する感覚を持っているのです。

ミツバチが暮らす巣箱の前面に色を塗ると、ミツバチがそれを見分ける能力を持っているという事実も、私の主張と矛盾するものではありません。なぜなら、考えてもみてください、それぞれの色は異なる化学的作用を及ぼし、異なる熱を持っているからです。

例えば、ある面を赤く塗ったとします。ミツバチがこの赤に近づくと、ミツバチにとっては温かくなります。ミツバチが、その温かさを、たとえば青の領域に入ったときとは違うものだとは分らないはずがありません。青い面では冷たくなるのです。つまり、ミツバチは赤の温かさと青の冷たさを感じ取っています。したがって、ミツバチがこれらを区別できるのは当然のことなのです。

しかし、その事実から「ミツバチは、人間が眼で見ると同じように眼で物を見ている」という結論を導き出してはなりません。それは当然のことながら、まったくのナンセンスです。

人々が行っている他の多くの実験についても、全く同じことが言えます。私は以前、これらすべての実験が結局のところ何を意味しているのかをお話ししました。世の中にはハエトリグサ（ヴィーナス・フライトラップ）という植物があり、触れるとすぐに葉を閉じます。皆さんが誰かに殴られそうになったとき、つまり触れられそうになったときに手を握りしめて拳を作るのと全く同じように、ハエトリグサは虫が近づくのを待ち、そして葉をパタンと閉じるのです。

すると人々はこう言います。「だからこの植物、ハエトリグサには人間のような魂があるのだ。虫がやってきたことを感知して、葉を閉じるのだ」と。——ですが皆さん、私はいつもこう言っています。ある動物が近づいてきて、その装置の一部に触れると、装置がすぐにパチンと閉じてその動物を捕まえてしまう、という仕組みの装置を私は知っています。それは「ネズミ捕り」です。もしハエトリグサに魂があると言うのなら、ネズミ捕りにも同じように魂があると言わなければならないのです。ですから、ミツバチが紫外線の中で

何らかの行動を起こすからといって「見ている」とするならば、シアン化白金バリウムにも「見ている」と言わなければならないのです。

もし人々が確かに考えを進めるならば、非常に奇妙な事実突き当たるはずですが。というのも、シアン化白金バリウムは極めて興味深い物質だからです。シアン化白金バリウムには、他の成分に混ざって「バリウム」が含まれています。これはアルカリ土類金属の属に分類される白い金属です。興味深いことに、こうした金属は人間の生命活動においても、ある役割を果たしています。私たち人間は、臍臓の中にこうした金属を持っていなければ、摂取したタンパク質を体内で正しく作用させることができません。それらはどうしても必要なのです。つまり、私たちが消化において健康な消化活動を行う仕組みと、このバリウムという物質は深く結びついているのです。

プラチナ（白金）は特に価値のある金属であり、皆さんもご存じの通り、格別に硬く、重い貴金属です。これらの金属はすべて、感情や感覚と結びついているという共通の性質を持っています。

そして、もう一つのことを思い出してください。この物質の中には「シアン化合物（Zyanür）」、つまり一種のシアン酸、青酸も含まれています。以前、人間がまさに筋肉を動かすとき、その体内では常にわずかな青酸が生成されているとお話ししました。つまり、この「シアン化白金バリウム」という物質全体が、人間の体が絶えず内部で作り出しているものと極めて類似しているのです。

このことから分かるのは、人間自身もまた、自分の「眼」ではなく「身体」において、紫外線（すなわち光の化学的成分）の中で起きていることに対して非常に敏感であるということです。したがって、私たち人間も、こうした事象にきちんと注意を払うことさえできれば、それを判断することができます。

しかし、このような事象——つまり、シアン化白金バリウムが格別に侵食を受けるような場所（紫外線領域）には、ある種の「感知」が存在しているということ——に注意を向けられるようにしてくれるのは、まさに精神科学だけなのです。

そして、この感知能力は、ミツバチにおいて最高に強い形で存在しています。ミツバチは、まさに極めて特別な強烈さで色を感知しているのであり、自ら発光する生き物が現れたときにだけ、その色が極めてかすかに光るのを「見る」のです。

だからこそ、私は「全体として、ミツバチの周囲はただ薄暗いだけだ」と言ったのです。しかし、新しい女王蜂が登場すると、ミツバチたちにとっては、まるで私たちが6月に見るホタルのように女王蜂がほのかに輝いて見えます。とはいえ、それはミツバチの「3つの小さな眼（単眼）」にとつてのことであり、もう一方の大きな眼（複眼）は、ある種の光の感覚を持つてはいるものの、それは薄暗がりのようなものです。そして、あたりが薄暗く、遮光された状態になると、この生物はまさに、化学的作用を及ぼす「紫外線」や、化学的作用をまったく及ぼさない「赤外線」といった色の存在を身体で感知するのです。

この『養蜂新聞』の記事の最後には、「赤外線については後日報告する」と書かれています。——確かに、ミツバチが赤外線の領域に入れば、全く異なる振る舞いをするでしょう。なぜなら、そこにはもう化学的作用が存在しないからです。

これらの実験における「事実そのもの」は正しいのです。しかし、フォレルやキューンが下したような結論を導き出してはならない、ということを明確に理解せねばなりません。それは、実験をいかにも深く考えずになぞっているだけです。それなのに人々は「これは非の打ち所がないほど証明された」と言います。——ええ、もちろん、ネズミ捕りにも魂があると主張するような人にとっては、非の打ち所がない証明でしよ

う！しかし、事象の本質を本当に正確に追究するために「自分がどこまで進むことができるか、どこまで思考を伸ばせるか」を知っている者にとっては、そんなものは全く証明になっていないのです。

私たちは人生において、物事を正確に突き詰めて考えることにまったく慣れていません。人間というものは、どこかでちょっとした出来事に遭遇すると、「蚊を象にする（針小棒大に言う）」と言われるような大げさな表現をしてしまいます。これは、私たちの学者たちにもよくあることです。彼らは何か一つの事象を手にとると、そこで吟味することをせず、目の前にある事柄だけに引きずられて思考を暴走させてしまいます。その結果、妄想染みたものが出来上がり、まさに「蚊から象が作られる」ことになるのです。

現代の科学が何かを主張するとき――彼らはすべての学会誌や専門誌を牛耳っているため、その権力によって主張を通してにすぎませんが――、そこで提出された事柄に対して、通常は誰も反論しません。しかし最終的には、そのような代物は何の役にも立たないことが明らかになるでしょう。

皆さんが養蜂の全体を見渡してみれば、とりわけ優秀な養蜂家たちほど、フォレルやキューンがそこで発見したようなことにはほとんど関心を払っていないことに気づくはずです。なぜなら、養蜂家たちは実践的に進めなければならない、実践においては必要なことをすでに本能的（直感的）に行っているからです。

もちろん、この本能的に行っていることを（知識としても）知っているに越したことはありません。私が普段観察している限りでも、養蜂家はおそらく、外で雪が降っている日曜日の夜などに、興味本位でこうした（科学的な）記事に目を通すことはあるでしょう。しかし、その記事を読んだところで、実際の仕事で応用できることはほとんどありません。なぜなら、そうした記事からは具体的な実践の手がかりが何も得られないからです。

――さて、皆さんには、まだまだ他にも聞いてみたい興味深い事柄がきっとあることでしょう。

ミュラー氏：

私は女王蜂についてももう少しお話ししたいと思います。私たちはすでに、女王蜂が卵を産むということについて話し合いました。しかし、たとえば悪天候のときなどには、未受精の女王蜂が生まれることがあります。そして、彼女たちの卵からは雄蜂が生まれますが、これらには何の価値もありません。

また同様に、女王蜂が死んでしまい、もはや若い幼虫がいなくなった場合、働き蜂の中から一匹のハチが女王蜂として育てられます。このハチもやはり卵を産みますが、これらも未受精卵であり、そこからは質の劣る雄蜂が生まれてしまいます。

それから、分蜂（巣分かれ）の状態についても少しお話しさせてください。最初の分蜂（第1分蜂）では、まだ新しい女王蜂はいません。新しい女王蜂はまだ自分の王台（細胞）の中で眠っています。古いハチたちだけが、（旧）女王蜂と一緒に巣を出ていくのです。ですから、私が女王蜂を捕まえば、ハチの群れ全体を再び巣箱に戻すことができます。

ハチの視覚に関して言えば、私たちが巣箱で作業をしているとき、光が強すぎると――それは養蜂家にとってはまだ暗すぎるくらいの光なのですが――、ハチたちはものすごく興奮して騒ぎ立ちます。

分蜂時のハチの刺傷（刺すこと）について言えば、私たちの間では、第1分蜂の群れは少々神経質であることが一般に知られています。第2分蜂（後蜂）の群れでは、そうしたことはあまりありません。私たちは、若いハチはまだ刺さない、つまりまだ針を使わないという立場をとっています。

地域によっては、牧師に祝福をしてもらうまでは、ハチミツを収穫しないところもあります。8月8日は「ハチミツの日」とされています。

また、分蜂群が飛び立ち、女王蜂がどこかに止まったとき、それで分蜂が完了した（落ち着いた）ように見えることがありますが、実際にはそうではない、完全にそうとは言えないこともあります。

シュタイナー博士：

私が申し上げたことに関して言えば、要するに、若い女王蜂が姿を現したとき、つまりミツバチたちにとって彼女がホタルのように輝いて見えたときに、古い女王蜂が群れを連れて巣を出ていく、ということに尽きます。

分蜂の群れが飛び立った後、あなたが仰るように、古い女王蜂を捕まえれば、その群れを再び巣箱に戻すことができ、ハチたちはまた静かに働き始めます。しかしだからといって、「3つの小さな眼（単眼）を通じて若い女王蜂が放つ強烈な光の印象によって、群れが最初に巣を飛び出した」という私の主張が間違っていることにはなりません。その事実によって、私の説が覆されるわけではないのです。

ここでは非常に論理的に考えを進めなければなりません。人生における一つの例を挙げてみましょう。皆さんがどこかで雇われて働いていると想像してください。ある日、経営陣のやり方に何か理不尽な点があると感じ、皆と一緒にストライキを起こさなければならないという結論に達しました。仮に皆さんがストライキを決行したとします。つまり皆さん、そこで「分蜂（巣立ち）」をしたわけです。

さて、しばらく時間が経ち、もはや食料を買うお金がなくなってしまったとします。皆さんは飢えに苦しみ、やむを得ず再び職場に戻っていきました。このとき私は、「では、最初に経営陣のやり方に不正があったというのは嘘だったのだな？！」と言うことができるでしょうか？（——いいえ、言えません。）

なぜなら、飛び立った分蜂群から古い女王蜂を取り上げ、再び巣箱に戻した場合、ハチたちは（自分たちを率いていた）古い女王蜂がもういないことを察知し、否応なく、苦渋の決断として（渋々ながらも）新しい女王蜂を受け入れざるを得なくなるのだ、ということを考慮しなければならないからです。

したがって、私の言ったことが間違っているわけではなく、まさにこれらすべての事象を「正しい光（視点）」のもとで観察することが重要なのです。

シュタイナー博士：

それから、あなたは第1分蜂（前蜂）について、そこにはまだ新しい女王蜂が存在しておらず、そのような話（まぶしさを嫌って逃げ出すという話）は当てはまらないのではないかと仰いましたね。では、その新しい女王蜂の「卵」すらまだ存在していないような状態での第1分蜂を、あなたは実際に観察されたことがあるのですか？

ミューラー氏：

新しい女王蜂が孵化する（殻から出る）9日前です。

シュタイナー博士：

まず、若い女王蜂はその王台の中で卵として存在しています。そして16日後に成長した女王蜂となり、殻から孵化してきます。その9日前ということは、彼女はすでに卵か、あるいは幼虫の状態でそこにいるわけです。

ここで極めて独特なのは、その「卵」の段階が最も強烈に輝くという点です。輝きは成長とともに次第に衰えていき、若い女王蜂となっても、しばらくの間はまだ輝きを放ち続けます。しかし、最も強く輝くのは、彼女がまだ卵や幼虫のときなのです。したがって、最も過敏な（光に敏感な）ハチたちで構成された第1分蜂の群れが、そのタイミングで巣を離れていくというのは完全に説明がつきます。なぜなら、若い女王蜂がそこに存在しない限り、何事も起こらないからです。では、若い女王蜂とは何でしょうか？ 卵がそこにあるだけでも、彼女はすでにそこに存在しているのです。

女王蜂が未受精のままでいると、働き蜂を生み出すことができず、雄蜂ばかりが生まれてしまいます。しかもミュラー氏が仰ったように、質の劣る雄蜂になってしまいます。これはまさにその通りです。ですから、こうした未受精の女王蜂、いわゆる「偽女王」による育児は、そこに働き蜂が加わらないため、使い物になりません。そのため、ハチたちがまさに「太陽光」の影響下で婚姻飛行を行えるように配慮せねばならないのです。

ここでもまた、化学的な作用がいかに大きな役割を果たしているかが分かります。なぜなら、そこで起きていることのすべては、ミツバチの「性的な本質（生殖器系）」への働きかけとして生じているからです。そして、この性的な本質とは、完全に化学的なものにほかなりません。女王蜂がはるか高空へと飛び立っていくとき、当然ながらその影響は（目に見える）光によってもたらされるのではなく、光の作用に含まれている「化学的な成分」によってもたらされます。まさにこの点からも、ミツバチがいかに化学的なものに対して繊細で敏感であるかがお分かりいただけるでしょう。

また、あなたは「巣箱で作業するときに人間は当然光を必要とするが、それがハチたちを落ち着かなくさせる」とも仰いました。ここで、少し具体的に想像してみてください。ミツバチは光を通じて、恐ろしいほど強烈な化学的作用を感じ取っています。人間がやってきて光を入れ、急にあたりを明るくすると、それはミツバチにとって、皆さんがどこかに座しているときに窓を開け放たれ、強烈な突風が襲ってきたときと同じような衝撃として作用するのです。

ミツバチは光を感知しています。そこが特に明るくなったからではなく、それを一種の「振動」として感知し、内部から完全に攪乱されてしまうのです。ですから、私が実際にその現場を見たわけではありませんが、こう言うこともできるでしょう——養蜂家が光をたくさん入れすぎると、ハチたちはものすごく神経質な振る舞いを見せ、内面的に落ち着きを失い、光がもたらす化学的作用の中に巻き込まれて、まるで小さなツバメのように上下に飛び回り始めます。あちこちへと乱舞するのです。これこそまさに、彼らが内面的に不穏さを感じている兆候にほかなりません。

考えてみてください。もしミツバチがただ光を「見て」いだけなら、これほど神経質な振る舞いはしないはずです。もしそうなら、光が当たらないように、どこか隅っこの方へ這い込んで身を隠すでしょう。

これらすべての事象において当然考慮すべきなのは、あらゆる場所に「人間の受ける影響とは決して同一視してはならない影響」が存在している、という点を明確に認識することです。さもないと、何でもかんでも擬人化してしまい、「人間がこのように見るのだから、動物も同じように見るのだろう」という風にしか物事を想像できなくなってしまいます。——最初からそのような決めつけをしてはなりません。

皆さんもおそらく、次のような現象を目にされたことがあるでしょう。こうした事象をよく観察している人なら気づくことができるはずです。経済的な調理用ストーブがほんの少し暖められている台所を想像してください。猫はストーブに火が入っていると、その上に乗るのを好み、体を丸めて目を閉じ、そこで眠ってしまいます。

さて、どこか家具の隙間に、猫が眼では絶対に捉えられない位置にネズミが一匹いるとします。すると、猫は目を一度も開けることなく突然ストーブから飛び降り、確実にネズミに向かって突進することがあるのです。完全に間違いのない確実さでネズミへ突進し、皆さんが「一体何が起きたのだろう」と考え終わるよりも早く、猫はすでにネズミを口に咥えて戻ってきます。

さて皆さん、猫がネズミを見たのだ、とは当然主張できないはずです。なぜなら猫は目を閉じて眠っていたのですから。すると人々はこう主張します。「猫は非常に鋭い聴覚を持っており、その極めて鋭い聴覚によってネズミを感知したのだ」と。——しかしそうすると、今度は「猫は眠っているときにこそ、最もよく耳が聞こえるのだ」と主張しなければならなくなります。これもまた、かなり疑わしい主張です。というのも、視覚や聴覚というものは、本来は覚醒しているときにだけ大きな役割を果たす感覚だからです。これに対して、たとえば「嗅覚」は、睡眠中にも極めて大きな役割を果たします。嗅覚は化学的に作用するのです。そして、鼻や脳の全体で化学的な変化が起こります。

それに加えて、皆さんは何か音が聞こえたからといって、すぐにその方向へ正確に飛びかかることができますでしょうか？ 決してそんなことはありません。聴覚というものは、それほど瞬時に（空間的な）方向を定位できるような感覚ではないのです。ですから、猫のこの行動が聴覚によるものであるはずがありません。

では、猫において顕著に見られるものは何かというと、あの剛毛のような髭に備わっている、恐ろしいほど鋭い嗅覚なのです。この恐ろしく鋭い嗅覚がなぜそこに存在しているかということ、そうした一本一本の髭の内部が、実は管のようになっているからです。その髭の内部には（黒板に図を描きながら）ある物質が入っており、この物質が、ネズミが存在することによって化学的に変化するのです。ネズミが周囲にいないとき、この物質は化学的にある特定の状態を保っています。しかし、ごく離れた周囲のどこかにネズミが一匹でもいれば、猫は自分の口髭が受ける化学作用によって、ネズミの存在を察知するのです。

以前私は、3階に住んでいる人が、下の地階に何か特定の物質、たとえば蕎麦があるだけでそれを察知し、体調を崩してしまうことがあるというお話をしました。嗅覚が確実に作用しているということは、誰もが納得できるはずですが、さもないと、警察犬など存在できるわけがありません。警察犬は眼ではほとんど何も捉えていませんが、その嗅覚によって極めて多くのことを成し遂げています。

このように動物界における「確実さ」は、眼（視覚）ではなく、化学的な作用に帰せられるべきもののなのです。そして紫外線のある領域において、その化学作用は最も強烈に働きます。

もし皆さんが警察犬に特別な好意（恩恵）を施したいと思うなら、一緒に歩くときにいつも遮光ランタン（特定の光だけを通す提灯）をかざしてあげて、犬を常に紫外線の中に置いておいてあげるのが良いでしょう。そうすれば、警察犬はさらに確実に物事を見つけ出す（追跡する）ようになるはずです。なぜなら、そのとき犬の嗅覚毛（犬の場合もやはり嗅覚を司る毛です）において、さらに確実な化学作用が生じることになるからです。

ですから、動物について皆さんが知り得るすべての事柄は次の点に帰着します。すなわち、動物界に一歩足を踏み入れた途端、動物におけるそうした（人間のような）「自覚的な五感」という考えは脇に置かねばならず、「嗅覚」や「味覚」、つまり【化学的な感覚】へと視座を下げなければならない、ということです。

それから、あなたは「若いハチは刺さない」とも仰いましたね。若いハチはまだ刺すための器官や、内部の組織全体がそこまで十分に成熟していないというのは、実によく説明のつくことです。それは加齢（ハチが年老いていくこと）にともなって初めて形成されます。これは何ら特別なことではなく、私がこれまでに申し上げたこととも矛盾しません。

(ここでミュラー氏が人工給餌について質問する。氏は水4リットル、砂糖5キロを使い、そこにタイム、カモミールティー、そして塩をひとつまみ加えているという。これがどのような効果をもたらすのか、という問いである。)

シュタイナー博士：

その件については、非常に特別な説明を施すことができます。なぜなら、あなたがそこで本能的に実践されているような原理上に、私たちのつくる医薬品の一部が成り立っているからです。すべてではありませんが、私たちの医薬品の多くがその原理に基づいています。

もし皆さんがミツバチに(ただの)砂糖を餌として与えているのだとしたら、それは本来、まずは「不自然な行為」と言わざるを得ません。というのも、ミツバチは自然の摂理として、砂糖ではなく「ネクトル(花の蜜)」や「ポレン(花粉)」を自らの食物としているからです。

ミュラー氏：

(補足ですが)たとえば森林蜜(甘露蜜)の場合は、巣箱から、それこそ育児蜂児圏の巣板からさえも抜き取って空にしなければなりません。さもないと、ハチたちが下痢(赤痢)を起こしてしまうからです。また、ハチたちの手元に2~3キロしか蜜が残っていないこともあり、それでは(冬越しに)足りないのです。

シュタイナー博士：

ミツバチは本来、砂糖を食べるようにはできておらず、基本的には「ハチミツ」を食物とする習性を持っています。それが彼らの本質なのです。

ここで非常に独特なのは、ミツバチは冬の間、自分が摂取したどんな食物であっても、それを一種の「ハチミツ」へと変化させるという点です。食物というものは、それを摂取した生物の内部で再び作り変えられるものだからです。つまりミツバチには、冬の間自分が取り込んだものを、消化のプロセスを通じて一種のハチミツへと変える能力が備わっています。

ですから、これが本来、ミツバチを(最初から)ハチミツで育てる場合に比べて、【どれほど大きなエネルギー(力)を必要とするプロセスであるか】を想像していただけるはずです。最初からハチミツを与えられていれば、ハチたちは自分の有機体(体内)の内部で、わざわざ砂糖をハチミツへと作り変えるためにそのエネルギーを消費しなくて済むのです。

では、自分自身の内部で砂糖をハチミツへと大々的に作り変えることができるのは、一体どのようなミツバチでしょうか？ それは、十分に強い(生命力のある)ハチ、すなわち(養蜂家にとって)役に立つハチたちだけです。弱いハチたちに、体内で砂糖をハチミツへと変化させるような大仕事をさせることはできません。そのため、弱いハチは多かれ少なかれ役に立たなくなってしまうのです。

しかし先ほども申し上げたように、あなたがたとえばここに「カモミールティー」を加える理由については、私たちにとって非常によく説明がつきます。なぜならそれによって、ハチが本来なら自分の体の中で行わなければならない作業の一部を、あらかじめあなたが肩代わりしてあげていることになるからです。

砂糖にカモミールティーを混ぜると、そのカモミールの成分は、植物の内部において「ハチミツを作り出す」働きをしていたものそのものとなります。というのも、カモミールティーに含まれているこの物質は、何もカモミールだけに特別に含まれているわけではなく、体内に花蜜を宿しているあらゆる植物に含まれている

からです。ただし、カモミールはこの物質を当然ながらより高い割合で含んでいるため、それゆえに（ハチが蜜を集めるための）蜜源植物としては、むしろ適していません。

しかし、ある植物が存在するとき、その植物の内部には「澱粉」と呼ばれるものがたくさん含まれています。澱粉には、絶えず糖分へと変化しようとする傾向があります。そして植物の内部では、カモミールの汁がこの澱粉に働きかけ、植物内の糖汁を「ハチミツ」の方向へと方向づけているのです。したがって、あなたがハチにカモミールティーを与えると、ハチの体内における「ハチミツ化作用」を内側からサポートすることになります。カモミールティーを混ぜ合わせることで、あなたは砂糖をはじめからハチミツに近い状態にしているのです。

これは、私たちが医薬品をつくる時の手法と全く同じです。何らかの金属（鉱物）があるとして、それを人間にそのまま与えても、消化のプロセスでそのまま体外に排出されてしまうため、効果がありません。そのため、体内に吸収されやすくなるように、それを何か別の物質と混ぜ合わせる（処方する）必要があるのです。あなたが砂糖に加えているカモミールティーも、まさにこれと同じ役割を果たしています。

また、「塩」をさらに添加しなければならない理由は、塩にはそもそも、そのままでは消化できないものを消化できるようにする性質があるからです。人間が本能的にスープなどに塩を入れるのは、塩には「体内で素早く拡散し、食べ物を消化しやすくする」という特有の性質が備わっているからなのです。

第四講義-1

「労働者講義」より

〔GA351（第10講）〕 ドルナハ、1923年12月1日

●基本的な視点

ハチミツの効力は化学成分ではなく、
地球・宇宙の形態形成力（六角形力）そのものにある。

現代科学が言葉遊びで本質を見失っているのに対し、
古い実践知と精神科学的観察は一致する。

私たちは本物のハチミツを、正しい理解のもとで活用すべきである。

●要点

1. ハチミツ療法の実践報告

スイス児童養護施設でのパウラ・エムリヒ博士の報告を紹介。
栄養不良の子どもたちに
適度に温めたミルクに溶かしたハチミツを与える療法を行い、
以下の顕著な効果を確認：

- ・赤血球数の大幅増加（例：53%→82%、55%→74%など）
- ・リンパ腺の改善、肺尖カタルの軽快、体重増加
- ・特に学齢期（7～14歳頃）の子どもたちに効果が大きい

2. 現代科学への痛烈な批判

科学は食物を化学成分

（カゼイン・脂肪・糖・塩類）に分解して評価するが、
それは無意味である。

有名な生理学者ブンゲの弟子の実験：

合成ミルク成分だけではハツカネズミは数日で全滅したのに対し、
自然のミルクでは立派に育った。

これを「ビタミン」という新物質で説明するのは、
「貧困は貧困（pauvreté）から来る」という
言葉遊びと同じ欺瞞であると批判。

3. 本質的な説明：六角形形成力（ケイ酸・石英の力）

地球内部の力は石英の六角柱結晶として現れる。

人間の体内にも同じ力が働き、頭から下方へ流れるが、
完全結晶化せず「流動的なケイ酸の汁」として存在。

これが生命の基盤となる。

ミツバチは植物の蜜を体内で処理し、
この六角形形成力を蜜蝋の六角形の巣房に結晶化させる。
ハチミツは、この六角形形成力を人間に届ける最も優れた食物。

- ・年齢による使い分け：
幼児 → ミルク（六角形力の影のようなイメージ）
学齢期の子ども → ハチミツ＋ミルク
大人・高齢者 → ハチミツ（単独）または
高度希釈ケイ酸で事前準備してからハチミツ

ハチミツは「控えめに」摂取すべきで、過剰は胃を痛める。

4. 養蜂家とミツバチの「魂の結びつき」

古くからの慣習「養蜂家が死んだら蜂に知らせる」には根拠がある。
ミツバチは人間の感情・オーラ・生命の波動を極めて繊細に感知する。

恐怖や怒り → 蜂が攻撃的になる（血液の状態変化を察知）
長年世話した養蜂家が亡くなると、
蜂は新しい環境に適応できず衰弱・死滅しやすい（実例あり）

5. 5月3日の天気俚諺の真実

「聖十字架発見の日（5月3日）に雨が降ると、
その年のハチミツが不作」という農民の言い伝えは正しい。

理由は宇宙的な働きにある。

- ・5月上旬の太陽は牡羊座の力を帯び、
花に強い甘味（ハチミツ形成力）を与える。
- ・雨が降ると地球の力が優勢となり、
太陽のその特別な力を遮断 → 花の蜜形成が阻害される。

●本文-1

皆さん！

ミュラー氏が私に『スイス養蜂新聞』の別の一冊を届けてくれました。そこには、ハチミツ療法の経験について扱った記事が掲載されています。ウェーゼンのパウラ・エムリヒ博士による論文「アムデンのフラウエンフェルダー児童養護施設におけるハチミツ療法のさらなる経験」（『スイス養蜂新聞』1923年3月号・第3号）です。

（ここで記事のいくつかの箇所が朗読される。）

本日、この記事に結びつけて二、三の意見を述べることは極めて興味深いことです。この記事が扱ってい

るのは、この児童養護施設において、何らかの形で栄養不良（身体が弱い）と認められた子どもたちをハチミツで治療するという試みです。その方法について記述されているところによると、ハチミツを適度に温めたミルクに溶かして細かく分散させ、沸騰させずに（沸点未満にとどめた）過熱していないミルクの状態で子どもたちに与える、というものです。

著者はそこで、目覚ましい成果を記録しています。とりわけこの論文の執筆者がもたらした喜ばしい成果とは、子どもたちの「赤血球の含有量」がまったく並外れた方法で増加したという事実です。

例えば、彼女のもとには兄弟である2人の子どもがいました。下の子は、この施設に入所したとき、赤血球がわずか53パーセントしかありませんでした。しかし退所時、すなわちハチミツ療法を終えた後には、赤血球が82パーセントにまで上昇していたのです。一方、上の子は入所時に赤血球が70パーセントあり、引き取られるときには78パーセントになっていました。つまり上の子の方は増加が少なかったわけですが、それでもやはり増加しています。ただ、この上の子は「ミルク療法」だけを行っており、それによっても増加はしたものの、70パーセントから78パーセントへの上昇にとどまりました。最初からそれほど衰弱していなかったとはいえ、下の子と同じような割合で強くなったわけではなかったのです。

さらに彼女（エムリヒ博士）は、非常に興味深い一連の実験を数多く挙げています。ここで私がこれらの実験に言及するにあたり、ぜひ注意していただきたいのは、その子どもたちの「年齢」がいくつであるかという点です。そもそも、ある物質が人間に及ぼす作用を調べようとするとき、単に研究室の中で実験を行うだけでは何の役にも立ちません。何か栄養補給や治療の試みを行う際には、医師がどんな患者に対してもまず真っ先に年齢を確認するのと同様に、すぐにその年齢を特定しなければならないのです。

ここに11歳の少年がいます。彼は8週間のハチミツ療法を受け、それによって腺（リンパ腺など）の状態が非常に著しく改善されました。さらに、肺尖カタル（初期の肺結核症状）も良くなり、血液の本質的に重要な成分である赤血球は53パーセントから75パーセントへと上昇しました。次に、2人目としてやはり11歳の少年がいます。彼は55パーセントから74パーセントへの上昇を示しました。それから14歳の少女は、70パーセントから88パーセントへと上昇しています。これ以上の数値の上昇については、どれも目覚ましい結果です。もういちいち読み上げることはしません。

彼女はさらに「体重の増加」についても記載していますが、これも同様に子どもたちがより丈夫になったことを証明しています。彼女が挙げているのは、10歳の少女、もう一人の10歳の少女、13歳の少年、7歳の少女、11歳の少年、8歳の少年、12歳の少年、9歳の少年、そして7歳の少年です。これらの実験が示しているのは、この年齢層、つまり「学齢期（小学生から中学生くらい）」にあたる子どもたちが、ハチミツ療法から極めて大きな恩恵を受けるという事実です。

さて、この論文の著者は、なぜこれほど子どもたちがハチミツ療法から多大な恩恵を受けるのか、その「原因」についてさらに考察を巡らせています。そこで彼女は極めて興味深い指摘をしています。それは、現代の科学において今なおこれほど幅広く用いられているアプローチを、この上なく痛烈に非難（否定）する指摘なのです。

今日、科学が食物の「栄養価」を評価しようとするとき、一体何を行っているのでしょうか？ 科学というのは、その特定の栄養源や食物を「分解（分析）」し、いわゆる化学物質の成分がどれとどれだけ含まれているかを突き止めようとします。現在の科学が行っているのは、まさにそのようなことなのです。

さて、次のようなことが起きました。――この論文の著者（エムリヒ博士）が述べるには、皆さんも名前くらいはご存じであろう、かの有名な生理学教授ブンゲの門下生がバーゼルにいたのですが、彼はハツカネ

ズミにミルクを与えて育てる実験を行いました。このミルクを与えられたネズミたちはすこぶる調子が良く、実に見事に成長しました。彼らはミルクで育てられたのです。

ところが、この門下生はもう一つの方法で実験を行いました。彼は自分にこう言いさせたのです。「ミルクはカゼイン（凝乳成分）、脂肪、糖分、そして塩類から成り立っている。ネズミたちはミルクで見事に育った。そしてミルクはカゼイン、脂肪、糖分、塩類でできている。ならば、別のネズミのグループには、カゼイン、脂肪、糖分、塩類（を混ぜたもの）を与えてみよう。中身はミルクと全く同じなのだから」と。——ところがどうでしょう、カゼインや脂肪などを（バラバラに）与えられたネズミたちは、ほんの数日後に全滅してしまったのです！ まったく同じ物質を与えられたにもかかわらず、死んでしまいました。

物質の「配合（成分組成）」が重要なのではないのです。そこには「何か別のもの」が一緒に作用しているはずだ——この紳士（科学者）たちは、そう自分に言い聞かせるべきだったのです。

しかし、彼らはどう考えたでしょうか？ 彼らはこう考えました。「物質、それこそがすべてだ。物質はどこにでも存在しなければならない。そして何かが起きる場所には、必ず物質があるはずだ」と。——ですが、カゼイン、脂肪、糖分、塩類の中に含まれる物質だけでは、生命は維持できなかったのです！ そこで彼らはこう言いました。「それなら、化学分析では決して見つからないほど、ごく微量に含まれている『新しい物質』があるに違いない」と。——そして人々は、この（架空の）物質を「ビタミン」と名付けたのです。「ヴィータ（Vita）」とは命のことですから、ビタミン＝「命を生み出す物質」という意味です。

かつて（詩人の）ハイネが、ある事柄を嘲笑しようとしてこう言いました。「世の中には、たとえば『貧困はどこからやってくるのか』を説明しようとする人々がいる。そこで最も手っ取り早いのは、こう言うことだ。貧困は『ポーヴレテ（pauvreté：フランス語で貧困の意）』からやってくるのだ、と」——これでは別の言葉に言い換えただけで、何一つ説明したことにはなりません。

私も以前、ある集まりに参加した際、「滑稽さ」はどこから生まれるのか、というテーマが話し合われたことがありました。その場にいた何人もの人々が、人が笑う「滑稽さ」の起源について実に見事な考察を述べていました。すると、一人の男が立ち上がり、いかにも「自分はこれからもの凄く重要なことを言うぞ」という雰囲気を全身から漂わせながら演壇へと進み出たのです。そして彼は、滑稽さに関する自説をこう披露しました。「滑稽さ、それは単に、人間に『ヴィス・コミカ（vis comica）』が備わっているからにほかならない」と。——ヴィス・コミカ。ヴィス（vis）とは「力」、コミカ（comica）とは「滑稽な」という意味です。つまり「人間には滑稽な力があるから、滑稽さが生まれるのだ」と言うのです。これは経済学で誰かが「お金はどこから来るのか？ お金は『お金を生み出す力』から来るのだ」と言うのと全く同じです。これでは何一つ説明したことにはなりません。

経済学においては、「お金は、お金をもたやす力から来るのだ」などと言えば、誰もが即座にその人物を「おかしい奴だ」と見抜くでしょう。しかし自然科学においては、「ミルクの生命力はどこから来るのか？」という問いに対し、「ビタミンからだ」と答えても、誰もそのおかしさに気づきません。これはまさに、「貧困はポーヴレテ（貧困）からやってくる」と言うのと全く同じなのです。それなのに誰も気づきません。大層なことを言ったつもりになってはいるものの、中身は何も言っていないに等しいのです。

そしてこれこそが、現在の科学界の動向における、いわば「嘆かわしいところ」です。人々は何か意味のあることを言っていると信じ込み、それを大げさな言葉で触れ回り、周囲の人々もそれをすべて鵜呑みにしてしまいます。しかし、人類の歴史の中でこのような状態がこの先もずっと続くならば、あらゆるものが衰退し、破滅へと向かわざるを得なくなるでしょう。なぜなら、世界が成り立つかどうかは「現実には何かを実行できるか」にかかっているものであり、物事についてただ語り、言葉をこねくり回すことにかかっているの

はないからです。

言葉とは、現実存在するものを意味していなければなりません。かつては、実践と地続きになった一種の科学（知識）が確かに存在していました。しかし今日における科学は、実践というものを完全に置き去りにしています。ただひたすら言葉を紡ぎ出しているだけなのです。そして、こうした事態を招いた原因の一つには、古い権威に加えて、ある「新しい権威」が台頭してきたことが挙げられます。

皆さんも、こうした専門的な事柄を扱う雑誌（メディア）が、今ほど多く存在しなかった時代がどれほどつい最近のことであるか、考えてみてください。かつては、たとえば養蜂のような事柄についての情報交換は、養蜂家たちの集会の場で直接決着がつけられていました。これは私の少年時代にまで遡る話です。当時の養蜂家の集会で、こうした事柄がどのように扱われていたかを私も見聞きすることができました。そこでは、ある人が自分の経験から得た知見を別の人に語り、相手がただの法螺吹きなのか、それとも本物の経験に裏打ちされているのかが、その場ですぐに察知できたのです。

というのも、人の話を生で聞くというのは、それほど全く異なる体験だからです。その人が本当に何かを知っているのか、それとも単に誰かの受け売りを話しているだけなのかが自ずと伝わってきます。しかし現代では、多くの古い権威に加わり、「印刷された文字」が新たな権威として幅を利かせるようになりました。何かが印刷されて活字になると、人々はそこに「何か重要な根拠があるに違いない」と信じ込んでしまうのです。

しかし、今回のこの記事にはもう一つの側面があります。この女性医師は、自ら実践したハチミツ療法によって、実際に「大いなる恵み」をもたらしました。彼女が現場で行ったことは、実に素晴らしいものです。ところが、彼女が当時の科学の流行に沿ってその原因を思考しようとした途端、根底からは何一つ本質的な答えが出てこなくなってしまう。彼女自身、記事の中で次のように述べています。

「私たちの実験結果が、より広い層に知れ渡ること、そして特に成長期にある私たちの若者たちに、再び多くのハチミツが与えられるようになることを切に望みます。」「今のところ、私たちの報告は実践的な経験の成果を示しているにすぎません。しかし、ビタミン理論がさらに発展していけば、薬理学者や生理学者たちも、ハチミツが有機体（身体）に及ぼす作用という問題に本格的に取り組んでくれるようになるに違いないと、私たちは確信しています。」

同じように、この論文の執筆者は冒頭で次のように述べています。

「医師としての立場からも、ハチミツ療法の効果についてぜひ一度報告したいという衝動に駆られました。……私たちの優れた成果は、その奥深くにある関連性を追究することへと私たちを直接突き動かしてくれます。私自身、その最も内なる本質にはまだ到底入り込めていないことは自覚しているものの、私たちの経験と調査結果に基づき、今後の研究が着手すべきであると私が考えるポイントを、今すでに明らかにしておきたいと思うのです。」

この女性医師自身の言葉から、彼女が次のような謙虚さを持ち合わせていることがはっきりと分かります。「（現代の科学が掲げる）ビタミン理論の全体をもってしても、事象の本質へと入り込むことはやはり不可能なのだ」と彼女は言っているのです。

では皆さん、次のことをじっくりと深く考えてみてください。私たちは今から、ハチミツ療法の効果が「本来一体何に基づいているのか」を見ていきたいと思います。ご覧の通り、一連の実験は私たちにある事実を示しています。実験が示しているのは――そしてこれらの実験は今後ますます明確に示すことになるで

しょうが——、ハチミツの効果が格別に強く現れるのは、ごく小さな乳幼児ではなく、「歯の生え変わり（7歳頃の第二歯への生え変わり）」を迎えている子どもたち、あるいはその時期を大幅に過ぎた年齢の子どもたちであるという事実です。

この点を考慮に入れることは、極めて重要です。しかし、実験はさらに別のことも示しています。それは、子どもたちに対してハチミツが最もよく作用するのは、それを「適度に温めたミルク」に入れたときである、という事実です。つまり、ハチミツとミルクを混ぜ合わせたものを生じさせると、それが子どもたちに対して特に優れた効果を発揮するのです。

そして、ここからさらに思考を進めると、次のような事実が見出されます。すなわち、ハチミツはより小さな幼児にとってもすでに重要な意味を持ち得る、ということです。ただしその場合には、ミルクに入れるハチミツの量を少なくしなければなりません。つまり、ミルクを多くし、ハチミツは少なくするのです。これに対して、高齢者の場合は主にハチミツが役に立つのであり、ミルクではありません。老人の治療において優れた成果を取めたいのであれば、ミルクを一切交えずに、ハチミツだけをそのまま摂取させるのが効果的なのです。

ここで語らねばならないのは、ミルクとハチミツというものは、人間の生命にとって「並外れて大きな意義」を持つ組み合わせであるという事実です。このことは、まさに（論文に記された）こうした実践的な経験から浮かび上がってきます。

私がこれまで何度も皆さんに申し上げてきた通り、かつての古い科学（知恵）は、現代の学者たちが思っているほど愚かではありませんでした。古い科学は時に素朴な形で表現されますが、本来は非常に賢明であり、大いなる叡智に満ちていたのです。皆さんもよくご存じの古い慣用句に「乳と蜜の流れる地」という言葉があります。ここには、そこが健康的な土地であり、健やかに暮らせる場所であるという事実が表現されています。つまり、昔の人々はミルクとハチミツが生命と途方もなく強く結びついていることを、すでに知っていたのです。

自然は時に、極めて理にかなった方法で私たちに語りかけています。自然が告げている事柄は、私たちがただ素朴な事象を十分に素直に（偏見なく）受け止めさえすれば、自ずと理解できるものです。自然がそもそも非常に賢明に作用していることを知っている者なら、ミルクが主に小さな子どもや成長期の若者にとって良いものであるということに対して、大がかりな証明など必要としません。さもないければ、女性の乳房からはミルクではなくハチミツが流れ出ているはずだからです。女性の乳房の腺分泌液がハチミツであるということは、自然の不可能性の領域（絶対にあり得ないこと）などでは決してありません。なぜなら、植物が実際にハチミツ（花の蜜）を作り出しているのですから、人間の体内でもそうなる可能性は十分にあり得ることなのです。

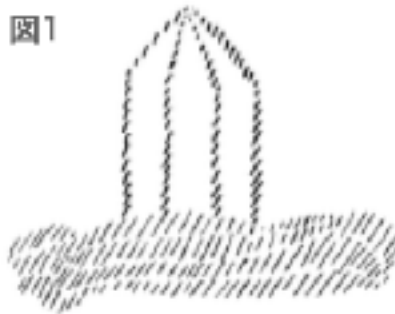
私たちは、ただ物事を十分に素直に受け止めねばなりません。「自然はへば職人だから、女性の乳房にハチミツではなくミルクしか作れなかったのだ」などと言うべきではないのです。そうではなく、「幼い子どもにとっては、何よりもまずミルクが重要であり、子どもが成長すればするほど、そこにハチミツを取り入れることができるようになる」という認識が、この自然の仕組みの背後には最初から横たわっているのだ、と理解しなければなりません。

しかし、私たちは「貧困はポーヴレテ（貧困）からやってくる」「滑稽さはヴィス・コミカ（滑稽な力）から生じる」「ハチミツの生命力はそこに含まれるビタミンからやってくる」といった、単なる「言葉だけの概念（言葉遊び）」に終始するような想像で満足しているわけにはいきません。私たちは、この関係における「現実」に目を向けなければならないのです。

そこで私は、皆さんへ次のようなお話をしましょう。——私たちがこれまでの講義を通じてすでにずっと前から知っている事柄を、ここで一度整理して結びつけてみたいと思います。重要なのは、物事を常に正しく観察できるようになることだからです。

皆さんが高い山（高山地帯）へ登っていくと、その山が最も硬くなっている場所、いわば最も硬い「地球の土的な要素」が突き出ているまさにその場所に、石英の結晶を見つけることができます。それらは非常に美しいものです。そこでは、ありとあらゆる種類の結晶を見つけることができます。

思い出してください。私は以前、この石英の結晶を黒板に描いてお見せしました。それらはこのような形（※六角柱の図を指して）をしています。それらが完全な状態であれば、上部と同じように下部もきれいに閉じて（尖って）いるのですが、大抵の場合は不完全な形をしています。つまり、それらは岩石の中から現れ、いわば岩石の中から、私がここに描き、これまでも何度も描いて見せたような形をとって成長してくるのです。



これは一体何を意味しているのでしょうか？ それは、「地球（大地）の内部には、このような、六角形で、先が尖ったものを形作る力が備わっている」ということにほかなりません。

私がこれまで何度も詳しく説明してきた通り、人間の内部には、地球や宇宙のあらゆる力がすべて存在しています。地球はこの力を宇宙から受け取り、人間はそれを地球から受け取っています。地球においてあの石英の結晶を突き動かしている力は、人間の体内にも宿っているのです。では、それは体内でどのような状態にあるのでしょうか？ ——実は、人間の身体は石英で満ちているのです。

これを聞くと皆さんは、「なんてことだ、あの男は一体何を言っているんだ！」と思われるかもしれませんが。山の上で見つかる石英は、最も硬い物質の一つです。そこに頭をぶつければ、頭骨が割れてしまいます。石英は決して壊れませんが、実験して頭を石英に激しくぶつければ、人間の頭の方が当然割れてしまいます。ですから、この「硬さ」こそが、石英において最も際立った特徴です。しかし、物質というものは、どこであれ常に同じ姿で現れるわけではありません。人間の体内にも石英とまったく同じものが存在していますが、それはより「流動的な形態」をとっているのです。なぜでしょうか？

観察してみれば——正しい内的な観察（霊視）によって正しく観察せねばなりません——、人間の頭から四肢に向かって、あるものが絶えず下方へと流れ落ちているのが分かります（※黒板の図を指して）。これは非常に興味深いことです。ここに人間の頭があるとすると、かつて地球が内側から外側へと湧き出させ、山の頂で硬化して石英の結晶として定着させたものとまったく同じものが、頭から絶えず下方へと流れ落ちているのです。地球においては、それが地球の内部から湧き出してきました。そして人間においては、それが頭から身体全体へと流れているのです。それこそが、石英（珪石）、すなわち「ケイ酸」にほかなりません。

図2



図3



ただ、人間の身体は、その石英を結晶にまではさせないのです。もし私たちの内側が、あちこち本物の石英の結晶だけで完全に埋め尽くされてしまったら、それこそ大変なことです。もの凄く痛むに違いありません！人間は、石英がまさに「六角形になろうとするその瞬間のポイント」に達するまでプロセスを進めます。そして、そこでストップをかけるのです。それ以上先へは進ませません。

ですから、私たちの体内では、石英形成の「始まり」だけが存在しており、そこでプロセスが制止され、中断されなければならないのです。そして、私たちの生命が成り立っているのは、まさにこの仕組み、つまり「頭から下方へと絶えず六角形の結晶を作り出そうとしながらも、それを完成させずに途中で食い止める」という現象に基づいています。私たちの内側では、絶えずそのような結晶が生まれようとしています。しかしそれらは実際には結晶化せず、途中で引き留められ、その結果、私たちは言わば「極めて高度に希釈された石英の液（ケイ酸の汁）」を自らの内に蓄えているのです。

もし私たちの体内にこの石英の液（ケイ酸の汁）が流れていなければ、どれほど多くの砂糖を食べたとしても、口の中で甘味を感じることは決してありません。私たちが内に持っている石英がそれを可能にしているのです。しかし、それは石英が持つ「物質としての性質」によるものではなく、その内部に「結晶として六角形になろうとする意志」が宿っているからにほかなりません。その意志が味覚を生み出しているのです。ここが極めて重要な点です。

このように、地球の内部にあるものと全く同じものが、人間の体内でも引き継がれ、さらに先へと進めら

れています。人間は、ケイ酸が体内で「尖った形（結晶）」になろうとし始めるその手前で、プロセスをストップさせます。一方で地球は、それを地表に向かって尖った結晶にまで成長させます。しかし、人間もまたこの力、すなわち「六角形の形態を生み出す力であるケイ酸の力」を必要としているのです。六角形の形態を創り出すこの力を、人間は必要としています。

皆さんの全員が、優れた幾何学者というわけではないと思います。今すぐに幾何学を難なくこなせるわけでもないでしょう。この石英の結晶を、今すぐ自分で描いたり、油粘土（プラスティリン）で形作ったりすることは、おそらく簡単ではないはずです。しかし、皆さんの「身体」は極めて優れた幾何学者であり、絶えずこのような結晶を作ろうとしています。私たちは（生きるために）それを途中で妨げられているのです。そもそもすべての「生命」とは、「死（硬化・結晶化）を途中で引き留めること」によって成り立っています。そして、私たちがそれをもはや引き留めることができなくなったとき、人間は本当に死を迎えるのです。

さて、ここで再びミツバチに目を向けてみましょう。ミツバチは外へ飛び立ち、ハチミツを集めます。そしてそのハチミツを自分の体内で処理し、そこから自分自身の生命力をつくり出します。しかし彼女たちは、さらに「蜜蠟」をも生み出します。彼女たちはその蜜蠟で一体何を作るのでしょうか？——そこから「六角形の細胞（巣房）」を作るのです。

地球は六角形のケイ酸結晶を作ります。そしてミツバチは、六角形の巣房を作るのです。

これは恐ろしいほど興味深いことです。ミツバチの巣房をここに描いてみるか、あるいは以前ミュラー氏が皆さんにお見せしたものを思い出していただければ分かりますが、それらは石英の結晶と全く同じ形をしています。ただ一つ違うのは、巣房の内部が「空洞」であるという点だけです。石英は中が詰まっていますが、形態（幾何学的な形）において、両者は完全に一致しているのです。

これらの細胞（巣房）は中が空洞になっています（※図を指して）。しかし、そこには一体何が入るのでしょうか？ そこにはミツバチの「卵」が入るのです。石英（クォーツ）においてはその内部にケイ酸が詰まっていますが、ハチの巣房においてはそこが空洞になっており、まさにそこにハチの卵が収まります。ミツバチは、地球の内部にあつて石英を形成するのと同じ力によって形作られているのです。そこでは、高度に微細化されたケイ酸が作用しています。そこには（目に見えない）力が宿っており、それは物理的には証明することができません。



ミツバチの体内を通じてハチミツが作用することで、ミツバチは、まさに「人間が必要としているその形態（六角形）」へと蜜蠟を形作ることができるのです。なぜなら、人間もまた、自らの内側にこの「六角形の空間」を持っていなければならないからです。人間も全く同じものを必要としています。

そしてミツバチとは、この「六角形へと向かう形成力」をまず初めに最も見事に形作ることができる動物であるため、この世界に存在するあらゆるものの中から、「人間の体内に入ったときに、最も見事にこの『六角形へと向かう形成力』へと転換され得る食物」を採集してくる動物なのです。それこそがハチミツです。

皆さんがハチのハチミツを食べると、自らの内に「途方もなく強靱な活力」を受け取ることになります。なぜなら、もし皆さんの身体が弱り、頭から身体全体へと流れるべきこの「六角形の力」を自らの内で生み出せなくなってしまったとき、あるいは、この六角形の力が絶えず体内に維持されるほどの「確かな堅実さ」を血液に与えるエネルギーがなくなってしまったとき、その不足を補うために「ハチミツ」が介入しなければならないからです。

あるいは、子どもの場合であれば「ミルク」がその役割を果たします。子どもはまだ、この六角形の力を（自分自身で十分に生み出す力を）持っていません。だからこそ、人間（母親）の体内であらかじめ準備されたミルクを通じて、その力を受け取らねばならないのです。

だからこそ、ハツカネズミにどれほど多くのカゼイン、脂肪、糖分、塩類を混ぜて食べさせたとしても、彼らは全滅してしまうのです。なぜでしょうか？ 動物もまた、この「六角形へと向かう形成力」を必要としているからです。単にカゼイン、脂肪、糖分、塩類をかき混ぜただけでは、その六角形の中で作用している生命力はそこに含まれません。しかしネズミにミルクを与えれば、その中にはその力が含まれているのです。

ただ、ミルクの中に含まれるその力は、ミルクが酸っぱくなった（凝固した）からといって、目に見えて六角形に結晶化するほど強いものではありません。もしミルクの中のこの「六角形の力」がもう少し強かったなら、皆さんが酸っぱくなったミルクを飲んだとき、舌の上に微細なケイ酸塩が形成されることでしょう。それはまるで、ミルクの中に無数の小さな細かい毛が混ざっているかのような食感（味）がするはずです。

しかし、ミルクにおいてプロセスがそこまで（結晶化まで）進むことはありません。なぜなら、ミルクは人間や動物の身体そのものから分泌されるものであり、体内においては液体の状態にとどまるからです。小さな子どもにとっては、このミルクの力だけでまだ十分に足りています。しかし、成長した大人の人間にとっては、それではもう到底足りなくなってしまうのです。そして、「大人になっていくプロセス」というのは、すでに児童期から始まっています。だからこそ、その時期には、ハチミツの中に秘められている「より強力な『六角形へと向かう形成力』」を携えて、身体をサポートしてあげなければならないのです。

これは非常に興味深いことです。ミルクを取り上げてみると、それは人間の体内から分泌されるものであるとはいえ、本来は「動物的要素」、すなわち人間の動物的な部分に属しています。そこにおいてミルクは動物質なのです。これに対してハチミツを取り上げてみると、それはミツバチという回り道を経ているものの、元々は植物界からやってきたものです。植物界から来ているため、植物質なのです。そしてケイ酸、すなわち石英を取り上げてみると、それは鉱物です。鉱物は完全に、はっきりとした六角形の形態を持っています。

ミツバチの体内でハチの食物（ハチミツ）の影響を受けて生み出される蜜蝋は、まさにその形（六角形）を与えられます。——蜜蝋がハチミツから直接作られるわけではありませんが、ハチミツからその形態を受け取るのです。そしてそれが六角形の巣房へと発達します。一方でミルクは、その形態をむしろ再び溶解させてしまいます。ミルクの内部には、六角形の結晶の「影のようなイメージ」が形成されているにすぎません。

こうしたことから、次のように言うことができます。「ハチミツこそが、人間に最も歓迎される（身体に馴染む）ものである」と。

なるほど、人間はハチミツを食べる代わりに、ケイ酸をそのまま食べても、その六角形の力を体内に取り入れることができているのではないか、と思われるかもしれません。しかし、ケイ酸は六角形の形態にまで到達し、そのケイ酸としての堅固な形を自らの内に形成するプロセスを「あまりにも先へ進めすぎてしまっている」ため、人間に対しては作用が強すぎるのです。それでもなお、ケイ酸が（適切な処方において）人間に有益なものであることに変わりはありません。

ここで、次のようなケースを想定してみましょう。ある貧しい子どもが、この記事に記述されているような素晴らしいハチミツ療法を、最も効果的な時期である13歳や14歳、あるいは16歳や17歳の頃に受ける恩恵に恵まれなかったと想像してください。その子はそうした恩恵に浴することができず、血液中の「鉄の微粒子（赤血球）」がますます弱まり、減少していってしまいます。血液中の（赤血球の）パーセンテージはどんどん低下していきます。その子がそのまま成長し、たとえば30歳になったとしましょう。彼は貧しく、非常に弱々しい人間になってしまっています。この論文の執筆者も、そのような状態を「彼らはガタガタに崩れて（卒倒して）しまう」と描写しています。

さて、私たちは今、このようにして30歳になってしまった人物を目の前にしています。彼にハチミツ療法を適用することは確かに大いに可能ですが、この人物の身体はすでに消耗しきっています。もしハチミツが彼を救うほどの効果を上げようとするなら、彼はあまりにも大量のハチミツを摂取せねばならず、今度はそのハチミツによって胃を痛めてしまうことになるでしょう。なぜなら、ハチミツには同時に「人間に節度を促す」という性質があるからです。ハチミツを食べすぎると、人間は胃を壊してしまいます。

これは単純な仕組みに基づいています。ハチミツは甘く、非常に多くの糖分を含んでいます。しかし、胃が必要としているのは主に「酸（胃酸）」であり、胃の中にあまりにも多くの甘いものを送り込んでしまうと、酸の働きが損なわれてしまうのです。つまり一言で言えば、ハチミツというものは「控えめな量」でしか摂取されることを望まない物質なのです。

したがって、30歳にしてすでにそれほど身体が消耗しきっている人間に対しては、ハチミツ療法が効を奏する（それは間違いなく効くのですが）ほどの分量のハチミツを与えようすると、彼は即座に胃の不調をきたし、続いて腸の病気にかかってしまうことになります。ですから、彼に対してそのような（大量のハチミツを与える）方法は使えないのです。

しかし、代わりに別の方法をとることができます。まずは非常に高度に希釈して粉末にした石英、すなわちケイ酸を治療薬として人間に与えるのです。この高度に希釈したケイ酸を治療薬として与えておくと、その人物はしばらくして、少量のハチミツがもたらす恵みを受け入れられる身体になります。高度に希釈されたケイ酸が、彼の体内で「六角形として作用する力」をあらかじめ呼び覚ましているため、その後からなら、より少ない量のハチミツでも十分に効果を発揮できるようになるのです。つまり、ケイ酸がハチミツのための「道拓き（露払い）」の役割を果たすことができます。

あるいは、ヘモグロビン（血色素）の含有量が低下して30歳になり、すっかり身体が消耗しきってしまった大人の人間に対しては、あらかじめハチミツの中に、非常に高度に希釈したケイ酸を少し混ぜ合わせて与えるという方法をとることもできます——子どもの場合はミルクをたくさん与えるのが良いのに対して、大人の場合はこのようにするのです。そうすれば、ハチミツは（胃を壊すことなく）その人間にしっかりと作用してくれます。

皆さん、このようにこれらすべての相互関連性を知っておかねばなりません。したがって、「ハチミツから人間に向かって、本来一体何が作用しているのか？」と問うならば、「ハチミツから人間に向かって作用して

いるのは、この六角形を形成する力である」と言うことができます。この力はミツバチの内部に宿っています。その事実は、ミツバチたちが作る蜜蝋の巣房を見れば一目瞭然です。そして、まさにこの力があるからこそ、ハチミツはこれほどの恵みをもたらすのです。

ですから、私が以前お話ししたことはやはり正しいのです。子どもの場合は主に「ミルクの力」が作用しますが、それはハチミツによって強化することができます。そして大人の場合は、主に「ハチミツの力」が作用します。しかし、人間がある程度年齢を重ねている場合は、今申し上げたように、このハチミツの力を「石英（ケイ酸）の力」によって補強してあげなければなりません。とはいえ、大人の人間であっても、最初の幼少期の力がまだ体内に残っているため、「ハチミツミルク療法」はやはり助けになります。単なる「ハチミツ療法」だけでも、彼の助けになり得るのです。ハチミツ療法がもたらす大いなる恵みについては、完全に疑いの余地がありません。

このことは、現場においては非常によく知られている事実です。ですから、こうした事柄を人々にしっかりと明確に伝えることで、市場に常に「本物の、正しい品質のハチミツ」が流通するように努めなければなりません。というのも、現代の人間というものは、非常に騙されやすい傾向があるからです。ここで言う「騙される」とは、通常の犯罪的な意味ではなく、いわば「現代の文明的な環境によって欺かれる」という意味です。

皆さんがどこかへ旅行に出かけてホテルに泊まり、そこでハチミツを注文したとしても、出てくるものは往々にして本物のハチミツではなく、砂糖で作られた「人工ハチミツ」、つまり人工的に製造された代物であることがよくあります！ もし人々が、これら（本物と人工物）が全くの別物であり、人工のものには「六角形として作用する力」など微塵も存在しないという事実を知っていたなら、この模造品のハチミツがミツバチの本物のハチミツと同じように作用するなどという幻想を抱くことはなかったでしょう。

ミツバチの本物のハチミツであれば、当然ハツカネズミに与えて育てることも可能です。ネズミたちも大いに喜んで食べるでしょう。しかし、この人工のハチミツを与え続けられれば、たとえ数日という短期間ではないにせよ、ネズミたちは極めて近いうちにやはり衰弱死してしまうことになるのです。

これが、ハチミツ・ミルク療法に関するあの記事について私が述べておきたかった事柄です。

さて、私の手元にさらにもう一つ興味深いテーマが届いています。これについても皆さんにお話ししたいですし、これに対して皆さん自身がどう考えるか、そしてミュラー氏がこれについてどう考えているかも聞いてみたいと思います。皆さんもお分かりのように、実に多くの問いが考慮に値するため、次回もう一度この件について議論を交わすことは、十分にその価値があるでしょう。その際、皆さんは自分の質問を提示することができますし、ミュラー氏か私自身がそれに回答することになります。今はまだ、2つの事柄について手短かに触れるにとどめておきます。皆さんには少々奇妙に感じられるかもしれませんが、皆さんがこれに対してどのような意見を述べるか、私は実に楽しみにしています。

さて、私の手元にさらにもう一つ興味深いテーマが届いています。これについても皆さんにお話ししたいですし、これに対して皆さん自身がどう考えるか、そしてミュラー氏がこれについてどう考えているかも聞いてみたいと思います。皆さんもお分かりのように、実に多くの問いが考慮に値するため、次回もう一度この件について議論を交わすことは、十分にその価値があるでしょう。その際、皆さんは自分の質問を提示することができますし、ミュラー氏か私自身がそれに回答することになります。今はまだ、2つの事柄について手短かに触れるにとどめておきます。皆さんには少々奇妙に感じられるかもしれませんが、皆さんがこれに対してどのような意見を述べるか、私は実に楽しみにしています。

(ここで、提出された書面による質問が読み上げられる。)

【書面による質問：】

古くから続く農家の養蜂家たちの間では、ハチの父親（養蜂家）とその庇護下にあるハチたちの間には、ある種の「魂の結びつき」が存在していると固く信じられています。そのため、以下のようなことが言われています。「もし養蜂家が亡くなったなら、彼の死をすぐに、すべてのミツバチの群れに知らせなければならぬ。もしこの通知を怠れば、翌年のうちにすべての群れが死に絶えてしまう」と。両者の間に何らかの魂の同調が存在していることは、次のような経験的な事実からも示されています。「もし人が腹を立てていたり、怒っていたりする精神状態のときにミツバチの作業を行おうとすると、穏やかで調和のとれた精神状態のときに同じ作業を行う場合に比べて、ハチに刺される回数をはるかに多くなる」という事実です。上述した古い養蜂家たちの見解には、何らかの事実（根拠）が根底にあるのでしょうか？

シュタイナー博士：

さて、ミュラー氏が、こうした事柄を完全に根も葉もない絵空事だと考えているかどうか、素直に語っていただけるなら非常に興味深いですね。農村の養蜂家たちの間では、主人の死をハチに告げるというこうした慣習が実際に行われていますよね。しかし、私が今問題にしているのは、この「魂の同調」、すなわち養蜂家とミツバチとの間のこのような結びつきについてです。これについて、おそらくミュラー氏から何かお話しいただけるのではないのでしょうか。

ミュラー氏：

そうした事柄に関しては、バーゼルとチューリッヒでの2つの事例をお話しできます。ある家庭で、ミツバチの世話に深く携わっていた奥さんが亡くなったのですが、それから1年の間にすべてのミツバチの群れが死に絶えてしまいました。バーゼルで起きたもう一つの事例でも、やはりハチの面倒をよく見ていた奥さんが亡くなったのですが、全く同じことが起きました。そこは大きな養蜂場だったのですが、1年の間に28あった群れが、わずか6つの群れにまで減ってしまったのです。これが時間そのものとどのように結びついているのか、あるいはハチたちとどう関係しているのかは、説明がつきません。どちらの事例でも、ハチたちが何らかの病気にかかっていたという形跡（証拠）は認められませんでした。おそらく、ある種の「魂の結びつき」があったのでしょう。

シュタイナー博士：

では皆さん、かつて私が人間と動物との関係についてお話しした事柄を、ここで一度思い出してみましょう。皆さんもおそらく耳にされたことがあるでしょうし、私も以前少し触れたことがあります。少し前に、いわゆる「計算する馬（賢いハンスなど）」のことが大きな話題になりました。それらの馬は、たとえば「4足す5はいくつですか？」という質問を受けると、人が「1、2、3、4、5、6、7、8、9」と数えるのに合わせて、前脚で地面をポンポンと叩いたのです。馬たちは、決して侮れないほど見事な計算を行ってみせました。皆さんも、特にエルバーフェルトの「計算する馬」が有名になったことはご存じかもしれません。調査委員会が現地へ赴き、その現象を調査したりもしました。私はエルバーフェルトの馬は直接見ていませんが、もう一頭の、同じように見事に計算ができたフォン・オステン氏のいわゆる「計算する馬」なら実際に見たことがあります。そしてその馬を観察することで、この現象の根底に本来一体何があるのかについて、極めて正確な見解を得ることができたのです。

人間というものは、これらの計算する馬について実にあれこれと頭を悩ませてきました。根本的に言えば、ある日突然、馬が計算を始めるなどというのは、何とも恐るべき出来事です。しかも馬たちの計算は非常に素早く、それこそ（当時の）計算機が形無しになるほどでした。皆さん、もしこれが教育学の分野に導入され、馬に計算を教えられるようになったとしたら、会計士や、計算を行うために雇われている人々にとっては凄まじいライバルが出現することになってしまいます！ですから当然、この計算する馬というの

は、ただ事ではない事件だったのです。

しかし、科学こそが、この計算する馬たちをめぐって信じられないほど不様な姿を晒してしまいました。その理由は簡単に分かります。馬が本当に計算できるわけがないのは当然のことであり、問題は「なぜ馬が『9』のところで脚を踏み鳴らすのか」を突き止めることにあったからです。馬が計算できるなどと信じるのは、言うまでもなく完全にナンセンスです。この事について学問的に取り組んだ私講師のプフングスト（※ドイツの心理学者オスカル・プフングスト）も、馬が計算などできないことは分かっていました。

ところが、彼はある理論を打ち立てたのです。彼はこう言いました。「このフォン・オステン氏は、数を数えるたびに毎回、顔にほんのわずかな微表情を作る。馬はその顔の皺や微表情を観察しているのだ。そして、その表情の変化を合図にして脚を踏み鳴らすのだ」と。――すると彼はすぐに、自分自身で次のような反論にぶつかりました。「なるほど、しかしそれなら、自分（プフングスト）もそこに立ってフォン・オステン氏を観察し、馬が踏み鳴らす合図にしているその表情を注意深く見極めなければならない」と。そこで彼は実際にそこに立って観察してみましたが、何も見つけることができませんでした。しかし、彼は自分の理論を疑うのではなく、こう言ったのです。「その表情はあまりにも微細極まるものであるため、私には見えないが、馬には見えるのだ」――。皆さん、このことから導き出される結論は、「大学の私講師（教員）よりも、馬（お馬の鹿）の方がよく目が見える」ということだけです。それ以外の結論など何も出てきません。

しかし、事の真相はそんなところにはありませんでした。精神科学の訓練を積んだ者がこの事象を観察すれば、そのようなほんのわずかな微表情などに価値を置きはしません。事の次第はこうだったのです。一方の側に馬が立ち、もう一方の側にフォン・オステン氏が立って、馬の手綱を少し握っていました。そして、フォン・オステン氏は右の上着のポケットの中に、無数の小さな角砂糖を入れていたのです。彼は馬にその小さな角砂糖を絶えず与え続けていました。馬はそれを舐めて甘さを感じ、フォン・オステン氏を深く愛するようになりました。角砂糖をもらうたびに、馬は彼のことをますます愛するようになり、こうして馬とフォン・オステン氏との間に「心からの関係」が形成されたのです。

そして、フォン・オステン氏は小さな微表情を作る必要など全くありませんでした。ただ心の中で「『9』のところで計算が合う（終わりだ）」と思い浮かべるだけで十分だったのです。そうすれば、馬はそれを感じ取りました。なぜなら、動物というものは自分の周囲で起きている事象に対して、はるかに繊細な感知能力を持っているからです。たとえ、馬には見えて人間には見えないような微表情にまで至らなくとも、動物は人間の頭の中で起きていることを察知します。馬は、彼が「9」と考えたときにその脳内で起きていることを感じ取り、その瞬間に脚を踏み鳴らすのです。もしこの馬が砂糖をもらっていなかったなら、馬の愛はいくらか憎しみ（敵意）へと変わり、もう脚を踏み鳴らすことはなかったでしょう。

動物には、物事に対する極めて、極めて繊細な感知能力が備わっています。しかしそれは、顔のわずかな微表情などに対してではなく、事実として「目に見えない事象」に対してであり、あの（計算する）馬のハンスの場合であれば、フォン・オステン氏の脳の内部で起きていることに対して働いていたのです。こうした事象こそをまさに観察しなければなりません。そうして初めて、動物たちが実に驚くべき感受性で「感じ取っているのだ」ということが分かります。

少し想像してみてください。皆さんがミツバチの群れの中に入っていくとき、ひどく怖がっているとします。ええ、ハチたちは皆さんが恐怖を抱いていることを感じ取ります。これは否定できない事実です。では、「恐怖を感じる」とは一体どういうことでしょうか？――皆さんもご存じの通り、恐怖を感じると人は青ざめます。恐怖によって顔が真っ青になるのです。そして青ざめるとき、血液は（身体の内側へと）退いていきます。皮膚の表面、外側の方へと血液が流れていなくなるのです。

ミツバチが、このように恐怖に震えている人間に近づくと、もし皮膚にしっかりと血液が流れていれば感じられたはずのあの「六角形として作用する力」を、ハチは人間の皮膚からではなく、その人間の内側にいつも以上に強く察知することになります。するとハチは、その人間からまさにハチミツや蜜蝋（のエネルギー）を獲得したいと欲してしまうのです。これに対して、人間が落ち着いて作業に臨み、血液が血管の中を均等に流れているときには、ミツバチは全く別のことを感知します。そのときハチは、その血液そのものが、自分たちと同じ「六角形として作用する力」を備えているのだということを察知するのです。

今度は、人間が怒りを抱き、その怒りの状態のままミツバチのところへ行く場合を考えてみてください。怒りは人を赤くさせます。そこ（皮膚の表面）へまさに大量の血液が押し寄せるのです。そしてその血液は、六角形として作用する力を自ら進んで吸収しようと（消費しようと）しています。ミツバチはその繊細な感覚でこの状態を察知し、あなたが自分たちからその力を奪い取ろうとしているのだと勘違いして、あなたを刺すのです。これらはまさに、そこで働き、そこに内在している「自然の力」に対する、動物たちの極めて繊細な感覚によるものなのです。

そして、ここに「慣れ」という要素が加わります。考えてみてください。養蜂家（ハチの父親）というのは、ミツバチにとって、ただそこらへんを歩いている普通の人間と同じように巣箱へ近づいていくわけではありません。ミツバチは——この表現を使うことが許されるなら——彼の「発散するもの（オーラや体臭、生命の波動）」のすべてを感じ取っており、彼がどのような性質の人間であるかを察知しているのです。ハチたちはそれになじみ、慣れ親しんでいます。

その彼が亡くなると、ハチたちは別の環境に適応し直さなければならなくなります。そしてこのことは、ミツバチにとって並外れて重大な意味を持つのです。皆さんが犬においてすら見出すことができる現象を、一度思い出してみてください。主人が亡くなったとき、——実際にそのような事例はありましたが——犬が主人の墓へ行行ってそこで死んでしまったということがあります。それは、その犬が他の新しい主人になじむことができなかったからです。

それならば、これほどまでに鋭敏な「化学的感覚（嗅覚的味覚）」を持っているミツバチにおいて、彼らがあらゆる事象を感知しており、養蜂家に深く慣れ親しんでいるがゆえに、別の人間へすぐにはなじみ直すことができないのだ、——ということを想定できない理由がどこにあるのでしょうか？（——何もありません。）ですから、この古い養蜂家たちの伝承の根底には、間違いなく極めて重大な事実（真実）が横たわっているのです。

しかし、皆さんはこう言われるかもしれません。「犬や馬ならまだしも、あの小さくて微細な生き物である昆虫でも同じことが起きるのだろうか？」と。——さて、皆さんはまだ観察したことがないかもしれませんが、それでもやはりこれは真実なのです。

世の中には、よく言われるように、植物を育てるのが「特別に上手な手（緑の親指）」を持っている人がいます。その人が鉢植えや植物などの世話をすると、あらゆるものが実に見事に育ちます。ところが別の人が、全く同じように世話をしても、何も育ちません。これは、その人間が放っている「発散するもの（Ausdünstung：オーラや体臭、生命の波動）」によるものです。ある人間の発散するものは花に対して好ましく作用し、別の人間のものは好ましくない作用を及ぼします。人によっては、花を育てることがまったく不可能な場合すらあるのです。

そして、この「好ましくない作用」がとりわけ真っ先に及ぶのは、まさに「花の中でハチミツを作り出す力」、すなわち「花を甘くさせる力」に対してなのです。したがって、人間は花に対してすら影響を及ぼし

ているのであり、極めて顕著な意味において、まさにミツバチに対して影響を及ぼしているのだと言えます。

ですから、こうした事象に対して驚く必要はありません。ただ、生じてくる事実をしっかりと結びつけて考えさえすれば、物事が本当にそのようになり得るのだということが分かります。そして、実際の養蜂の実践（現場）においても、このことを考慮に入れることができるはずです。

（ここで、2つ目の質問が読み上げられる。）

【2つ目の質問：】

古い農民の不文律（天気俚諺）によると、「5月3日の『聖十字架発見の祝日』に雨が降ると、花や木々からハチミツが洗い流されてしまい、その年はハチミツの収穫が全くなってしまう」と言われています。私が過去4年間にわたって行った観察でも、この法則には何らかの真実が含まれているように思われます。このようなことが、そもそも本当に起こり得るのでしょうか？

シュタイナー博士：

これは私たちを自然の作用の「極めて深い領域」へと導いてくれる問いです。

それがまさに「聖十字架発見の日」であるとか、まさに「5月3日」であるとかいう日付そのものには、それほど大きな意味はありません。重要なのは、まさにこの数日間にわたって優勢になる「この時期の季節（季節性）」にあります。

5月の上旬というこの時期に雨が降るというのは、一体何を意味しているのでしょうか？ 以前私は、現在の春分点が「魚座」の星座の中にあるとお話ししました。太陽は4月23日頃まで、この魚座の星座にとどまります。その後、周期の移動にともなって、太陽は「牡羊座」の星座へと入るのです。したがって、5月の上旬に差し込んでくる太陽の光線は、他の時期とはまったく異なる「天球の領域」からやって来ることになります。

ここで仮に、5月上旬、つまり5月3日が「晴天」であったとしましょう。それは何を意味するのでしょうか？ それは、5月3日において、太陽が地球上のあらゆるものに対して「強烈な支配力」を及ぼしている、ということの意味します。天気が良いければ、地球上で起きるすべての事象は、太陽の力のもとで進行するのです。

では逆に、5月3日、すなわち5月上旬に「雨が降る」ということは、一体何を意味するのでしょうか？ それは、今度は「地球の側が最高潮の力を持ち、太陽の作用を遮断してしまっている」ということを意味しているのです。

しかし、このことは植物全体の成長にとって、途方もなく重大な意義を持っています。太陽の光線が牡羊座の領域から差し込んでくるまさにその時に、太陽の力が自身のすべての威力を花へと注ぎ込むことができるならば、花はハチミツとなって現れることになるあの「甘い物質」を発達させます。その時、ミツバチはハチミツを見つけることができるのです。

これに対して、もし地球の側がより強い威力を持ち、この時期に雨が降ってしまうと、花は牡羊座から差し込んでくる太陽光線のもとで発達することができなくなります。それどころか、もっと後（の時期）まで待たねばならなくなったり、あるいは、すでに発達させ始めていたプロセスを根本から阻害されたりしてしまうのです。そうすると、花はハチミツをまともに発達させることができず、結果としてミツバチはハチミツ

を見つけることができなくなります。

まさにこのような事象こそ、私がこれまで何度も皆さんに申し上げてきたように、「地球上で起きるすべての事柄は、地球の外側にあるもの、すなわち宇宙の影響下にあるのだ」ということを知っていれば、明快に説明がつきます。雨が降るということは、まさに太陽の力が追い払われてしまうということを意味します。晴天であるということは、太陽の力が自身の満ち満ちた威力を展開できるということを意味するのです。

そして重要なのは、単に一般的な意味での太陽の力がやって来るということではなく、太陽の力がまさに「特定の宇宙の領域」——私たちが今ただ目に向けているような場所ではなく、まさにあの牡羊座の側——から差し込んでくるということなのです。宇宙の隅々からやって来る太陽の力は、その場所（星座）ごとに毎回異なっています。太陽が単独でそれを成し遂げているのではなく、太陽が正面から地球を照らし、その背後の宇宙空間に牡羊座が控えていることによって、それが可能になるのです。太陽は牡羊座が自身に与えてくれるものをまず受け取り、それを太陽光線としてさらに（地球へ向けて）伝えるのです。

図5



ですから、太陽が5月の上旬に地球へ光線を送るのと、5月の下旬に送るのとでは、まったく意味が異なります。5月の上旬には、まさに牡羊座の満ち満ちた力がまだ作用しています。しかし5月の下旬になると、すでに「牡牛座」の力が作用し始めるのです。すると今度は、植物に対して（牡羊座の時と）同じような力では作用できなくなり、植物を硬化させ、乾燥させるようなものがやって来ます。これはとりわけ、植物の内部で「ハチミツを形成する力」がそれ以上作り出せなくなるという結果をもたらすのです。

このように、古い農民の不文律（天気俚諺）の中には、それなりの正当な根拠を持った事象が表れているのであり、だからこそ私たちはそれらに十分に留意すべきなのです。

もちろん、以前にも申し上げた通り、現代ではこうした事象に対する意識が失われてしまったため、私たちはこれらを単なる迷信へと落とし込んでしまいました。物事を正しく見分けることができなくなれば、当然ながら迷信へと陥ってしまうものです。そうなると、農民の不文律も「雄鶏が肥溜めの上で鳴けば、天気が変わるか、さもなくばそのまま変わらない（＝どちらにせよ大した意味はない）」という格言と、大して変わらない価値しか持たなくなってしまうのです。

しかし、すべての俚諺がそのようなレベルにあるわけではありません。その多くは、私たちが探求すべき奥深い叡智に基づいているのです。こうした不文律を（かつて生活の中で正しく）活用していた農民たちは、それによって実にうまくやっていくことができていたのです！

ご覧の通り、より深い（精神科学的な）観察眼を持つことは、私たちがこれらの農民の不文律を、再び実践の場で役立てられるようになることへと繋がっているのです。

——では、次の水曜日に続けましょう。

第五講義

「労働者講義」より

〔GA351（第11講）〕ドルナハ、1923年12月5日

●基本的な視点

近代養蜂の収益性・人工化が全面否定されるのではなく、
「今はまだ結果が見えないが、
長期的に見て自然から乖離しすぎると危ないと警告している。

ミツバチの巣箱を一つの超個体として捉え、
経済・社会構造・宇宙リズムまで含めた
包括的な視点で養蜂を考えるべきである。

●要点

1) 現代養蜂の収益性重視に対する議論

エルブスメール氏の指摘:

現代養蜂は物質的利益（収益性）を最優先し、
ハチミツを高級品として搾取している。
ヨーロッパでは労働者を搾取するのと同じく、ミツバチも搾取されている。

ミュラー氏の反論:

養蜂も他の産業と同じく採算を考えなければ成り立たない。
人工飼育・近代技術を使わなければ大量生産は不可能である。
労働時間・減価償却を計算すると
1kgあたり7フランにもなり、6フランでは赤字。
ハチミツを売らずに家族で食べる例とは状況が違う。

2) 上記の質問に対するシュタイナーの答え

ミツバチの巣箱は、個々の蜂から成っているのではなく、
コロニー全体が一つの有機体、「全体生命体」である。

巣箱全体が「一つの存在」として養蜂家を認識するため、
養蜂家が亡くなると蜂群に影響が出るのは自然な現象である。

現代は労働時間・賃金計算が前提の社会のため、
収益性を無視できない。
→ 本来ハチミツは「嗜好品」ではなく「生命維持の食料」であり、
健全な社会秩序なら価格も自然に適切になるはずだが、
現在は価格形成自体が歪んでいる。

大規模農場で過剰搾乳を続けると、牛は脆弱になり、
数世代で畜産業全体が崩壊する。

ミツバチは自己治癒力が強いのでまだ極端ではないが、人工養蜂の影響は50～100年単位で見ないとわからない。現在は「まだ問題が見えない」だけで、将来に深刻な影響が出る可能性がある。

3) ミツバチの驚異的な自己治癒力（コロニーの知性）

死んだネズミを樹脂・プロポリスで完全に密封して腐敗臭を閉じ込める。
スズメバチが入ると、蜂毒の蒸気で弱らせて攻撃を防ぐ。
これらは「日常的本能」ではなく、非常時の自己治癒・衛生防衛本能。

4) その他の質問への回答

ハチミツが合わない人は、
身体の硬化傾向（新陳代謝が遅い）による病気であり、
原因（頭部・肺など）に応じてリン製剤や硫黄製剤で治療すべきである。

太陽光（化学的作用を持つ）と電気光では全く違う。
電気光はミツバチを一時的に「硬直・麻痺」させる。

黄道十二星座と月のリズムは植物の蜜形成に影響を与え、
間接的にミツバチに作用する。
農家の伝統知は根拠があるが、精神科学的に深める必要がある。

●本文

エルブスメール氏は、現代の養蜂において、養蜂家が何よりもまず収益性を重視していると主張しています。つまり、物質的な利益だけが追求されているというのです。『スイス養蜂新聞（Schweizerische Bienen-Zeitung）』1923年10月号（第10号）には次のように書かれています。「ハチミツはその大部分が高級品（贅沢品）であり、それを購入する人々は相応の価格を支払うことができる。」

同号の後半では、ある事例が紹介されています。バルデンスベルガーという人物がスペインを旅していた際、ある養蜂家のもとで、何人もの健康で血色の良い子どもたちに出会いました。バルデンスベルガーが「ハチミツはどこに売っているのですか」と尋ねると、その養蜂家は「ここに私の顧客たちがいます」と子どもたちを指さして答えました。

一方、ここヨーロッパでは、ハチミツからできるだけ多くの利益を搾り取ろうとする傾向があります。多くの労働者を抱える企業家が、彼らからできる限りの利益を搾り取ろうとするのと同じです。ミツバチに対しても、まったく同じことが行われています。

さらに、月光が花のハチミツ形成や蜜形成に一定の影響を与えるという主張には、何か根拠があるのだろうか、という質問も出されています。（『養蜂新聞』第11号より）

これに対してミュラー氏が次のように反論します。エルブスメール氏も養蜂新聞を見れば分かる通り、そのスペインの養蜂家というのはハチミツを転売すらしい零細な養蜂家にすぎない。エルブスメール氏は、現

代の養蜂が何を意味し、そこに何の関係しているのか、そしてその結果として「採算の考慮」が不可欠であるということをまだ理解していない。他のあらゆる仕事と同じように、収益性を計算に入れないのであれば、養蜂などやめてしまわなければならない。また、もし人工的な飼育方法（近代的な養蜂技術）でハチミツを生産しなければ、これほどの量は到底得られない。

時には1〜2キロのハチミツしか採れないこともあり、蜂群の健康を維持するために、やむを得ず少しのモミの木（ハチミツ（甘露蜜））を抜き取らなければならない状況もある。それだけのことなのだ。その後に凶作の年が来れば、4月や5月まで（冬越しの蓄えが）持たなくなってしまう。蜂群を生存させ続けるためには、砂糖、カモミールティー、タイム、そして少量の塩を混ぜた人工飼料を与えて冬を越させなければならない。近代的な養蜂場では、養蜂家が費やした時間が「5時間半」というように極めて正確に記録されており、時給は1フランまたは1.50フランで計算される。そうすると、ハチミツのコストは（1キロあたり）7フランにもなってしまう。

さらに減価償却も計算に入れなければならない。巣が駄目になれば、新しく補充する必要がある。やはり、養蜂経営は採算が合わなければならないのだ。養蜂家がいつまでも古い考え方に固執しては、前進することはできない。エルブスメール氏のようなやり方ならそれでもいいかもしれないが、もし私が大規模な養蜂場を経営するとなれば、計算を弾いた上で「6フランではすでに赤字だ」と言わざるを得ない。アメリカの養蜂家たちも、まったく同じスタンスをとっている。

また、80年から100年経つと蜂群が絶滅してしまうという話（※シュタイナーによる事前の警告）については理解できない。ドクター（シュタイナー）がどういう意味で、50年または100年以内に人工飼育が行き詰まる可能性があると言っているのか、よく分からない。

第2の点である「養蜂家（主）が亡くなったことをミツバチに告げる儀礼」について言えば、世話人が亡くなった際に養蜂場の大部分の蜂群が死滅してしまったという事例は、確かに自分も以前に言及した通りである。しかし、それがなぜ起こるのかについては、自分には理解できない。

最後に、ホテルなどで出される「本物ではないハチミツ」について言えば、一流ホテルはアメリカ産のミツバチのハチミツを大量に購入している。しかし、ミツバチにそのアメリカ産のハチミツを餌として与えると、蜂たちは死んでしまう。それだって、ミツバチが作った産物であるはずなのに。

次に、ミツバチに刺されることについてです。汗はミツバチにとって最悪のものです。もし、ミツバチが羽を鳴らして鋭い音や唸るような音を立てているのが聞こえたら、その場に立ち止まるのが賢明です。

ミツバチの針が人間にどれほどの影響を与えるかという質問に関して、私の知っている事例をお話ししましょう。ある体格の良い男性——バインダー氏よりもさらに大柄な男性ですが——が、一匹のミツバチに刺されました。すると彼は「私を支えてくれ、ミツバチに刺された！」と叫んだのです。彼は蜂の毒に対して異常なほど敏感（アレルギー体質）でした。その人物は、少し心臓を病んでいる人でした。おそらくドクター（シュタイナー）は、ミツバチの刺傷がどのような場合に特別な危険をもたらすのかについて、何か言及してくださるでしょう。

例えば、「スズメバチ（モンスズメバチ）に3回刺されると馬も死ぬ」と言われています。少し前、私の養蜂小屋の中にスズメバチの巣を見つけました。私はその幼虫を取り除いたのですが、スズメバチたちは非常に臆病で、暗闇の中では刺してきませんでした。屋外であれば、おそらく刺してきたでしょう。

(※ここからシュタイナーの回答が始まります)

シュタイナー博士：

では、これらの事柄についてできるだけ筋道を立ててお話するために、まずは「ミツバチが養蜂家（世話人）を識別しているか」という問題から入ることにしましょう。

皆さんは（これまでの議論に対して）一つの判断を下されました。その判断は、理屈や知性だけで物事を見ている限りにおいては、当然ながらまったく正当なものです。しかし、ここで皆さんに一つ考えてみてほしいことがあります。

例えば、あなたにある友人がいるとします。その友人と、仮に1915年に知り合ったとしましょう。その友人はここヨーロッパに残り、あなたはアメリカへ渡り、10年後の1925年に戻ってきました。その友人は、仮にアルレスハイムに住んでいるとします。あなたがアルレスハイムに行き、その友人に再会したとき、あなたは彼のことが誰だか分かります。

しかし、その10年の間に、一体何が起きていたのでしょうか？ 以前にも皆さんに詳しく説明した通り、人間の身体の中にある物質や材料、成分というものは、7～8年も経てば完全に総入れ替えされてしまいます。当時のものは何一つ残っていません。つまり、あなたが10年ぶりに再会した友人の体内には、あなたが10年前に物質として目にしたのは、本当に「何一つ」残っていないのです。それにもかかわらず、あなたは彼が誰であるかを識別できました。

私たちがその友人を外側から眺めると、確かに彼は一つの繋がった肉体の塊として見えます。そのように見えているのは確かです。しかし、もしあなたが、十分に倍率の高い巨大な拡大鏡でその友人を見たとしたら、どうなるでしょうか。彼の頭の中を一本の血管が流れているのが見えるでしょう。確かに、普通の目や小さな虫眼鏡で見れば、それは普通の血管に見えます。しかし、途方もなく大きな拡大鏡を想像してください。そこを流れる血液は、もはや元のように見えません。それは、まるで小さな生き物（細胞）のような無数の「点」の集まりとして見え、しかもそれらの点はじっとしておらず、絶えず激しく震えているのです。

そして、その光景をじっと眺めていると……それは、ブンブンと群れをなして飛び回っているミツバチの分蜂群に、呪わしいほど不気味によく似ているのです！

人間というものは、その肉体を十分に拡大して見ると、まさにミツバチの群れと全く同じように見えるのです。このことの真意を見抜いてしまえば、ある人間が10年後に自分を再び識別してくれるということ自体、本来なら理解できない奇妙なことに思えてくるはずです。なぜなら、その激しく動き回る無数の小さな「点」は、10年前のものは一つとして残っていないからです。相手の目にあるのも、今や全く別の「点」です。体内には全く別の「小さな生き物たち」がいるというのに、それでも人間は相手を再び認識するのです。

つまり、私たちがお互いを識別できるのは、私たちが形作っている個々の「小さな生き物たち」や「小さな植物たち」のおかげでは決してありません。人間が「全体」として、私たちが再び認識しているのです。

そしてミツバチの巣箱（コロニー）もまた、単に「何千、何万匹ものミツバチの集まり」と呼ばれているだけのものではありません。巣箱全体が一つの「全体」であり、一つの「完全な生命体」なのです。ですから、養蜂家を識別している、あるいは識別していないのは、個々のミツバチではなく、巣箱という「全体」そのもののなのです。

もし、拡大鏡の代わりに「縮小鏡」を持っていたとしたら、あなたはこれらすべてのミツバチを一つに凝縮させ、人間の筋肉と同じように綺麗に結合させることができるでしょう。これこそが、ミツバチを観察する上でまさに注意しなければならない点です。つまり、個々のミツバチだけを相手にしているのではなく、完全に結ばれ、一つの「全体」を成している存在を相手にしているのだ、ということです。

そして、これは単なる理屈や知性だけでは捉えることができません。「全体」を「全体」としてそのまま眺めることができないからです。だからこそ、ミツバチの巣箱というものは、私たちに途方もなく多くのことを教えてくれます。なぜなら、巣箱のあり方は、私たちが頭の中で巡らせる理屈を完全に覆してしまうからです。理屈の上では、いつも「本当はこうなるはずだ（＝個々の蜂はバラバラだ）」と考えがちになります。しかし巣箱の中では、実に驚くべき、不思議なことが起きているのです。私たちが知性でパッと思いつくような単純な仕組みにはなっていません。

したがって、養蜂家（主）が亡くなるという変化が、実際にミツバチの巣箱に一定の影響を与えるという現象は、到底否定できるものではありません。それは厳然として存在します。経験がそれを証明しています。単に一つの養蜂場だけでなく、数多くの養蜂の現場を実際に見てきた人であれば、その事実をはっきりと感知しているもののなのです。

そして私は、次のようなこともお話しできます。私にとって養蜂というものは、実にさまざまな形で、それこそ私がまだ少年だった頃に極めて身近なものとなりました。当時、私は養蜂に並々ならぬ興味を抱いていたのですが、それは、当時の私が養蜂における金銭的な事柄や経済的な問題、経営上の問いに対して、現在や後年ほどには関心を持っていなかったからでもあります。

というのも、当時すでにハチミツは非常に高価だったため、私の両親の貧しさでは、私たちはハチミツを自分で買うことなど到底できなかったからです。実のところ、私たちはいつも近所の人たちからハチミツをプレゼントされていました。大抵はクリスマスの時期でしたが、その後も季節の移り変わりの中でたくさんプレゼントされたため、一年中、手元にハチミツがある状態でした。近所で分け合われていたのです。ですから、経済的な問題には全く関心が向きませんでした。少年時代の私は、必要な分だけ、もらったハチミツを恐ろしいほどたくさん食べていたからです。

なぜそんなことが可能だったのでしょうか？ 今日の同じような状況であれば、それほど簡単にもらったハチミツを手に入れることはできないでしょう。しかし当時、私の実家の近所にいた養蜂家たちは、そのほとんどが農家であり、農業という営みの中に養蜂を組み込んでいたのです。

これは、皆さんのうちのどなたかが個人の趣味で養蜂を始め、本業は自分の賃金で暮らさなければならぬ労働者である、という場合とは全く異なる状況です。農業の内部で行われる養蜂は、そもそも（コストとしては）意識されることすらなく営まれます。そこでは労働時間など、言うなれば全く考慮の対象になりません。なぜなら、それは他の仕事の「合間」にできることだからです。まさに農業においては、常にどこか別の場所で時間を節約したり、別の作業を別の時間へとずらしたりすることで、そのような時間が融通されてきました。いずれにせよ、ハチミツはそうした日々の営みの隙間から生まれてくるものであり、当時の人々は実際に「ハチミツはあまりにも価値があるもので、そもそもお金で買えるようなものではない」という感覚を持っていたのです。

そしてこれは、ある意味で実際に正しい感覚です。なぜなら、現代の状況下においては、およそこの世に存在するあらゆるものが「間違った価格比率（不当な価格形成）」にさらされている、というのが実情だからです。本来、現在の価格比率について今さら議論を始めても意味がありません。すべてが間違った価格比率のもとにあり、価格については、まさに国民経済学的な基礎（マクロ経済の視点）から、もっと包括的な形

で議論されなければならないからです。

個々の食料品の価格について個別に議論したところで、大した成果は得られません。そしてハチミツは、単なる嗜好品や高級品（贅沢品）ではなく、生命を維持するための「食料」なのです。健全な社会秩序の中であれば、当然ながらハチミツの価格も自ずと健全なものに落ち着くはずです。その点には全く疑いの余地がありません。

しかし、私たちが現在、およそ健全とは言えない社会状況の中で暮らしているがために、あらゆる問題が不健全な形で捉えられるようになってしまっています。

今日では大規模な大農場へ行くと、次のようなことが起きています。そうした大農場の管理人——通常、彼らは伝統的な農民ではなく、大規模農地を管理するビジネスマン（経営管理者）ですが——が、自分のところの牛からどれだけの量の牛乳が採れるかについて語る言葉は、実に恐ろしいものです。彼は1日に信じられないほどのリットル数の牛乳を搾り取っています。牛の本来の自然な性質を知っている者なら、「牛からそれほど多くの牛乳を得るなど、本来は不可能なことだ」と分かるはずです。

それにもかかわらず、彼らは実際にそれだけの量を搾り取っているのです！ 確実に、現にそれだけの量を手に入れています。ある農場などでは、牛が本来の乳生産能力で出すことができる量の、実に2倍近くにまで達しているところもあります。それによって、その農場は途方もなく高い収益性を上げることになります。それは当然のことです。しかも、その牛乳が、自然な環境下で生産された牛乳に比べて著しく活力が劣っているようには、一見したところ簡単には気づくことすらできません。つまり、最初のうちは、そこで何か悪いことが起きているとは到底証明できないのです。

しかし、例として次のようなお話をしましょう。私たちはここ数年、牛の「口蹄疫」に対する治療薬の実験を数多く行ってきました。これらの実験は、大規模な商業農場でも行われましたし、大規模農場ほど極端な搾乳を行っていない、小さな伝統的農家でも行われました。

口蹄疫に対してその薬がどのように効くかを検証しなければならなかったため、当然ながら多くの知見を得ることができました。ただ、この件は最後まで完遂することはできませんでした。というのも、当局（公式な機関）がそうした試みに耳を傾けようとしなかったためであり、また現代ではあらゆる種類の認可（特許や営業許可など）が必要とされるからでもあります。しかし、その薬の効果は並外れて素晴らしいものでした。そして、その薬の成分を少し変えたものは、犬のジステンパー治療薬、いわゆる「シュタウペ・ハイル（Staupe-Heil）」として、現在でも非常に好ましい形で応用されています。

このような実験を行ってみると、次のようなことが分かります。過剰な搾乳のために過度な「調教（品種改良や飼育管理）」を施された牛から生まれた子牛は、明らかに（体質が）脆弱になっているという事実を目にすることになります。そのことは、治療薬の効き目を見れば一目瞭然です。言わば、薬の効果があるかないかという差が、そこに非常に拡大されて現れるのです。

もちろん、口蹄疫で死にさえしなければ、その子牛もそれなりに成長はします。しかし、過剰な給餌によって無理やり多くの牛乳を出すように強いられた牛から生まれた子牛は、牛乳の量をそれほど強制されていない牛から生まれた子牛に比べて、すでに生まれつき弱いのです。

これは第一世代、第二世代、第三世代、第四世代と世代を重ねるごとに現れてきます。初期の段階では、その変化があまりに微細なため、ほとんど気づかれることはありません。このような（過酷な）乳牛飼育が始まってからはまだ日が浅いのですが、私には非常によく分かっています。もしこのままのやり方を続け、1

頭の牛に1日30リットル以上の牛乳を出させようと牛を虐げ続けるならば、遠からず牛の畜産業全体が完全に崩壊してしまうでしょう。そうなれば、もう手の施しようがありません。

さて、人工的な養蜂においては、もちろん（牛のケースほど）極端にひどいことにはなりません。なぜなら、ミツバチという生き物は常に「自ら進んで自分自身を救済する（自己治癒する）」力を持っており、人間の手で飼育されているとはいえ、牛よりもはるかに自然の近くに生きているからです。

乳牛をこれほど虐げて過剰な搾乳を行っていたとしても、まだ彼らを牧草地（放牧場）に出しているのであれば、最悪の事態は免れるかもしれません。しかし、これら大規模な商業農場では、すでにそんなことすらしていません。彼らの農場にあるのは、ただの「舎飼い（牛舎の中に閉じ込めたままの給餌）」だけです。牛は、その自然な環境から完全に引き離されてしまっているのです。

養蜂において、このような（自然から完全に引き離すような）真似をすることは不可能です。ミツバチはその本能的な性質によって、常に外の世界の自然と結びつき続けています。だからこそ、ミツバチは自らを救うことができるのです。そして、この「自らを救済する、自発的に自分自身を助ける」というミツバチの巣箱（コロニー）の能力こそ、この上なく驚くべき、素晴らしいもののなのです。

ここで、先ほどミューラー氏がスズメバチについて話してくれた件に繋がります。彼は時々、自分の養蜂小屋の中でスズメバチを見かけるのに、彼らは刺してこなかったと言いました。普段、屋外でスズメバチが人間に近づいてくれば、それは大変な事態になるというのにです。

ここで、別の事例をお話ししましょう。皆さんご自身がすでにこのような経験をされたかどうかは分かりませんが――養蜂家の方ならご存知かもしれません――、何らかの事情で、ある巣箱を一時的に「空（から）」にしておかなければならない状況が生じることがあります。

ある時、私はそのような空の巣箱の中に、奇妙な「塊」が入っているのを目にしました（※ここでシュタイナーが黒板に図を描く）。一見したところ、それが一体何なのか見当もつきませんでした。ミツバチたちは、一見すると何の理由もないように、そのような塊を作り上げていたのです。

彼らが普段から様々な製品を作り出すために集めてくる、あらゆる材料を使ってその塊はできていました。まさに大きな「石」のように、様々な樹脂やピッチ（松やに）、糊状の物質――これらもミツバチが外から持ち込んでくるものです――、そして蜜蝋などを練り合わせて、一つの大きな塊を作っていたのです。

私はそれを見て、一体中で何が起きているのか好奇心をそそられ、その塊を分解してみました。すると……ドサリと、中からネズミの死骸が出てきたのです。本物の、死んだネズミが丸ごと一匹入っていたのです！

このネズミは巣箱の中に入り込んでそこで死んだのですが、考えてもみてください、死んだネズミから漂う腐敗臭（死臭）が、ミツバチたちにとってどれほど恐ろしい災いとなったことでしょう。そこで巣箱全体が、このような非常事態に際して、この死んだネズミを（樹脂などの）殻で包み込むという本能を働かせたのです。その殻を分解したときには確かに凄まじい悪臭がしましたが、それまでの間、その悪臭は殻の中に完全に閉じ込められていました。

巣箱全体の中に息づいているのは、単に「巣房を作る」「幼虫に餌を与える」といった日常的な本能だけではありません。滅多にないことですが、仮にネズミが侵入してきたときには「何をすべきか」という本能までもが、そこに息づいているのです。そして、ミツバチたちには死んだネズミを外へ運び出す力がなかった

ため、彼らは自らを救うために、その周囲に殻を作り上げました。

他の養蜂家からも、カタツムリや、特にナメクジなどがこのように巣箱に入り込んだ際、それらが同じようにミツバチによって（樹脂で）カサブタのように覆い固められたという話を私は聞いています。つまり巣箱の中には、一般的な本能だけでなく、真の意味での「自己治癒本能（衛生・防衛本能）」が息づいているのです。そして、それらは極めて効果的に機能します。

さて、もし巣箱の中にスズメバチの巣が作られてしまった場合、ミツバチたちはネズミのときのような（固い樹脂の）構造物を築くことはしません。その代わりに、彼らはそのスズメバチの巣の周囲を、自分たちの「蜂毒の分泌物」で絶えず満たすのです。これによって、スズメバチたちはエネルギーや、そもそも襲いかかってくるための活力を奪われてしまいます。

ちょうど先ほどの死んだネズミが、四方八方に悪臭を放つことができなくなったのと同じです。スズメバチは、固い殻で完全に閉じ込められないまでも、ミツバチたちが周囲に立ち込めさせる（毒の）蒸気の中に絶えずさらされることになります。これはスズメバチを弱らせ、ミツバチに危害を加えないようにするためです。こうしてスズメバチは力もエネルギーもすっかり失ってしまうため、人間がその巣に近づいて手を出しても、もはや刺してくることすらできなくなるのです。

確かに、ミツバチを相手にする際、単なる知性や理屈を超えて、ある種の「内的な直観（観察眼）」を持って実際に物事を追っていくのであれば、決して上手くはいきません。先ほどの（血液とミツバチの群れの）イメージは、実に素晴らしいものです。だからこそ、こう言わなければなりません。ミツバチの巣箱とは、徹頭徹尾一つの「全体」なのです。それは全体として捉えられなければなりません。

しかし、一つの「全体」において、そこに生じた害（歪み）というものは、決して一瞬で目に見える形では現れてこないものなのです。

人間というものをよく知っている人なら、例えば次のように自分に言い聞かせることができるでしょう。ある人は——そういう人は実際にいるものですが——65歳や66歳になってもまだかなり若々しく元気に満ちています。その一方で、別の人はもはや若々しくなく、血管の内部の石灰化（動脈硬化）などに苦しんでいます。これをじっくりと観察し、その人の「幼少期」に一体何が起きていたのか、その関連性を突き止めることは極めて興味深いことです。

例えば、ある子どもに、石灰質の土壌と関係のある（カルシウム分などが過剰な）餌を多く摂取しすぎている牛から搾った牛乳を与えるとします。それによってその子は、育児のために与えられているその牛乳を通じて、すでに石灰質土壌の性質をいくらか体内に取り込んでしまうことになります。

この影響は、おそらくすぐには全く現れません。すると、現代によくいるタイプの医学者がやってきて、そのような牛乳で育った子どもと、母乳で育った別の子どもを並べて見せ、「ほら見なさい、何の違いもないではないか」などと言うのです。しかし、母乳で育った子どもは65歳、66歳になってもまだ若々しいままであるのに対し、あの牛乳で育った子どもは65歳、66歳になったときに（血管が）石灰化してしまうのです！

なぜなら、人間は一つの「全体」であり、ある時期に作用したものは、遙か後になってから副作用をもたらすからなのです。ある時期には完全に健康であるように見えても、それでも後々にまで影響を及ぼし続けます。

これこそが、私が「現在の（ミツバチの）状態からは、人工的な養蜂が一体何を意味するのか（あるいは意味しないのか）などということは、およそ何一つ結論づけることはできない」と言うときに意味していることなのです。それは50年後、60年後、あるいは100年後という長いスパンを見据えて判断しなければなりません。

ですから、今日誰かが「50年、60年、100年経ったからといって、状況がそんな風になるなんて理解できない」と言ったとしても、それは全く当然のことなのです。現時点でそれをどうしても認めようとしない姿勢は、かつて私がある農場で経験したことと全く同じです。

信じてください。私がかつてその農場で、「農場であまりに多くの牛乳を搾り取るべきではない。そんなことをすれば牛の繁殖（畜産業）はもっと早くに痛手を被り、四半世紀（25年）もすれば破滅してしまうだろう」と話し始めたとき、私は（農場の人々の猛反発にあい）危うく善意のままに命を落としかけた（袋叩きに遭いそうになった）ほどだったのです。

現在の私たちは、社会的な領域（経済構造）において何一つ手を打つことができないような状況の中で暮らしているため、今日の人工的な養蜂に対して現時点で文句をつけることなど到底できません。しかし、自然にその歩みを委ねつつそれを正しい軌道へと導くことと、そこに何か人工的なものを持ち込むこととの間には、決定的な違いがあるということは理解されなければなりません。

とはいえ、私はここでミュラー氏が言われたことに対して、何が何でも反発しようというわけではありません。おっしゃる通りです。これは現時点ではまだ（科学的に）実証できることではなく、先へと持ち越さざるを得ない問題なのです。ミュラー氏、私たちは1世紀（100年）後にまたお互いに語り合って、その時にあなたがどのような見解を持っているか確かめてみることにしましょう。これは今日、決して決着をつけることができない事柄なのです。そういうことなのです。

（ここでエルブスメール氏が、現在の養蜂家においてはすべてが収益性に還元されてしまっている、と再び指摘します。）

シュタイナー博士：

本業の「傍ら（副業）」で養蜂を営んでいる人を見つければ見つけるほど、その人はあなたが挙げたあのスペイン人の養蜂家と同じような考え方を持っているものです。つまり、今では一般的にもはやそうではないかもしれませんが、50年、60年前の農民は、ミツバチから得られる収入など大して気にしていませんでした。それは彼らにとって、そもそも（生活設計の）計算に入っていないようなものだったのです。彼はハチミツを誰かにプレゼントするか、あるいはもし売ったとしても、その収入を子どもの貯金箱に入れてやる、といったような使い方をしていました。

しかし現在、状況は全く変わってしまいました。限られた時間の中で働き、すべてが労働時間ベースで組み立てられている社会に生きる人が、どうしても収益性に目を向けずにいられるというのでしょうか。社会全体の構造（資本主義的な経済環境）によって、どうしてもそうせざるを得なくなっているのです。

現代の養蜂家の中には、もしその人が（工場などで働く）労働者であるならば、自分の養蜂を適切な方法で管理するために、本業の仕事をしばらく休んだり、休暇を取ったりしなければならない人もいないのでしょうか？（会場から：「確かにそうです！」の声）

そうなれば、当然ながら彼らは、その間に（本業の）全く別の仕事で得られなかったはずの賃金を、コス

トとして差し引き計算することになります。

よく考えてみてください。養蜂というものの歴史はあまりにも古いため、今日では歴史的根拠に基づいて、ミツバチが完全に野生だった頃にどのような状態であったかを語れる人間はもう一人もいません。人々は、私たちが飼育しているミツバチ——つまりヨーロッパのセイヨウミツバチのことですが——しかおおよそ知りません。彼らは「家畜（飼育）としての養蜂」しか知らないのです。私の記憶が確かなら、自然史（博物学）の教科書でも、ヨーロッパに広く普及しているこのミツバチの名称として「一般のイエミツバチ（Gemeine Hausbiene）」と記載されているはずです。

つまり、私たちはミツバチの「家畜としての飼育法」しか実質的に知らないのです。自然そのものがまだ（人間の介入なしに）活動していた頃、一体それがどのようなものであったのかを、私たちは知りません。それほどまでに養蜂は極めて古い歴史を持っているのです。

これほどまでに古い事柄においては、その価値を形作る基礎が、現代の私たちが大半の仕事で扱っているものとは全く異なる土台から生じてきます。考えてみてください。現代の人々が主に扱っている仕事というのは、それが一体いつ誕生したのかを非常に簡単に遡って突き止められるような、歴史の浅いものばかりです。

そこには、二つの異なる「価格形成（の原理）」が存在します。ミツバチの場合、そのルーツは遙か遠い、気の遠くなるような太古の昔へと遡るのです。そのため、ここ数十年の歴史しか持たない金属工業や木材工業のような産業とは、価格のあり方そのものが根本的に異なります。健全な社会秩序が実現して初めて、ハチミツの価格が本来どのように形成されるべきか、そしてそこで生じるべき価格が、現代とは全く異なる（歴史的・有機的な）背景からどのように生まれてきたものであるかが明らかになるでしょう。

現代の人々は、価格形成について語ることがどれほど難しいことであるか、おおよそ想像すらしていません。価格形成について語るためには、現実の諸条件（実体経済のあり方）に対する極めて深い知識が必要なのです。少し前、私自身が価格形成にまつわる、ある実に奇妙で面白い経験をしましたので、皆さんにお話ししましょう。

私の知人である、ある大学教授が国民経済学に関する本を執筆しました。私が講演旅行に出ていた際、彼はその本を私に手渡してくれました。私はその街にしばらく滞在することになり、彼とその本について話す機会があったのですが、私は彼にこう言いました。「私はこの場所に2、3日しか滞在しないので、もちろん本を最初から最後まで今すぐ読むことはできませんが、あちこち拾い読みをさせていただくことはできます」と。

さて、私はその本に目を通した後、その教授に次のように言ったのです。「私はあることに気づきました。私自身は普段、本の巻末にあるような一覧（索引）があまり好きではないのですが、あなたの本に限っては、扱っている用語が並んだ索引が付いていて本当に良かったと思っています。というのも、私は本を手にして真っ先に、『価格』というキーワード（索引用語）のページを探してみたのです。……そうしたら、そこには何もありませんでした！ 影も形も、文字通り『価格』についての記述が一切なかったのです！」

つまり、その人物は国民経済学（経済学）の本を書いたというのに、そこには「価格」についての記述が全くなかったのです！ 皆さん、これは極めて象徴的な出来事です。現代の経済学者たちは、経済学において最も重要な問題を「見ること」すらおおよそできていません。彼らは最も肝心の「価格形成」というテーマを丸ごと省いてしまっているのです。しかし、重要なのはまさに価格形成なのです。すべては価格形成にかかっています。ただ、人々がそれに気づいていないだけなのです。このような経験をすると、その事実がとりわけ

浮き彫りになります。

だからこそ、私たちは次のように言うしかありません。これについても、人々が「より健全な社会秩序をもたらさなければならない」ということを、徐々にでも理解していくのを期待するほかないのだ、と。そうならば、収益性が高いか低いかといった議論など、もはやそれほど交わされなくなるだろうと私は考えています。これらは（歪んだ）競争と結びついた概念だからです。それは単に「同じものを生産する者同士の競争」だけでなく、「異なるものを生産する者同士の競争」も含んでいます。

私の少年時代を振り返り、当時私がいた地域（の農家）の養蜂を例に挙げてみましょう。そこでは実質的に、農民だけがミツバチを飼育していました。——その農民たちときたら、実に見事な肥満体型（怡幅の良い人々）でした。皆さんのうちのどなたかと比べることもできません。なぜなら、ここにいる皆さんの誰も、当時の農民たちほど太ってはいないからです。

当時のハチミツの価格は、お金（現金）を得るためにハチミツを売ることを目的に、わざわざ養蜂を始める人など一人もいないような状態でした。もし当時、ある養蜂家がその農民の隣に並び立とうとしたなら、このような構図になっていたことでしょう（※ここでシュタイナーが黒板に図を描く）。こちらが農民で、こちらが養蜂家、という具合です！ これでは全く（生活が）成り立たなかったはずです。

農民は自分の養蜂を最初から生活設計の計算に入れていませんでしたが、養蜂家として独立しようとすれば、嫌でもその採算を考慮しなければならなかったからです。ですから、当時は（専門の養蜂家としては）到底やっていけませんでした。このように、ひとたび「収益性」という問題に直面したならば、私たちは国民経済学的な条件（マクロ経済の構造）を根本から知り尽くし、考慮に入れなければならないのです。

※図1



ここで、前回の議論に関連して出てきたいくつかの事柄について、皆さんに回答しておきたいと思います。

質問者：

世の中には、ハチミツをまったく受け付けない（体質に合わない）人たちがいます。彼らはハチミツを食べるとすぐに胃の不調（胃痛や消化不良など）を起こしてしまいます。ハチミツがもたらすこのような好ましくない影響を、抑え込む（防ぐ）ための方法はあるのでしょうか？

シュタイナー博士：

さて、ハチミツをどうしても受け付けない（体質に合わない）という人たちは、基本的には、非常に早い段階から「硬化症」、つまり身体全体の組織が硬化していく傾向を持っている人たちです。そのような人は、体内における物質代謝（新陳代謝）のプロセスそのものが非常にゆっくりとしか行われません。

その結果、彼らはハチミツを摂取することができなくなります。なぜならハチミツというものは、まさに「新陳代謝をより活発に、素早くさせること」を目的に作用するからです。本人自身の代謝スピードがあまりにも遅いのに対し、ハチミツはそれを急速に進めようとするため、本人の代謝システムとの間で激しい衝突（不調和）が生じてしまいます。そうして、さまざまな症状を伴う胃の不調が引き起こされるのです。本来であれば、あらゆる人間がある程度のハチミツを美味しく摂取できるべきですし、単に美味しく食べるだけでなく、それを体内で適切に処理できる「内的な能力」を備えているべきなのです。

もしハチミツを受け付けない人が身近にいるならば、何よりもまず、その根本的な原因が一体どこにあるのかを見極めなければなりません。その際、「誰にも効く万能の一般薬」があるなどと考える必要はありません。その人がどのような原因によって身体の硬化へと向かってしまっているのかに応じて、個別にその原因を治療していく必要があるのです。

例えば、次のようなケースが考えられます。

ある人がハチミツを受け付けず、胃の不調を起こすとしみましょう。そこで次のように問いを立ててみます。「この人がハチミツを食べて胃を壊すのは、例えば『頭部硬化症』、つまり頭部の静脈や動脈、あるいは血管の石灰化（動脈硬化）の傾向を持っているからではないだろうか？」と。

もしそうであるなら、その人は人生のある特定の年齢に達したときに、ハチミツが急に合わなくなるということが起こり得ます。その場合、その人を治療するためには、何らかの「リン（ホスホル）製剤」を用いる必要があるでしょう。その治療が功を奏して身体が癒えれば、その人は再びハチミツを適切に受け付けられるようになるのです。

しかし、その原因が（頭部ではなく）肺にあると気づく場合もあるでしょう。その場合は、リン（ホスホル）製剤ではなく、「硫黄（シュヴェーフェル）製剤」を用いなければなりません。これが、この質問に対して私が答えられることです。

大切なのは、「ある人がハチミツで胃の不調を起こす、これにどう対処すべきか」と大雑把に捉えることではありません。そうではなく、次のように考えなければならないのです。「ある人が人生の特定の時期にハチミツを受け付けなくなったとしたら、それは一つの病気である」と。健康な人間であれば、ハチミツを適切に消化できるはずなのです。もし受け付けられないのだとすれば、その人はどこか患っているのであり、その病気の原因を突き止めて治療しなければなりません。

もちろん、ハチミツを受け付けないということは、ブドウ糖を適切に処理できずに糖尿病になってしまうケースほど重大な事態を意味するわけではありません。ブドウ糖を受け付けないというのは、当然ながらより深刻な状態です。なぜならその場合、その人はハチミツが合わない人よりも重い病気にかかっていることになるからです。しかし、ハチミツが合わない場合も同様に一種の病気であり、その病気を治療してあげる必要があります。

（※ここで、参加者から光に関する新しい質問が出されます。）

質問者：

多くの昆虫がそうであるように、ミツバチも暗闇の中では常にロウソクやランプの光に向かって飛んできます。しかし私は、経験豊富な養蜂家たちから「ミツバチは電気の光に対しては、はるかに反応が鈍い」という話を繰り返し聞かされました。明かりのついた電気の懐中電灯を持ってミツバチに近づいても、彼らはまるでその光に全く気づいていないかのように、非常に静かにしています。しばらく時間が経ってから、よう

やく落ち着きを失い始めるのです。それに対して、石油ランプやロウソクの光は、ミツバチをはるかに素早く、そして大量に引き寄せます。このような行動の違いを説明する理由は何かあるのでしょうか？

(これに対して、ミュラー氏も自分自身まったく同じ現象に気づいたことがある、と発言します。)

シュタイナー博士：

さて、皆さん、皆さんもかつての古い建物（※最初のゲーテアヌムのこと）をご覧になった際、そのドーム（天井の丸屋根）が様々な色彩で描かれていたのをご記憶でしょう。あの絵の具は、純粋な植物由来の成分から作られていました。

そして、それらの様々な植物成分から絵の具を作った結果、次のようなことが分かったのです。もしあのドームの中に自然の太陽光が差し込み、それらの色彩がしばらくの間——それにはおそらく数ヶ月、あるいは数年という長い時間がかかったでしょうが——太陽光に晒され続けていたとしたら、色彩は完全に退色してしまっていたはずですよ。何が描かれていたのか、もはや何も見えなくなってしまうことですよ。

それに対して、電気の光に晒された場合には、色彩はそのまま美しく残り続けたのです。そのため私たちは、当時これらの絵の具を扱う際、もし画家が太陽光の下で作業しようとしたならば、そもそも最初から退色してしまって全く使い物にならないような方法で作業を進めていました。太陽光の下では完全に色あせてしまう色彩が、電気の光の下ではそのまま維持されたのです。

このように、太陽の光——これには（自然界の生命を育む）化学的な作用が含まれており、皆さんが言われた通りミツバチはそれを鋭敏に察知するのですが——は、電気の光とは全く異なる方法で作用するので

す。

電気の光というものは、実のところ、あらゆる物質的なものに対してはるかに「硬化させる（凝固させる）」ように作用し、物質を（太陽光のように）しなやかに分解・融和させることがありません。そのためミツバチは、電気の光に晒されると、最初のごくわずかで微かな「硬直状態（一種の金縛りや麻痺状態）」に陥ってしまうのです。太陽の光の中では、このようなことは決して起こりません。そして、しばらく時間が経ってから、ミツバチはそこからようやく回復（覚醒）するのです。

この光の件について、私が申し上げたかったのはそういうことです。

(※ここで、宇宙の星座と月が与える影響についての最後の質問が出されます。)

質問者：

黄道十二星座（獣帯のサイン）がハチミツの生産に与える影響についてお尋ねします。伝統的な農家の間では、今でもこれらが非常に重視されており、例えば種をまく（播種する）際には「月が双子座の運氣にあるときに行く」といった工夫がなされています。そこで伺いたいのですが、このように個々の星座を評価することは、単に（経験上の）外見的特徴から判断しているだけなののでしょうか、それともそこには何か本質的な根拠（宇宙的な背景）が存在するのでしょうか。

シュタイナー博士：

これらの事柄は、言うまでもなく、現代（の主流派科学）においては一度も正しく科学的に扱われたことはありません。しかし、これらを真に科学的に取り扱うことは十分に可能です。

皆さんにこれまでお話ししてきた事柄（天体のリズム）は、ミツバチの巣箱（コロニー）そのものに対して

確かに大きな影響を与えています。ミツバチ、とりわけ女王蜂は、ある意味で純粋な「太陽の生き物」であり、そのためミツバチ自身に対しては、太陽が黄道帯（十二星座）を通過していく中で描き出す天体の運行プロセスそのものが、最も大きな影響を及ぼしています。

しかし同時に、ミツバチたちは植物の中に何を見出すか（どのような蜜が用意されているか）に当然ながら依存しています。そして実のところ、月が黄道十二星座を通過していくリズムは、植物の種まきや、種子が（生命力を持って）外へと解き放たれるプロセスと、極めて深い関わりを持っています。ですから重要なのは、ミツバチが植物の中に、あらかじめどのように準備された成蜜を見出すか、という点にあるのです。

したがって、こうした農家の伝承は決して根も葉もない「完全な作り話」などではありません。ただし、世間で一般的に語られているようなやり方は、言うなれば素人の浅ましい知識として表現されてしまっています。これらの事柄は、まず（精神科学の視点から）科学的に深化されなければならないのです。

——さて、本日の私たちの時間はこれでいっぱいになりました。まだ話し足りない点については、来週の土曜日、午前9時から再び議論することにしましょう。

皆さんの胸の内には、まだまだたくさんの質問（聞いてみたいこと）が残っていることと思います。養蜂というものは、これほどまでに美しく、そして有益な営みなのですから、どれほど質問しても質問しすぎということはありません。ぜひ皆さん同士でも語り合ってください。そして、ミューラー氏にも私にも、どんどん質問を投げかけてください。

私たちは、互いの意見の対立（近代主義と自然主義のギャップ）に対しても、きっと穏やかで調和に満ちた着地点を見出すことができると考えています。私たちは、ミツバチたちのようにすぐ「針（チクチクとした言葉）」を突き立てる必要などありません。すべてを穏やかに解決していくことができるのです。ですから、皆さんも疑問に思うことがあれば、どうぞ遠慮なく全てぶつけてください。

第六講義

「労働者講義」より

〔GA351（第12講）〕ドルナハ、1923年12月10日

●基本的な視点

現代養蜂は効率優先で古い本能を失ったが、
地域適合・胃液と血液のバランス・植物との深い共生
といった自然の本質を理解し、
適切に補うことで健康な養蜂は可能である。

ハチミツは単なる食品ではなく、
人間形成に深く関わる霊的・医学的重要性を持っている。

●要点

1) 巣板（ハチの巣）を一緒に食べるのは体に悪いのか？

- ・嗜好の問題。自然の巣板（蜜蝋）を食べるのは個人差が大きく、
人によっては胃を悪くするが、問題なく消化できる人もいる。
- ・蜜蝋と一緒に摂取すると、
ハチミツが腸でより長く消化されやすくなる可能性がある。
（通常はリンパ管で消化される）
- ・医学的に確かめるには、実際に多数の人で比較観察する必要がある。

2) 現代のミツバチの病気について

- ・昔は病気が「重視されていなかった」だけで、
搾取が直接的原因ではない。
- ・昔の養蜂家は強い本能（直感）を持っており、
麦わら製の巣籠を使い、風向きや場所を細かく考慮して
ミツバチを「個人的に」扱っていた。
- ・現代の木製養蜂箱は空気や物質の影響が異なり、
本能も失われたため、ミツバチの体内バランスが崩れやすい。
- ・根本は胃液（酸性）と血液（アルカリ性）の比率の乱れであり、
気候・光・熱条件だけでは現代の箱では不十分。

3) 病気を克服するための提案

- ・巣箱の周囲に小さな温室や花壇を作り、
ミツバチが必要とする植物を人工的に栽培する。
（特に5月頃の花不足を補う）
- ・すでに一部の養蜂家が黄色いクロッカスなどを
植えているのは良いが、
アメリカクロバー（一年中花が咲く）のようなものは
一時的に駆り立てるだけで長期的に逆効果である。

（地域に適合しない異質な植物は負担になる）

- ・例：ブドウのフィロキセラ禍のように、
外来種に頼ると一時的に成功しても
最終的に「アメリカ化」して本質が変わってしまう。

4) ハチミツ生成の本質（スズメバチ／タマバチとの比較）

スズメバチ（特にイチジクコバチ）の生態を通じて、
ハチミツの本質を説明している。

- ・スズメバチは植物に卵を産み、
虫こぶを形成させて保護物質を得る。
（植物から「ハチミツ物質」を盗む）
- ・古代ギリシャのイチジク品種改良（カプリフィケーション）：
野生イチジクにハチを産卵させ、
未成熟の果実を栽培用イチジクに吊ると、
ハチが急いで産卵し、果実が2倍甘くなる。
（ハチミツ物質が移される）
- ・ミツバチはこのプロセスを「さらに高度に体内化」した存在。
スズメバチが植物内部でやっていたことを、
体内でハチミツに変え、
蜜蝋の巣板（六角形のセル）として外部に表現する。
- ・つまり自然界全体が一人の養蜂家であり、
ミツバチは樹木の内部プロセスを「表の世界」に引き出した生き物。

5) ハチミツの人間への意義

- ・ハチミツは非常に優れた栄養素。
特に婚約・妊娠期間中に母親が摂取すると、
くる病予防や子供の骨格形成に極めて有効。
- ・将来は「人生の各時期に何を食べるべきか」
という人智学的な社会的医学が確立されるべき。

●本文

ドリンガー氏が、巣板（蜂の巣）について質問したいとのこと。巣板と一緒に食べる人がおり、昔は居酒屋（飲食店）でも時々テーブルに出されていたそうです。氏は、巣板と一緒に食べることが体に有害であるかどうかを知りたいと考えています。また、ミツバチの病気に関しては、搾取（商業的な大量生産）がより激しくなった現在に比べ、昔はそれほど深刻ではなかったのではないかと述べています。

ミュラー氏は、巣板を食べるのは一種の嗜好であると言います。その場合、当然ながら人工の巣板ではなく、自然に作られた巣板のことです。ミツバチの病気に関しては、搾取によって生じたのではなく、単に昔はそれほど重視されていなかっただけだと言います。昔はそれほど弱小な群れ（蜂群）が多くはなかったため、それほど注意が払われなかったのだそうです。また、イギリスからスイスへと、それまでここにはまったく存在しなかったミツバチの病気が入ってきたとのこと。

エルブスメール氏は、これはおそらく化学肥料（人工肥料）に原因があるのではないかと考えています。化学肥料のせいで、花が病気になるってしまうからです。

シュタイナー博士：

この2つの事柄に関しては、次のように言うことができます。人間が巣板と一緒に食べるというのは、一種の嗜好であるというのは全くその通りです。このような事柄においては、当然ながら、それが人間にどのように作用するかを判断することが重要になります。しかし、それは当然、純粋に医学的にしか答えられない問いです。この問いについて何らかの意見を述べるには、巣板、つまり蜜蝋と一緒に食べる人たちの健康状態を、実際に観察してみるしかありません。

私自身、これまでに巣板と一緒に食べたという人を何人か知ってはいますが、彼らはいつも、ハチミツを吸い出した後に（巣を）吐き出していました。そのため、ハチミツと一緒に大量の蜜蝋を摂取した人の観察には、私はまだ成功していません。

推測として言えることがあるとすれば、まさに次のようなことです。人間はそれぞれ異なるものに対して耐性を持っており、誰もが同じというわけではありません。人によっては、蜜蝋を摂取することによって単純にある種の胃の病気を引き起こしてしまう場合もあるでしょう。そのような人は、摂取を控えるべきです。しかしその一方で、蜜蝋をまったく問題なく消化し、その残渣を排泄物として出すことができる人もいます。もしもありません。

そのような人々（蜜蝋を消化できる人）について言えるのは、彼らが巣板と一緒に食べること、つまり、蜜蝋がすでに体内に入っている間もハチミツをできるだけ長く蜜蝋に付着させておくことによって、ハチミツがより「腸」で消化されるようになるということです。通常であれば、ハチミツは腸から出た後、リンパ管などを通る段階になって初めて消化されます。

さて、ここでこう言うことができます。これもまた、人間の健康状態に左右されるのだと。世の中には、より腸で消化するタイプの人がいれば、よりリンパ管で消化するタイプの人もあります。どちらが良い、悪いと言うことはまったくできず、それは人それぞれなのです。確かなことを言うためには、一定数の人々に巣板付きのハチミツを食べてもらい、もう一定数の人々に巣板なしのハチミツを食べてもらい、そしてこれら2つのケースが互いにどのように異なるかを純粋に調査するしかありません。

ミツバチの病気に関しては、病気全般に言えることですが、ミュラー氏が言われたことを考慮に入れなければなりません。人間の場合でも同様で、昔は特定の事柄にまったく注意を向けなかったのに対し、今日ではそれを極めて入念に研究する、つまり、あなたが言われたように昔は重視されていなかったことが、今日では注目されるようになっているのです。

しかし、ここにはそれとはまったく別の、本質的な要素も絡んでいます。かつての養蜂家は、実は非常に多くの「本能（直感）」を持っていました。彼らはなぜそうするのかを説明できずとも、多くのことを（直感的に）実践していたのです。今日の現代人は、この本能を失ってしまいました。今日では、あらゆることにおいて「なぜ（理由）」を知りたいがります。そして、まさにこの「なぜ」を判断するためには、物事に極めて徹底的に踏み込むことが必要なのです。しかし、現代の知識では通常、まだそこまで至っていません。

かつての養蜂家は、ミツバチをいわば完全に「個人的に」扱う、まさに正しく親身に扱う強い本能を持っていました。ここで考えてみてください。昔使われていた（編み込まれた）「蜂の巣籠（スカップ）」と、現在使われている「養蜂箱（木箱）」とでは、すでに確固たる違いがあるのです。現代の箱は木でできています。木というものは、昔の蜂の巣籠が編まれていた素材、つまり麦わら（ストロー）などとはまったく異

なるものです。また麦わらは、それが麦わらであることによって、抽象的な木とは異なり、空気中からまったく異なる物質を引き寄せます。したがって、このような外的な扱い方の違いだけでも、すでに大きな差が生まれているのです。

さて、かつての養蜂家がしていたこと、とりわけ彼らが強い本能（直感）を持っていたということについて、これらすべてをまとめると次のようになります。昔の養蜂家は、なぜそうするのか理由さえ分かっていないこともありましたが、巣箱を完全に特定の場所、たとえば、しばしばどちらかの方向から風が吹いてくるような場所などに設置していました。しかし今日では、利便性や効率性の理由から、ただスペースが空いている場所などに設置してしまいます。気候的な要素も一応は考慮されてはいますが、もはやそれほど重視されていません。

（ここでミュラー氏が、自分は気候を非常に強く考慮していると発言します。氏の養蜂場は丘陵地帯にあり、北風はほとんど当たらず、東風なども少ない場所にあるとのこと。）

シュタイナー博士：

木という素材は、こうした（環境の）影響に対して、麦わら（ストロー）ほど敏感ではありません。私は何も、昔の「蜂の巣籠（ストロー・スカップ）」に戻ろうと運動を起こしているわけではありません。しかし、こうした事実は厳然として存在し、ミツバチがその体内のあらゆる内部作業を行う際に、非常に強く作用しているのです。

ミツバチが花の蜜を集め、それを人間が口にする「ハチミツ」そのものへと体内で変化させるプロセスは、凄まじい労働です。これは途方もない作業であり、ミツバチはこれを成し遂げなければなりません。では、何によってそれが可能になるのでしょうか？それは、ミツバチの体内にある「2つの液体のあいだの、極めて特定の比率」によってです。

その2つとは、一つが「胃液」であり、もう一つが「血液」です。ミツバチを観察すると、その身体を構成している白っぽい胃液と、やや赤みがかった血液があります。ミツバチの生命は、本質的にこの2つの部分から成り立っています。他のすべての器官は、いわばこの胃液と血液の相互作用によって配置され、形作られているのです。

そして重要なのは、この胃液と血液のあいだに、極めて特定の比率が保たれていることです。この2つは、化学的に全く重大な違いを持っています。すなわち、胃液は「酸性」です。それに対して血液は、化学で言うところの「アルカリ性」です。つまり酸性ではなく、酸性化され得る性質のものです。

もしミツバチの胃液に十分な酸度がなくなると、即座にミツバチの体内で何らかの異変が起き、ハチミツ作りのための内部組織が乱されてしまいます。そしてもう一方の血液は、それに応じた適切な気候条件、光の条件、熱の条件などが整っていることによって初めて、十分に強く維持されるのです。

近年発生しているような新しいミツバチの病気を適切に克服しようとするならば、ミツバチの「胃液と血液の正しい比率」に対して、いかに正しい影響を与えることができるかという点にかかっています。

かつてのように単純なやり方で養蜂を行うことはもはやできないため、気候条件や熱条件の調整だけでバランスの維持を達成することは不可能です。なぜなら、そうした自然の条件は、現代の新しい巣箱に対しては以前ほど強く作用しないからです。したがって、「何がミツバチの血液に最も好ましく作用するのか」を調査しなければならなくなります。そして将来、養蜂家たちは、ミツバチの体内で常に正しい血液形成が行われるように配慮しなければならなくなるでしょう。ここで重要になってくるのが、次のようなことです。

ミツバチがほぼ例外なく樹木からしかハチミツを集めることができない年というものがあります。このような年には、ミツバチの血液の組成が著しく危機に瀕することになります。こうした年のミツバチは、他の年に比べて病気にかかりやすくなるのです。

そこで将来の養蜂家にとって重要になるのは、一種の、ごく小さな（多くは必要ありません）「温室」を設けることです。その中で、ミツバチが特定の季節に好み、必要とするような植物を人工的に栽培するのです。そうして、たとえば5月にミツバチを外に放つことができるような、少なくとも小さな花壇を一つ用意しておきます。もし彼らが本来得べき植物が、その5月にたまたま発育不良だったり存在しなかったりしても、ミツバチは自らその場所を見つけ出していくものです。

つまり、このように巣箱の周囲で人工的な植物栽培を行って手助けをすることによって、こうした病気を確実に退治できるようになるでしょう。このような提案は、ミツバチの自然界における性質に関する知識から導き出されたものであり、有効性が証明されると考えられます。実践されれば、養蜂家にとって非常に良い成果をもたらすでしょう。これによってミツバチの病気は克服されます。しかし、実践的に進めるためには、あらゆる相互のつながりを考慮に入れなければなりません。

これは、私が今日「こうである」と言い切っているわけではなく、ただ次のように述べているにすぎません。すなわち、ミツバチという存在の本質全体から見れば、こうしたことは非常に容易に導き出せるのであり、ある季節に発育不良だったり存在しなかったりする植物を人工的に栽培するという試みを行うことで、ミツバチの健康状態はおそらく大いに向上するだろう、ということです。

これらはまさに、私が完全に確信している事柄です。私たちが再び、真に自然に即した方法で物事に取り組むようになれば、こうした結果はおのずと現れてくるでしょう。なぜなら、今日において重要なのは、歴史を再び過去の状態へと逆戻りさせることではないからです。

政治の世界で反動主義者（懐古主義者）になる必要がないのと全く同様に、他の個々の領域においても反動主義者になる必要はありません。そんな必要はなく、私たちは進歩とともに歩まなければならないのです。しかし、ここで問題になるのは、古いやり方から抜け出した際に、失われたものを別の何かで補い、帳尻を合わせるために何をするか、ということです。これが、この件に関して私が申し上げたかったことです。

ミュラー氏は、養蜂家たちが現在すでに、人工的な草花栽培に向けて動き出していると言います。たとえば、特にミツバチに花（蜜）を提供するために、黄色いクロッカスが大量に植えられており、同様に小さな黄色い花をつける他の植物なども植えられているとのこと。また、高さが約2メートルにもなり一年中花を咲かせる「アメリカクローバー（シロバナシナガワハギなど）」も非常に多く栽培されているそうです。これは秋になって初めて刈り取られ、それまではミツバチのために花を残しておくのだそうです。これこそが、まさに必要なことなのだと思います。

シュタイナー博士：

確かに、そのような試みはすでに始まっています。しかし、その相互のつながりについての理解が圧倒的に不足しているのです。ですから、あなたが最初に挙げられた（黄色いクロッカスなどの）方法は良いアプローチであり、今後も続けていくことができます。

しかし、あなたが挙げられた、一年中花を咲かせる「アメリカクローバー」に関する試みは、いずれ人々がやめることになるものです。なぜなら、このクローバーはミツバチの血液を改善するのではなく、ミツバチを短期間だけ「駆り立てる」ものだからです。人間をアルコールで治療しようとするようなもので、アメリカ

クローバーの場合も同様です。ミツバチは駆り立てられ、一時期だけ成果を上げるようになります。

しかし、ここで極めて入念に考慮しなければならないのは、ミツバチに対して「完全に異質なものを」を持ち込んではいならない、ということです。なぜならミツバチは、その性質のすべてにおいて特定の地域に結びついており、つまり特定の地域（の風土）に順応しているからです。このことは、他の地域のミツバチが全く異なる姿をしていることから明らかです。ここでも話題に上った、中央ヨーロッパのミツバチである「在来のセイヨウミツバチ（Gemeine Hausbiene）」がいます。一方でイタリアン種（イタリアミツバチ）は全く違う姿をしていますし、カルニオラン種（Krämer Biene / Carnica）もまた全く異なります。

ミツバチは地域（の風土）に非常に強く順応しているため、完全に異なる地域から持ち込まれた花の蜜を与えても、長期的な救いには決してなりません。そんなことをされると、ミツバチは自分自身の体を使って多大な処理をしなければならなくなり、体内が騒ぎ始めます。なぜなら彼らは、その蜜を、クローバーの故郷の環境に合うように変化させようとするからです。最初の数年間は成功したように見えるでしょうが、その後、厄介な問題が持ち上がってくることが明らかになるはずです。

あなたが言われる通り、まだまともなデータはありません。しかし、いずれそれは明らかになり、人々はそれをやめるか、あるいは「ブドウ栽培」のときと同じような道をたどることになるでしょう。

ワインに関して、人々は次のような経験をしました。ご存知のように、1870年代から80年代にかけて、突如として「ブドウネアブラムシ（フィロキセラ）」が発生し、ヨーロッパの広大な地域でブドウの木を全滅させました。当時、私はこの問題に深く関わることができました。というのも、私には農業を営み、農業新聞を発行し、この問題に熱心に取り組んでいた親しい友人がいたからです。当時、人々は「なぜアメリカ産のブドウの木にはまだネアブラムシがつかず、被害を受けないのか」を考えました。

しかし、結果はどうなったのでしょうか？アメリカ産のブドウの木でネアブラムシを退治できる方法を使っても、ヨーロッパ産のブドウの木では退治できなかったのです。その結果、アメリカ産のブドウの木を植え始めて、それを健康に保つことには成功したものの、ヨーロッパ産のブドウの木はそれでもなお全滅してしまいました。結局、ヨーロッパ本来のブドウ栽培を完全に諦め、ワイン造り全体を「アメリカ化」せざるを得なくなったのです。そうすると、ブドウ栽培のあり方そのものがすっかり変わり、まったく別物になってしまいます。そして実際に、非常に多くの地域で、それは多くの点で別物になってしまったのです。

私たちはこれほど機械的に考えてはならず、ある存在がその性質のすべてにおいて、特定の「土地」に順応しているのだということを明確に理解しなければなりません。このことが考慮されねばならないのです。さもないと、一時的な成功を収めることはできても、永続的なものを築くことはできません。

ほかに何か質問したいことはありますか？ それとも、ここにいらっしゃる他の皆さんは、ただハチミツを食べるのが好きで、それについてそれほど恐ろしく熱心に議論したいわけではないのでしょうか？ もしかしら、どなたか他に何か思い浮かぶことがあるかもしれませんね！

さて、私はここで、ミツバチによるハチミツ作りの本来の本質について、いわばいくつかの要点を素描しながら、もう一度立ち戻ってみたいと思います。

というのも、花の蜜、あるいは植物や草花全般から吸い上げたものを、これほどまでに並外れて健康に良い「ハチミツ」へと変化させることができる小さな生き物が存在するというのは、根本的に極めて驚くべきことだからです。もし人々が、ハチミツを摂取することがいかに途方もなく重要であるかを本当に完全に理解したなら、ハチミツは現代よりもはるかに大きな役割を人間の栄養において果たすことができるような

るでしょう。

たとえば、もし私たちが、いわば「社会的医学」の全体に対してより強い影響を与えることができる立場にあるならば、人間がまさに「婚約期間中」、つまり予防的な段階からハチミツを食べることは、極めて好ましいことだと私は考えます。なぜなら、そうすれば（生まれてくる子供が）くる病にならずに済むからです。というのも、ハチミツには、それがさらに人間によって消化・加工される際、生殖能力に働きかけ、子供たちにしっかりとした五体の形を与える力が秘められているからです。両親、とりわけ母親がハチミツを摂取することは、子供の骨格形成へと作用していくのです。

こうした事柄は、私たちがいつの日か、これらの物事のより深い相互のつながりを解き明かしたときに明らかになるでしょう。今日、科学雑誌に載っているようなあらゆる「くだらないおしゃべり」の代わりに、いつかこれらのことについて知識が得られたときには、次のように書かれるようになるはずです。「人生のこのような時期には、何を食べるのが良いか？ また別の時期には、何を食べるのが良いか？」といった具合に。

これは人間に途方もない利益をもたらすでしょう。なぜなら、これによって人間の健康状態は本質的に向上し、何よりも人間の「活力（健康な力）」が増大するからです。

ただ、ここで一つ言えるのは、人々はこうした事柄を恐ろしいほど過小評価しているということです。くる病の子供を持たない親は、確かにそのことに深く満足してはいますが、それについて深く考え直すことはせず、当たり前のこととして受け止めてしまいます。不満を漏らすのは、ただ、くる病の子供を持ってしまった人だけです。そのため、私が申し上げたいのは次のようなことです。まさに最も有益な「医学的・社会的な措置」というものは、それが人々の言うところの『当たり前の正常な状態』をもたらすものであるがゆえに、実は長いあいだ目の目を見ずに待たされることになるのだ、と。

しかし、この方向（ハチミツの摂取）において途方もなく好ましい影響をもたらすことができると理解することは可能です。もし、「精神科学（人智学）を実践することによってこうした事柄に行き着くのだ」という見解が世の中に形成されるなら、人々は真の意味で精神（霊）へと目を向けるようになると私は信じています。「祈りなさい、そうすればあれこれの結果が得られます」とただ勧められるだけの、現在多くの人が行っている方法よりも、はるかに多くの人がそうするようになるでしょう。——これは精神（霊）から出発して認識されることなのです。

まさに精神から認識することができ、かつ現代の科学が知らない事柄とは、人生のどの時期に——つまり、たとえば「婚約期間中」に——ハチミツが特別な有用性を持つのか、といったことを知ることができるという、まさにこのような事柄なのです。

ミツバチが、生命にとってこれほどまでに並外れて有用なハチミツを、自然界全体からいわば吸い上げ、自身の体内で変化させるというのは、まったくもって驚くべきことだと私は申し上げたいのです。

さて、ミツバチの隣人であり親戚でもある「スズメバチ（あるいは狩蜂全般）」において、これと全く同じプロセスが「完全に形を変えて」行われているのをお見せすれば、ハチミツの生成というものがいったい何に基づいているのかが、本当によく理解していただけたと思います。スズメバチが作るものによっても、医学においては非常に多くのことを成し遂げられますが、スズメバチからは、ミツバチのハチミツと同じように人間にとって実り豊かなハチミツを得ることはできません。スズメバチの働きは、ミツバチの働きとはすでにまったく異なるものなのです。

後ほど、次回には「アリ」についてもお話するつもりですが、まずはある種のスズメバチ（タマバチ）について見てみましょう。

スズメバチの中には、植物や樹木、たとえば葉や樹皮の中に卵を産み付けるという習性を持つものがいます。樹木の花の中に産み付けるものさえいます。

（ここで黒板に図を描く。）



ここに木の枝があり、たとえばここにクヌギ（オーク）の葉があるとしましょう。スズメバチは、内部が空洞になっている産卵管を使って、クヌギの葉の中に卵を産み付けます。——すると、何が起ころうでしょうか？

スズメバチの卵が産み付けられた場所では、卵をぐるりと取り囲んでいる葉の組織全体が変化してしまいます。もし卵が産み付けられなかったら、その葉はまったく別の形に成長していたはずで

では、スズメバチの卵が産み付けられたことによって何が生じるのかを見てみましょう。ここでは植物の成長が完全に変化し、スズメバチの卵のまわりで、葉から突き出るようにして、いわゆる「五倍子（虫こぶ：Gallapfel）」が形成されます。皆さんが木で見かける、あの茶色っぽい見た目の虫こぶのことです。

これらはどのようにして生じたのでしょうか？ その場所にスズメバチが卵を産み付けたことによって生じたのであり、スズメバチの卵のまわりには、今や変質した植物物質が存在しています。それが卵を完全に包み込んでいるのです。このスズメバチの卵は、もし他の場所に置かれたなら死んでしまうでしょう。この卵が育つことができるのは、タマバチ（Gallwespe）が植物の物質からいわば「盗み取った」、この保護的な物質が卵のまわりをはじめに包み込んでいるからにほかなりません。ハチは植物からその物質を奪い取ったのです。

お分かりのように、ミツバチは卵を（自分たちが作った）巣板の中に産み落とし、それが幼虫などを経て成長して蜂になり、その後で植物の物質を「盗み取って」自らの体内で加工します。

これに対してスズメバチ（タマバチ）は、この一連のプロセスを「もう少し早い段階」で行います。スズメバチは、卵を産み付けるまさにその時点で、すでに自分が必要とする物質を植物から奪い取っているのです。つまり、ミツバチはこうした活動を行うのにある程度時間を置いて待つのに対し、スズメバチはより早い段階でそれを行ってしまいます。

高等動物や人間の場合では、卵はすでに母親の胎内で保護的な膜に囲まれています。スズメバチがここで

植物から受け取っているものを、高等動物や人間は母親から受け取っているのです。この「虫こぶ（Gallapfel）」は、まさに植物から形成されたものであり、それは人間の母親の胎内で卵子の胚（Eikeim）のまわりに形成され、後に後産（胎盤など）とともに排出される「絨毛膜（Chorion）」のようなものなのです。

スズメバチがいかに植物と一体となって機能しているかがお分かりいただけるでしょう。スズメバチが特に多い地域に行くと、樹木がいたるところでこうした虫こぶにすっかり覆われているのを目にすることがあります。スズメバチは樹木とともに生きています。ハチは樹木に依存しているのです。その卵は、対象となる樹木や植物全般からこの保護的な膜を形成させてもらわなければ、決して育つことはできません。

この虫こぶの形は、他にもさまざまな姿をしています。リンゴのようには見えず、毛が生えていて、お互いに織り合わされたように成長するものもあります（黒板の図を参照）。しかし、どのような場合でも、その中心には対象となるスズメバチの胚（芽）が入っています。時には、むくむくとした小さな木の実のような形をした虫こぶを見つけることもあるでしょう。

図2



これらは、スズメバチが植物といかに共生しているかを示す事象です。そして、スズメバチ（の幼虫）が十分に成熟すると、大顎（Freßzangen）を使って（虫こぶに）穴を開け、スズメバチとして外へ這い出てきます。そして、しばらく外の世界で暮らした後に、再びどこかの葉などに卵を産み付けるのです。このように、卵の産み付けという行為は、常に植物との共生を通じて行われています。

ここで皆さんは、「それがハチミツ作りと一体何の関係があるのだ？」と言われるかもしれません。

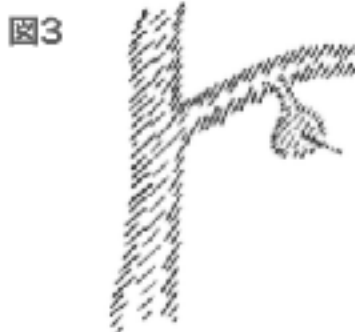
皆さん、実はこれがハチミツの生成と「非常に深い関係」にあり、この事象に着目することによって、私たちはハチミツがどのようにして出来上がるのかを学ぶことができるのです。そしてここでもまた、かつての、いわば「民衆の（伝統的な）科学」の中には、こうした事柄を考慮に入れた本能（直感）が存在していました。

皆さんもおそらくご存知の通り、より温暖な南部地域、とりわけギリシャでは、イチジクの栽培が大きな役割を果たしています。そこにはいわゆる「野生のイチジク」があるのですが、これは一応甘みはあるものの、世の中にはさらに舌の肥えた人々がいて、野生のイチジクが持つ甘さよりも、もっと甘くて美味しいイチジクを食べたいと考えます。

そこで、この現地の人々はいったい何をするのでしょうか？

さて、ここに野生のイチジクの木があると想像してみてください。この野生のイチジクの木は、ある特定の種類のスズメバチ（イチジクコバチ）から極めて強く好まれており、ハチはそこに卵を産み付けます。

（ここで黒板に図を描く）



想像してみましょう。ここに野生のイチジクの木があり、その枝に野生のイチジクの実がなっています。そこへスズメバチが卵を産み付けるのです。

さて、イチジクの栽培農家というものは、独自のやり方を持った実になかなか賢い（悪賢い）男たちです。彼らは、そのために特別に育てている野生のイチジクの木の中で、スズメバチたちに卵を産み付けさせます。

その後、彼らは（野生のイチジクから）そうした実を2つほど摘み取ります。そのタイミングというのは、実の中にいるハチの幼虫（Larven）の成長がまだ完了しておらず、ハチとして孵化して出てくるにはまだまだ遠いものの、ある程度の発育期間はすでに経過した、という時点です。

さて、彼は次に何をやるのでしょうか？ 彼は「イグサ（灯心草）」の茎を一本持ってきて、ハチの幼虫をまだ完全には成熟させていないこれら2つのイチジクの実を、イグサの茎で結び合わせて固定します。

そして、自分が実を「品種改良（Veredeln）」したいと考えている（栽培用の）イチジクの木へと向かい、イグサの茎で結び合わせた、スズメバチが巣を作り卵を産み付けたその2つのイチジクの実を、その品種改良したいイチジクの木に吊り下げます。

さあ、いったい何が起こるのでしょうか？



そこでは次のようなことが起こります。摘み取られ、もはやイチジクの木にくっついていないこれらの実は、今や乾燥し始めます。干からびていき、木からの液汁を得られなくなるのです。

まだ十分に成長していないスズメバチ（コバチ）は、体内で（直感的に）すでにそのことを察知します。卵でさえもそれを察知するのです。その結果、ハチは外へ這い出てくるのを「恐ろしいほどの勢いで急ぐ」ことになります。

そのため、栽培農家が春にこの手順を始めると（まずハチに卵を産み付けさせ、5月頃になるとすぐさまこの2つの実を摘み取って先ほどの手順を行うと）、中にいる生き物はこう思うわけです。「おっと、これは急がなきゃならないぞ！ もうイチジクが乾いてしまう時期が来てしまったんだ！」と。

生き物は猛烈に急ぎ、通常よりもはるかに早く孵化します。もし実が木にぶら下がったままだったら、夏の終わりに孵化していたはずのものです。しかし、この方法のせいで、初夏に孵化せざるを得なくなります。

その結果、この生き物は初夏に孵化してしまったがために、「2回目の産卵（第二世代の繁殖）」を行わなければなりません。通常であれば次の春まで産まないはずの卵を、その年の夏のうちに産むことになるのです。

この卵を抱えたスズメバチは、今度は「品種改良をしたい木」になっているイチジクの実へと向かいます。そしてその実の中に、卵（本来の時期より遅れて産まれる遅い卵）を産み付けるのです。これらの卵は成熟までは至らず、ある一定の段階までしか成長しません。

では、これによって何が起こるのでしょうか？この「2回目の産卵」が行われたイチジクの実は、なんと、他の野生のイチジクに比べて「2倍も甘く」なるのです！

これこそが、実を2倍甘くする「イチジクの品種改良（カプリフィケーション）」と呼ばれる手法です。

ここで一体何が起きたのでしょうか？そこでは、ミツバチの親戚でありながら別の生き物であるスズメバチ（イチジクコバチ）が、すでに卵の段階で、植物の中から「ハチミツになり得るもの（糖分・生命力）」を取り出していたのです。

そして、あのイチジク栽培農家のように巧みなやり方で（ハチの卵が入った2つの野生のイチジクをイグサの茎で結び合わせ、品種改良したい木の上に吊るしてそこに掛けおくことで）、ハチたちが別の植物から受け取ったものを、もう一度その植物の中へと「織り込ませる」ように巧みに仕向けるならば、農家はハチたちに対して、自分がハチを吊るしたその植物（品種改良されたイチジク）の中に、ハチミツを「甘み」として注ぎ込ませていることになるのです。

これらの品種改良されたイチジクの中に甘みが入ってくるのは、まさにスズメバチによって、極めて微細に分散された形で「ハチミツ」がそこに注ぎ込まれたからにはかなりません。これは自然の「回り道（間接的なプロセス）」を通じて行われたことなのです。

したがって、お分かりのように、ここでは自然から何一つ（物質を）取り出しておらず、その「ハチミツとしての性質」を自然の中にそのまま留めておいたのです。スズメバチは、自らの身体の組織がそれに適していないため、ミツバチのようにハチミツを（単体で）精製することはできません。

しかし、人間がハチにこのような回り道を強制するならば、ハチはその産卵の過程で、一つのイチジクの

実から別のイチジクの実へと、その花の蜜が持つ甘みを「移し替える」ことができます。そうしてハチは、2番目のイチジク（品種改良された実）を甘くするのです。そこに含まれているのは、ある種の「ハチミツ物質」なのです。

つまり、私たちはここで非常に特別な事実に行き着きます。これらのスズメバチについて明らかになるのは、彼らは「自然界から蜜汁を奪い取り、自らの体内でそれをハチミツへと変化させる」という段階にまでは至らない身体を持っている、ということです。しかし、彼らは自然界そのものの中で、一つのイチジクから別のイチジクへと、ある種の「ハチミツ形成」が行われるのを促進することはできるのです。

したがって、ミツバチというものは、スズメバチに似た身体を「さらに高度に発達させた」生き物だと言えます。スズメバチの場合は樹木そのものの中に留めておかなければならなかったプロセスを、ミツバチは樹木から切り離して行うことができるのです。

私たちは次のように言わねばなりません。ミツバチは、スズメバチが「ごく若い頃（卵や幼虫の時期）」にしか持っていない力を、より多く自らの体内に保持し続けている生き物である、と。スズメバチは成長するとハチミツを生み出す力を失ってしまいますが、ミツバチはその力を保持し続け、成虫になってもそれを発揮することができるのです。

そうです、皆さん、自然界全体をこのように見渡し、次のように自問できるということが何を意味するか、考えてみてください。「植物の中にはハチミツが眠っている。糖分の甘みへと向かうこの物質が、植物の中に眠っているのだ」と。それは確かにそこに存在しています。そして、私たちがただ正しい方法を選び、品種改良したい樹木に対して正しい時期にスズメバチがやって来るように自然を手助けしてあげるだけで、その甘みは目に見える形で現れてくるのです。

ここ（中央ヨーロッパ）の地域では、このようなこと（イチジクの品種改良）を行うことはできませんし、そもそも現代という時代においては、もはや実践すること自体がまったく不可能です。

しかし、地球の進化の歴史において、かつて次のようなことが可能だった時代がありました。今日、そして2千年前の時点ですえ、あの賢い人間がしたように「ハチに2回目の産卵を強制する」という目的のために利用されていたスズメバチ（コバチ）がいました。かつては、これらのスズメバチを孵化させ、同じように摘み取られたイチジクの中に卵を産み付けさせることによって、「スズメバチからミツバチを徐々に交配・育成していくこと」に成功した時代があったのです。

実は、ミツバチという生き物は、極めて古い時代に「スズメバチから進化して生まれた動物」なのです。そして今日でも、先ほど述べたように、動物の活動（つまりスズメバチの活動）を通じて、この「ハチミツの生成」が自然界そのものの中でどのように行われているかを見ることができるのです。

そしてこのことから、ミツバチが特定のやり方で自らのハチミツを「巣板」の中に蓄えることの意味も見えてきます。巣板というものは、本質的に「蜜蝋の物質」からできています。ええ、この蜜蝋物質は、ただ一般的にハチミツを貯蔵するためだけに峻別され、必要なわけではありません。ミツバチは、自らの身体全体が正しい方法で働いているときにしかハチミツを作ることができないのです。つまり、ミツバチは（ハチミツ作りのプロセスの一環として）同時に蜜蝋を分泌しなければならないのです。

さて、（ハチの作用によって）自然に甘みが生じる方の「品種改良されたイチジクの木」は、野生のイチジクの木よりも「蜜分が豊富」です。まさに、品種改良されたイチジクの木が野生の木と異なるのは、この「蜜分がより豊かである」という点にあります。ここでは、自然そのものが蜜蝋の付加を行っているのです。

したがって、品種改良された甘いイチジクというものは、自らの内側からある種の方法で自然と蠟分を豊富にするような樹木の上で実を結びます。ここには、後に「養蜂（ミツバチの世界）」において現れてくる事象が、すでに（植物の段階で）先取りして形作られている（予兆されている）のを見出すことができるのです。

しかし、ここで本当に細かく観察（研究）してみるならば、品種改良されたイチジクの幹を取り出してそれを切断したとき、中をよく探してみると、奇妙なことに「蜜蠟の巣房」のような模様（黒板の図を参照）が現れるのを目にすることができます。



この、幹の内部に沈着した蠟分から、そのような構造、すなわち一種の「ミツバチの巣房（細胞）」のようなものが形成されるのです。品種改良されたイチジクは蜜蠟がより豊富になり、その幹の内部では、蜜蠟がある種の「細胞（房）の形」へと自らを秩序づけて並びます。

ですから、次のように言うことができるでしょう。「このイチジクの品種改良（カプリフィケーション）というものを見るならば、そこには『自然界から外へと這い出てこない、内なる養蜂』が存在しているのだ」と。ただ、そのハチミツがイチジクの実の内部に留まっているというだけのことなのです。

ミツバチは、いわばこの「品種改良されたイチジクにおいて、自然の内側に留まっていたもの」を、表の世界（公の場）へと引きずり出してくる生き物なのです。ミツバチはそれを外へと引き出します。

それによって、本来なら幹の内部に留まり、そこである種の「自然の巣房」——それほど明瞭でもなく、塊でもなく、ただ兆候として現れてはすぐに消えてしまうようなもの——を形成していたはずの蜜蠟が、上へと押し上げられてイチジクの実の中に入り込みます。そうして、蜜蠟とハチミツの形成プロセスの全体が、イチジクの内部に収まることになるのです。

ここに内包されている養蜂（ミツバチの営み）のすべては、樹木そのものの内部に存在しています。ですから、「自然界の全体こそが、一人の養蜂家（なのだ）」とすることができるのです。

ミツバチはまず何をしたのでしょうか？ミツバチは最初に卵を産み、その卵を巣箱の中に置きました。そして卵が成熟したのです。今のミツバチは、（スズメバチのように植物の）物質をわざわざ「虫こぶ（五倍子）」へと変化させる必要はなく、植物から直接、蜜汁を吸い上げて取り出します。

またミツバチは、蜜蠟分がより豊富になるような「別の本」へとわざわざ向かうこともありません。そうではなく、本来なら樹木の幹の内部で形成されるはずの構造、すなわち「巣板のネットワーク（つなが

り)」を、ある意味で自分自身の力で作り出し、そこに液汁を蓄えるのです。

この液汁こそが、現在「ハチミツ」としてそこに存在しているものです。これに対して品種改良されたイチジクの場合は、液汁の状態でイチジクの実の全体を満たしています。

ですから、次のように言うことができます。本来なら自然界において樹木という領域の内部に留まり、樹木とスズメバチ自身の間だけで解決されていたはずのプロセスが、ミツバチによって「表の世界」で行われているのだ、と。

このことを通して、あの極めて精巧に組み立てられた「蜜蝋の巣板（六角形のセル）」を持つ巣箱を前にしたとき、自分が一体何を目に見ているのかが、本当に完全にクリアに理解できるようになります。それは実に見事な光景です。——そうでしょう、ミュラーさん？——これら蜜蝋の巣板が芸術的に組み合わせられている様子は、本当に素晴らしい光景に違いありません。そして、その中にハチミツが入っているのです！

皆さん、これ（巣板）をよく観察してみてください。そうすれば、自分自身にこう言い聞かせることになるでしょう。「おっと驚いた、ミツバチというやつは、あの見事な蜜蝋の巣板の中に、人工的に組み立てられた一種の『樹木の幹とその枝分かれ』を表現しているのだ！」と。

ミツバチは卵を産み付けるために樹木そのものの内部に入ることはしませんが、外の世界に、いわば「樹木の模像」を自ら構築するのです。そして、そこにイチジクの実を成長させる代わりに、すでに完成している巣板の中にハチミツを直接注ぎ込みます。つまり私たちは、ミツバチを通じて、ある種の「人工的に品種改良されたイチジクの木の写真」を作り出していることになるのです。

これは、自然そのものからいかに学ぶことができるかを示してくれる、文字通り「自然の内奥への眼差し」です。しかし、私たちは自然から学ぶことができなければなりません。人類はこれからも自然から多くのことを学ぶでしょう。ただし、まずは自然の中にある「精神（霊：Geist）」を見出さねばなりません。そうして初めて、こうした事柄を学ぶことができるのです。

さもないと、南部へ旅行に出かけた際、あの抜け目のない現地の男が、ハチの刺し傷がついたイチジクをイグサの茎で結び合わせ、それを野生のイチジクの木の上へと放り投げているのを見ても、ただ「ぼかんと口を開けて」眺めるだけで終わってしまいます。旅行者たちが（それがたとえ科学者であっても）男がなぜそんなことをしているのか分からずにぼかんとしている一方で、男はそれによってミツバチの労働を節約しているのです。なぜなら、自然がすでにイチジクの内部にハチミツを注入してくれているからです。そして、イチジクが育つその地域において、イチジクがハチミツと同じように健康に良いのは、その内部にすでに「初期段階のハチミツ」が存在しているからなのです。

これらは、養蜂（ミツバチの世界）という、これほどまでに重要で根本的なテーマについて議論しようとする際、私たちが一度はしっかりと心に思い描いておくべき事柄です。これによって、私たちは徐々に、ある意味でより正しい（本質的な）見解へと到達することができるのだと私は信じています。

質疑応答

R. ハーン氏：

講義の後、私はシュタイナー博士のもとへ行き、「ミツバチの腐蝕病（ふそびょう／Faulbrut）」の原因は何であるかを質問しました。

博士は、その病気を実際に調査してみるまでは確実なことは言えないとした上で、次のように述べられました。「おそらくミツバチの腐蝕病の原因は、女王蜂の尿酸（Harnsäure）の組成の異常にあると考えられます。」

さらに博士はこう付け加えられました。「当然ながら、ミツバチもその有機体の中に尿酸を持っています。この尿酸の組成が正常でなくなることが、この病気を引き起こす原因になっているに違いありません。」

また、同じ講義の中で言及された「スズメバチからミツバチへの交配・育成」について関連する質問をしたところ、博士はおおよそ次のように語られました。「このプロセス（スズメバチからミツバチへの進化）は、古代のアトランティス時代に起きたことです。当時の地球では、個々の動物の形態は今日ほど固定されておらず、それぞれの種のあいだに、今ほど強固な境界線はありませんでした。現代においては、このような交配・育成を行うことはもはや不可能です。」

第七講義

「労働者講義」より

〔GA351（第13講）〕ドルナハ、1923年12月12日

●基本的な視点

ミツバチは太陽・宇宙的要素と地球的要素の間の架け橋であり、その営み（成長、受精、毒、巣作り）は自然界の階層的關係（花→昆虫→人間）を鮮やかに示している。

●要点

1) ミツバチの3種類と成長時間・宇宙的影響

成長速度の違いは給餌方法によって決まり、太陽の影響の強弱がその後の役割を形作る。

- ・女王蜂：
16日で誕生。太陽の一回転以内に成長し、完全に「太陽の動物」。産卵能力は宇宙（太陽）的影響による。
- ・働き蜂：
21日。太陽の影響を強く受けつつ、少し地球的影響が入る。
- ・雄蜂：
22～24日。太陽から最も離れ、完全に「地球の動物」となる。

2) 婚姻飛行（受精）と卵の性質

- ・女王蜂は晴れた日に高く飛び、雄蜂と空中で交尾する。
これは「太陽への逃避飛行」である。
- ・受精卵 → 女王蜂・働き蜂。
(天上の・宇宙的要素が地球的要素と結びつく)
- ・無精卵 → 雄蜂。
- ・女王蜂が未受精の場合、すべて雄蜂になる。

3) 3. 蜂毒（ミツバチ毒）と人間の治療

- ・蜂毒は人間の自我組織に強く作用し、血液循環を活発化させる。
- ・心臓はポンプではなく、自我組織が動かす血液によって鼓動する。
(従来医学の見解を批判)
- ・リウマチ・痛風：
自我組織が弱く、血液の流れが悪いために尿酸などの結晶が沈着する病態。
適量の蜂毒は自我組織を強化し、治療効果がある。
※注意点：心臓（特に弁膜症）が弱っている場合は危険。
過剰投与で気絶・死亡のリスクあり。
- ・蜂毒は「毒をもって毒を制す」原理の典型。

患者の全体的な健康状態を十分に診て使用すべき。

4) . 養蜂の実践的ポイント

- ・本物のハチミツを作るには砂糖給餌を避けるべきである。
- ・老齢・衰弱した女王蜂は雄蜂ばかり産むようになる。
- ・特殊給餌で働き蜂を「偽女王」に変えることは理論上可能だが、巣箱全体が病んだ状態になる。

5) 近縁昆虫（スズメバチ・アリ）との比較

- ・ミツバチ：
花の蜜を純粹に使い、蜜蝋の巣房を作る（最も「花に近い」）。
- ・スズメバチ：
紙のような硬い素材で巣を作り、
花の蜜＋動物性液（アブラムシの甘露）を利用。
- ・アリ：
最も硬い素材（枯れ木・土）を使い、
巣房は作らず、アブラムシを「家畜」として飼い、
甘露を主食とする（自然界の「酪農」）。

●本文

「ミツバチと花の間にはどのような親密な関係（縁）があるのか、何がこの両者をこれほど結びつけているのか、そしてハチミツは人間にとってどうあるべきで、何であるのか」という質問が寄せられています。その後、再び卵の産み付け（産卵）の話題へと戻ります。

シュタイナー博士：

さて、皆さん、今日の講義ではこのことについてもう一度お話ししましょう。

事の真相はこういうことです。まず、私たちは女王蜂が「婚姻飛行」の際に受精するという事実を知っています。つまり、女王蜂は最初にそこで受精するわけです。

次に私たちが考慮しなければならないのは、卵が産み付けられてから、昆虫として完全に形が整い、ミツバチとして誕生するまでに経過する時間です。この期間は、女王蜂では16日間、働き蜂では21日間、雄蜂（オスバチ）では22日から24日間となります。したがって、これら3つの種類のミツバチは、まず「誕生する（一人前になる）までの時間が異なる」という点において、お互いに違っているのです。

では、その背景には何があるのでしょうか。ミツバチの幼虫が女王蜂になるのは、特にその幼虫が、ミツバチ自身によって特定のやり方で餌を与えられるからです。女王蜂になる幼虫は、ミツバチたちから他の幼虫とは少し異なる方法で給餌されます。これによって、その成長が加速されるのです。

さて、ミツバチは「太陽の動物」ですが、太陽がそれ自身を中心にちょうど一回転（自転）するのに要する時間は、雄蜂が成長するのに必要な時間とほぼ同じです。

したがって、女王蜂は太陽が完全に一回転するまで待たずに成長を終えます。つまり、女王蜂は完全に「太陽の一回転」の範囲内（それより短い時間）にとどまるのです。その結果、女王蜂は太陽の影響を全面的に受ける形で成長することになります。だからこそ、女王蜂は卵を産む能力を持ったミツバチになるわけです。つまり、産卵能力に関わるものはすべて、太陽、ひいては宇宙の影響下にあります。

これに対して、餌の与えられ方によって成長スピードが少し遅くなり、働き蜂のように太陽がほぼ一回転する近くまで時間がかかると、そのミツバチは「地球の進化」の影響へと近づいていきます。太陽がさらに回り進むほど、ミツバチはそれだけ地球の進化の影響を受けるようになるのです。

この段階の働き蜂は、まだ非常に強い太陽の動物ですが、同時に少しだけ地球の動物にもなっています。そして、太陽が丸一回転するのとほぼ同じ時間をかけて成長する雄蜂は、完全に「地球の動物」となります。つまり、雄蜂は太陽（の影響）から自らを切り離しているのです。

こうして、私たちには3つのもの（存在）が揃うことになります。「太陽の女王蜂」、宇宙（地球外）の力をまだ内に宿している「働き蜂」、そして太陽の力をもう持たず、完全に地球の動物となっている「雄蜂」です。それ以外のすべてのできごとは地球の力の支配下では起こりませんが、受精そのものだけは別です。

ここで、非常に奇妙なことがあります。この「受精の飛行（婚姻飛行）」を一度観察してみてください。実は、下等な動物たちは受精を全く好まず、それから逃れようとします。このことは、あらゆる場所で証明できます。ですから、女王蜂が行うのは本来、太陽への「逃避（飛行）」なのです。なぜなら、天気が曇っているときには受精は行われないからです。そして、地上（地球的）のものを太陽的なものの中へと持ち込もうとする雄蜂たちは、空中で戦わなければなりません。弱っているものは途中で脱落します。最後の力を振り絞り、女王蜂と同じ高さまで高く飛べるものだけが、受精を果たすことができるのです。

しかし皆さん、女王蜂が受精したからといって、すべての卵が受精するわけではありません。女王蜂の体内にある卵の一部だけが受精し、それらが働き蜂や女王蜂になります。女王蜂の体内で受精しなかった一部の卵は、雄蜂になります。ですから、もし女王蜂が全く受精しなければ、生まれてくるのは雄蜂ばかりになります。女王蜂が受精すると、[無精卵からは]雄蜂が生まれ、[受精卵からは]働き蜂や女王蜂が生まれます。胚が受精することによって、その中にある「天上のもの（宇宙的なもの）」が「地上のもの（地球的なもの）」と接触するからです。

したがって、働き蜂の隣に雄蜂がいるときでも、雄蜂は受精が行われなかったがゆえに、地上のものに最も強くさらされていることになります。雄蜂は、そもそも生存能力を維持するためだけでも、なおさら地上のものにさらされなければならないのです。そのため、より長く給餌されなければならない、といったことが起こります。これでご納得いただけましたでしょうか。

質問者：何年も前に聞いたことがあるのですが、蜂やスズメバチに刺されたとき、もしその人にリウマチがあれば、リウマチが治るというのは本当でしょうか。

シュタイナー博士：そのお話を聞いて、先週の月曜日に十分お答えできていなかったかもしれない質問を思い出しました。ミュラーさんが「心臓病を患っていたと思われる男性が、ミツバチに刺されて倒れてしまった」という話をされていましたね。

ミュラーさん：医師はその男性に、これ以上（刺されたら）命に関わるからと、養蜂をやめるように勧めたのです！

シュタイナー博士：その心臓病という状態は、この人物において「自我組織」が正常に作用していないということ以外の何物でもありません。ここで、皆さんが私の講義からすでに学ばれていることが関わってきます。

皆さんもご存知の通り、私たちは人間を4つの部分に分けて考えてきました。第1に、手で触れることのできる通常の「肉体」。第2に「エーテル体」。第3に「アストラル体」。そして第4に「自我組織」です。

この自我組織は血液へと作用し、実のところ血液を動かしているのはこの自我組織なのです。そして、血液がどう動かされるかによって、心臓が鼓動するわけです。

(医学の)教科書などを見ると、どこにでも全く間違った説明が書かれています。そこでは、まるで心臓がポンプのようなものであり、そこから血液が体中の至る所へと送り出されているかのように説明されています。しかし、それはおかしい話です。なぜなら実際には、血液はポンプで送られているのではなく、自我組織そのものによって動かされており、その結果として全身をめぐっているからです。

もし誰かが「血液を動かしているのは心臓だ」と主張するなら、その人はどこかに水車を設置したときに「水車が水を動かしている」とも主張しなければならなくなります。水が水車を動かしていることは、誰でも知っています。まったく同じように、人間にもそのような受け止める場所があります。そこに血液がぶつかることで、心臓が動かされるのです。ただ、血液が一度ぶつかり、酸素が炭素と結合すると、今度は血液が跳ね返ります。これによって、一度前に進み、一度後ろに戻るという動きが生まれます。こうして心臓の鼓動が生じるのです。つまり、血液循環には、人間の「自我組織」が直接的に作用しているのです。

ところで、この自我組織の力は、実はミツバチの毒の中に、神秘的な方法で含まれています。皆さん、皆さんの血液の中をめぐっている力として存在しているものは、ミツバチの毒の中にも含まれているのです。そして興味深いことに、ミツバチは自分自身の内部でこの蜂毒を必要としています。ミツバチは、単に「刺すため」だけに蜂毒を持っているわけではありません。刺すことができるというのは、あくまで偶然付け加わった機能にすぎません。ミツバチが自らの内に蜂毒を必要とするのは、人間が血液の中に持っているのと同じ「循環させる力」を、ミツバチ自身も必要としているからなのです。

以前、私は「巣箱全体が一人の人間のようなものである」とお話ししました。ここで、あなたがミツバチの毒を身体の中、つまり血液の中に取り入れたと想像してみてください。体内に入るあらゆる毒と同じように、蜂毒もすぐに血液へと移行します。あなたが健康な人間であるなら、これによって血液の動きがより活発になります。その結果として炎症が起きたりしますが、心臓はそれに耐えることができます。しかし、もしその人が心臓病を患っており、毒によって自我組織の力が急激に強められると、その影響が少し病んでいる心臓の弁へと突き当たります。その結果、その人は意識を失ったり、最悪の場合は死に至ったりすることもあります。これが、ミュラーさんが話してくれた事例の真相です。

しかし、ここに非常に奇妙な性質があります。人間を病気にさせたり、死に至らしめたりする可能性のあるものはすべて、人間を治療することもできるのです。これこそが、治療薬を製造する際の大きな責任というものです。なぜなら、使い方を誤ったときに「それで治療できるはずの病気」そのものを引き起こしてしまわないような本物の治療薬など、この世には存在しないからです。

では、ミツバチの毒によって人間に一種の気絶や死をもたらすことができるとき、そこでは一体何が起きているのでしょうか。人間が気絶するとき、その物理的な肉体からアストラル体、そして特に「自我」が引きこもってしまいます。睡眠のときと同じように抜け出てしまうのです。ただ、睡眠のときは健康な方法で抜け出しますが、気絶のときは病的な方法で抜け出します。気絶しているとき、自我は途中で動けなくなってし

まいますが、睡眠のときは完全に外へと出ます。もしその人の自我組織が弱いと、自我を再び内側へと戻すことができなくなります。そのため、気絶から目覚めさせるために身体を揺さぶったり、呼吸を強くさせたりといったことをしなければなりません。そこでは何らかの人工的な処置を用いる必要があります。

皆さんもご存知の通り、そのような場合には、その人の前腕を掴み、胸の上で交差させ、後ろへ広げてから、再び前へと戻します。このようにして、気絶した人に人工呼吸を行うわけです。この人工呼吸というものは、まさに「自我組織」をもう一度正しく身体の中へと連れ戻すために行われるものなのです。

しかし、次のように考えてみてください。ある人がリウマチや痛風、あるいはその他の老廃物の溜まりを体内に抱えているとします。そのような場合、私たちは「自我組織」を強化するよう試みなければなりません。なぜなら、人智学的な視点では、リウマチや痛風になるのは自我組織が弱すぎるからだと捉えるからです。自我組織が弱いために、血液を正しい動きへと導くことができないと考えます。ですから、自我組織を刺激して奮い立たせる必要がある、と説かれます。

もし血液が正しい動きをしていない場合、例えばその人の身体にとって流れるスピードが遅すぎると、至る所に小さな結晶が沈着し、それらが血管の周囲へと侵入していきます。この小さな結晶の正体は尿酸です。これが体中を満たしてしまう状態、それこそが痛風であり、リウマチであると説明されます。そこでは自我組織が弱くなりすぎていると見なされます。

ここで、その人に適量のミツバチやスズメバチの毒を与えると、その自我組織は強化される、と述べられています。ただし、与えすぎてはいけません。さもないと自我組織が持ちこたえられなくなってしまうからです。しかし、自我組織がちょうど強化されるだけの適量を与えるならば、ミツバチの毒やスズメバチの毒を使って、非常に優れた治療薬を作ることができるとされています。ただし、それを他の物質と調合しなければなりません。実際に、昔からあるいわゆる「タルタルス剤（酒石を用いた製剤）」も、物質こそ異なりますが、似たような思想で考えられてきました。

このように、これは毒性のある物質を通じて医薬品を作ることができるという考え方です。ここでの例で言えば、自我組織を強化するための薬です。しかし、このような（当時の）治療法を検討する場合は、その患者のことをよく知っていなければなりません。例えば、ある人が痛風やリウマチを患っているとしましょう。最初の問いはこうです。「彼の心臓は健康か。つまり、彼の心臓は血液循環の影響下で正しく機能しているだろうか」

もし心臓が健康であれば、ミツバチやスズメバチの毒で彼を治療することができる（と当時は考えられました）。しかし、もし心臓が健康でない場合は、そこを見分けなければなりません。神経性の心臓疾患であれば、それほど害にはなりませんが、もし心臓弁の不具合（弁膜症）からくる心臓病である場合は、このような薬の使用には細心の注意を払わなければなりません。ミツバチやスズメバチの毒は、心臓の弁や心臓そのものに対して、非常に強く作用するからです。弁が病んでいる場合、状況によってはこれらの治療薬を一切使用できないこともあります。まさにそこが問題なのです。

そのため、一般論として「ある特定の薬が、この病気やあの病気の治療薬である」と断定することは非常に危険です。ただ、次のように述べることは差し支えありません。「私はある製剤を作っている。その中にスズメバチの毒、あるいはミツバチの毒を入れる。それを植物由来の物質などと調合し、アンプルに入れ、注入するのだ」と。これは、ミツバチに刺されるのと似た形で（体内に成分を）入れることになります。ただ、本物のミツバチに刺されたときの反応の方が、遥かに激しいものになります。このようにして製造されたものを、かつては「リウマチに対する治療薬」と呼んだのです。

薬を処方する上で心配なのは、薬の有効性だけではありません。それよりも「患者の全体的な臓器の健康状態から見て、その治療薬に身体が耐えられるかどうか」ということこそが心配の種なのです。

有機体の奥深くへと作用するような薬は、本来、患者の全体的な健康状態をしっかりと検査した上で初めて投与されるべきものです。健康状態がどうであるかをすべて把握していなければなりません。ですから、巷で「この病気やあの病気に効く」と単に一般向けに宣伝されている薬を見かけるとしたら、それらは大抵「害は少ないけれど、それなりに効果もある」といった類の薬です。そのような薬であれば、市場に流通させることができます。たとえ実際に多少の不快感や副作用があったとしても、容認される範囲です。治療というものには、常に不快な結果がつきまといまいます。病気を治療する際、患者は常に、その後の「アフターケア（後療法）」の段階を乗り越えなければならないのです。

現代では、実際には病気でもないのに治療を受けようとする人が非常にたくさんいます。戦前（第一次世界大戦前）は、これがさらに顕著でした。現在、通貨危機に陥っている国々（当時のインフレ期のドイツなど）の医師たちは最も苦境に立たされています。なぜなら、人々が以前ほど頻繁に治療を受けようとしなくなったからです。かつては、健康な人、軽い病気の人、普通の病人、そして最重症の病人に至るまでが治療を受けていましたが、現在の地中海連邦諸国（中央ヨーロッパ諸国）では、最重症の病人しか治療を受けられなくなっているのです。

さて、もしある人がものすごく頑強な男で、その人がリウマチにかかったとします。——大抵の場合、それは本当のリウマチではなく、痛風のような状態です。——その場合、ブルレさんがおっしゃったように、ミツバチに刺されることが彼にとって並外れて良い効果をもたらすことがあります。彼は（毒に対する）反応に耐えることができるため、治癒する可能性があるのです。

しかし、通常のリウマチを患っている一般的な人間の場合は少し異なります。その人のために（適切に成分を調節して）調合された適量の蜂毒であれば、もちろん治療薬として正しく耐えることができますし、それによって治療することも可能です。しかし、本物のミツバチに丸ごと一刺しされると、通常は非常に激しい炎症が起きてしまいます。そうすると、今度はその炎症を治さなければならず、蜂毒をできるだけ早く体内から取り除かなければならなくなります。その結果、リウマチを治すための蜂毒の成分は、体内にはほとんど残らなくなってしまうのです。普通の人間であれば、このように成分が残らないということが十分に起こり得ます。

ですが、ここで次のようなケースを考えてみましょう。リウマチは以下のような形でも発生することがあります。ある人が、大して働きもせず、ただ非常にたくさん食べるとします。あまり働かず、たくさん食べている間、その人は大抵、事態が悪化し始めるまではかなり健康な心臓を保っているものです。

心臓というものは本来、非常に頑丈な臓器であり、遺伝や若い頃からの不摂生で損なわれていない限り、内側から悪くなるのには何年もかかります。しかし、このように並外れてたくさん食べる人は、食事と一緒にアルコールもたくさん飲む傾向があります。それによって自我組織が刺激され、血液循環が非常に激しくなります。そうすると心臓はその激しい鼓動についていけなくなります。その結果、毒素や尿酸などが至る所に沈着してしまうのです。そのような人の場合、体中が痛風やリウマチに侵されていても、心臓だけはまだ長いこと非常に強い状態を保っていることがあります。このようなケースでは、ミツバチに一刺しされることが、その人にとって例外的に素晴らしい働きをしてくれることがあるのです。

ブルレさん：その話の主である人物に、同時に多少のアルコール中毒（アルコール依存）があったかどうかまでは分かりません。

シュタイナー博士：なるほど、その点までは調べておられないということですね。

お分かりのように、ミツバチの毒のような治療薬——これは非常に強い治療薬ですが——を扱う際には、人間全体の健康状態に対して、並外れて大きな注意を払わなければならないということを、はっきりと認識しておく必要があります。

ミュラーさんは、ご自身が冷えによってリウマチにかかり、それを日光で治療したところ消え去ったものの、今年の夏にまた少し現れたとおっしゃっています。また、ミュラーさんもミツバチに刺されることが効果的であると信じておられましたが、ある運の悪い日に両足を刺され、およそ32箇所もミツバチに刺されてしまったことがあるそうです。そのとき感じた唯一の不都合は、8日間ほど皮膚が虹のような色になってしまったことだけだったと言います。必ずしも常に腫れ上がるとは限りません。人間の身体というものは、それほど多様にできているのです。すでに説明した通り、ある人はミツバチに一刺しされただけで死に至ることもあれば、その一方で、ミュラーさんのようにすでに60回も刺されていながら、心臓の鼓動が速くなることすら記述にない、ということもあります。ある人は他の人よりもただ頑強だというわけです。

シュタイナー博士：あなたがそのようにたくさんのミツバチに刺されたとき、すでに長くミツバチを扱う仕事をされていたのですか。

ミュラーさん：何年もやっていました！

シュタイナー博士：あなたは、自分が初めてミツバチに刺されたときのことを覚えていないかもしれませんね。誰でも初めて刺されたときには、多かれ少なかれその影響を実感するものです。あなたが話してくれたあの男性は、間違いなく初めてミツバチに刺されたのでしょう。

そして、このような毒がいったん身体の中、つまり血液の中に入ると、人間はその毒に立ち向かう能力をどんどん高めていくようになります。いわゆる、ますます「免疫」ができていくわけです。ですから、養蜂を始めたばかりの頃に少し刺された経験があり、かつ心臓が健康な人であれば、その経験が作用して、毒に対してどんどん鈍感になっていきます。

自分が健康であると分かっているなら、一度ミツバチにあえて刺されることで、その後さらに刺されても大丈夫なようにすることさえ可能です。その場合でも、皮膚が虹色になるといった現象は現れますが、それはあくまで身体表面でとどまります。血液が免疫化されているからです。これは単に生まれ持った体質だけでなく、それ以前に血液の中に何を取り込んできたか、ということにも関係しています。

ですから、あなたが話してくれた事例を観察した医師が、なぜその男性に「2回目はそれほどひどい影響は出ないでしょうし、3回目には免疫がつくでしょう」と言わなかったのか、不思議に思います。——もっとも、その男性は、これ以上の危険にさらすことができないほど、重い心臓病を患っていたのかもしれませんが。その点も考慮しなければなりませんね。

現代では、養蜂を始める人はまず全員あらかじめワクチン（蜂毒の注射）を打つべきだと考える医師すらいるほどで、これは単に危険な話（行き過ぎた風潮）にすぎません。人々が戦争に行くときには、ありとあらゆる毒素を身体に注入されます。これもまた、お勧めできるようなことではありません。そのようなことをすると、血液が一種の「老廃物の溜まり」になってしまう可能性があるのです、当然うまくはいきません。このようなものを体内に取り入れることで、血液は常にいくらか悪化してしまうのです。もちろん、しばらく時間が経てば再びバランスは戻ります。ある程度の時間が経てば血液は確かに健康になりますが、同じ種類の新しい毒素に対しては抵抗力を持つようになります。

ミューラーさん：雄蜂（オスバチ）と3種類の卵についてですが、博士はすでにほとんどすべての点を説明してくださいました。ただ、1点だけ、おそらく博士がご存知ないかもしれない事柄があります。

巣箱が（私たちが考える意味で）完全に健康であったとしても、女王蜂の質が低下したり、あるいは女王蜂が老齢になりすぎたりすると、女王蜂が産むすべての卵が雄蜂になってしまう時期がやってくるのです。私は30年間の経験から、そのようなことが起こり得ると確信しています。女王蜂の質が低下した状態、つまり病気や老衰のときでも、彼女にはまだ「良い卵」を一つか二つ産む力は残っていますが、産まれる卵の大部分は雄蜂の卵になってしまうのです。

それから、ミツバチによるハチミツの製造がどのように行われているのか、ミツバチがどのようにそれを生み出しているのか、そして養蜂家が砂糖で手助け（給餌）をしなければならないのか、という点についてです。ここまでの議論から、養蜂家は砂糖を使ってはならない、あるいは使うべきではない、という結論になりました。もし誰かが流蜜期（蜜が採れる時期）に砂糖を与えたりすれば、その人は「ブラックリスト」に載ってしまいます。——それはまるで、嫌われて気に入らなくなった労働者をもう雇いたくない、というときと同じようなものです。

私は、外国産のハチミツについては苦い経験（悪い経験）をしています。

シュタイナー博士：人工的な方法で砂糖を使用した場合には、本物のハチミツが得られないというのは、当然ながら全くその通りです。そして、もし誰かがハチミツのほかにどうしても余分に砂糖を味わいたいと言うのなら、自分で勝手にそうすればよいのです。それはまるで、「人々がそんなに強いワインを飲むべきではないから」という理由で、誰かがワインに水を混ぜて提供すべきではないのと同じことです。大切なのは「ラベルに書かれている通りのものを手に入れる」ということであり、そうでなければなりません。ですから、この点に関しては、養蜂家同士が互いにチェックし合うのが一番良いのです。なぜなら、彼ら自身がそのことを最もよく理解しているからです。

雄蜂に関する事柄についてですが、これについても一言付け加えておきたいと思います。最初から「この女王蜂は正しく受精しておらず、雄蜂が孵化しすぎているのではないか」という疑念が生じるケースは確かにあり得ます。その場合、もしそれをミツバチたちの自然な営みに任せたくないのなら——雄蜂が多すぎる場合、ミツバチ自身はそんなことはしませんが、こうした実験は実際に行われています——特に強力な給餌を行うことによって、雄蜂が通常より早く、つまり23日～24日ではなく、20日～22日で孵化するように仕向けることができます。そうすると、その雄蜂たちは多少不完全にはなりますが、働き蜂によく似たミツバチになることができます。ただ、これは長期的にうまくいく方法ではありません。ここから分かるのは、「時間」がどれほど大きな影響を与えているかということです。

これらは当然、実際の養蜂の現場ではおそらく全く行われなような事柄です。しかし、理論上はそうなっているのです。「どのように餌を与えるか」が非常に強い影響を及ぼすということは言えますし、ケースによっては、本物の女王蜂とまではいかなくとも、働き蜂から「ごくわずかに卵を産むことのできるミツバチ」を発生させることに成功した例があるということも、決して否定はできません。

これらすべての事柄は、こうした生き物がいかに変容しやすいかを示しています。しかし、そのことは実際の養蜂にはそれほど大きな影響を与えません。

ミューラーさん：それを「偽女王（Afterkönigin / 働蜂化女王）」と呼んでいます。これは巣箱における一種の病気です。

シュタイナー博士：実際の養蜂の現場では、それはそれほど大きな重要性を持ちません。しかし、巣箱の内部には、特別な給餌方法によって、本来なら単なる働き蜂にすぎないものから卵を産むミツバチを作り出

せてしまうような「傾向」が確かに存在しているのです。これは一種の病気です。巣箱というものは一つの単一の生命体です。ですから、そのようなことが起きるときは、巣箱全体が病んでいるということになります。

それはまるで、ガチョウに強制給餌（フォアグラの肥育）をするようなものです。そうすると肝臓の力が特に強く発達し、肝臓だけが過剰に肥大化しますが、身体全体としては病気になってしまいます。働き蜂を操作して女王蜂（のようなもの）に仕立て上げるとき、その蜂は本来、過剰に発達した働き蜂にすぎないのですが、巣箱全体としては病気の状態にあるとみなさなければならないのです。

この件については、また将来ほかに何か思い出すことがあるかもしれませんね。その時はいつでもこの話題に戻ることにしましょう。さて、本日は残り時間を使って、ドリンガーさんの質問に関連する事柄について、もう少しお話ししておきたいと思います。

私たちは、ミツバチに似た昆虫、つまり広い意味でミツバチの近縁にあたる昆虫として、「ミツバチ」「スズメバチ（Wespen / 広くカリバチ類全般）」「アリ」を明確に区別することができます。これらの生物は互いに親戚関係にあります。私は前回、樹木などに卵を産み付けるタマバチ（Gallwespen）の興味深い話に触れ、これらのハチによって一種の内部的なハチミツ製造が行われていることを示しました。しかし、タマバチ以外にも別の種類のハチ（スズメバチやアシナガバチの仲間）が存在します。これらの種類は、一種の巣（巣房）を作るという点において、よりミツバチに似ています。

例えば、ある興味深いハチの仲間は次のような方法で巣を作ります。どこかの枝に少し硬めの葉があると、そのハチは飛び回って周囲から、例えば樹皮などから噛みちぎった非常に小さな破片を集めてきます。そして、それを自分の唾液としみ込ませ、まずその物質でいくつかの「柄」を作ります。この柄ができ上がると、ハチはこの作業をさらに繰り返し、唾液を混ぜ合わせながら、その柄の先にミツバチの巣の一つの部屋と非常によく似たものを作り付けていきます。

しかし、その物質を調べてみると、やはりミツバチとは異なります。ミツバチの巣は、皆さんがよくご存知の「蜜蝋」でできています。ところが、このハチが作るものを見てみると、でき上がるのは灰色がかかったので、これは私たちが作る「紙」に非常に似ています。それは本当に一種のパルプなのです。ハチはそこに2番目、3番目、4番目のセル（巣房）を付け足していき、それらは上から吊り下げられた状態になります。そして、そこに卵が産み付けられると、それらを覆ってしまいます。

さらに、産卵がまだ続いている間に、このハチは奇妙なことに、その紙の物質を使って（図を示しながら）このような輪（ループ）を作り、さらに一種のカバーを取り付けます。片側は開けたままにしておき、そこを出入口（飛入口）とすることで、ハチたちはここから出入りして中のセルを世話することができるのです。

その後、ハチはさらにセルを付け足し、また同じようにして蓋をし、再び輪を付け、ここにカバーを、ここに拓いた出入口を作ります。それはまるで松ぼっくりのような、丸ごと一本の長い円錐形になることもあります。ハチはこのような松ぼっくりに似た構造物を築き上げますが、個々の部分を見ると単に紙のパルプでできており、ミツバチの巣に似ているのです。

ご存知の通り、他のスズメバチ類の巣は、さらに外皮（外壁）で包まれているものもあります。このように、ハチ類の巣にはありとあらゆる形状が存在するのです。

図1



ここで、そこで実際に何が起きているのかを一度考えてみてください。もし皆さんが私に「ミツバチは蜜蝋で巣房を作るために何をしているのか」と尋ねるなら、私はこう答えるでしょう。ミツバチは花々、あるいは樹木にある花に似たものへと飛んでいきます。樹皮の成分や木質の成分には、ミツバチはあまり関わりを持とうとしません。本質的にミツバチが向かうのは「開花したもの」であり、せいぜい葉の成分の中に少しだけ含まれている花の要素に向かうくらいですが、それすらもすでに少なくなっています。

ところで、ミツバチのような高等な昆虫が、花以外のものに向かうケースが一つあります。彼らは木質の成分などには向かいませんが、状況によっては彼らにとって並外れて美味に感じられる「別のもの」に向かうのです。ミツバチにはあまり見られませんが、特にスズメバチや、とりわけアリに強くその傾向が見られます。

アリやスズメバチは、一方ではすでに木質化した硬い成分を自分たちの巣作りのために利用しながら、その一方で、ミツバチとは対照的に「アブラムシ（アリマキ）から出てくる液（甘露）」をとりわけ好むのです。これは非常に興味深いことです。なぜなら、これらの生物は巣作りに使用する素材が硬ければ硬いほど、単なる花の蜜だけでなく、花の上にいるもの、つまり「最も花に酷似したもの」を愛するようになるからです。それこそがアブラムシなのです。

アブラムシは並外れて気高き生き物です。——私が今、いささか「アリの言葉」で話していることをお許してください。人間の言葉であれば私もそのような呼び方はしませんが、アリの言葉において、アブラムシは気高き生き物なのです。アブラムシはまさに「植物の花」そのものです。アブラムシが分泌する液は、[アリにとって]これ以上ないほど洗練された極上のハチミツなのです。スズメバチに関しても、彼らがアブラムシの甘露に対してちょっとした「美食家」であることが見て取れます。

しかし、話がアリのことになると、アリにはハチのような見事な巣を作り上げるほどの力はありません。アリはまた違ったやり方をします。例えばアリは土を積み上げますが、その土の中の至る所に、まるで迷路のように複雑に入り組んだ通路を見つけることができます。それはさらに奥へと続いています。

そしてアリたちは、これらの通路を通じて、自分たちが利用できる植物の硬い物質の成分や樹皮の成分などを運び込みます。しかし、アリがとりわけ好むのは、すでに枯れて死んでしまった木材です。アリは、土の破片で築き上げたこの巣をさらに拡張していくために必要な素材を追い求めます。そのため、彼らは特に、すでに木が切り倒されて下部の切り株だけが残っているような場所へと向かいます。すでに完全に硬い髓や樹皮になったものへと好んで向かい、それを運び込んで、そこから自分たちの巣を築き上げていくのです。

図2

Biene: Blumensaft: Wachszellen
Wespe: Blumensaft, Tiersaft: härtere Zellen
Ameise: Tiersaft: keine Zellen

ミツバチ: 花の蜜: 蟻の細胞

Biene: Blumensaft: Wachszellen

スズメバチ: 花の蜜、動物の液: より硬い細胞

Wespe: Blumensaft, Tiersaft: härtere Zellen

アリ: 動物の液: 細胞なし

Ameise: Tiersaft: keine Zellen

このように、アリは自分たちの巣作りに最も硬い素材を使用します。そのため、彼らはもはや「巣房を組み立てる」という段階にまで至ることができません。彼らにとって、巣房作りはすでに縁遠いものになっているのです。使用する材料が硬すぎるからです。

これに対してミツバチを見ると、彼女たちは花そのものの内部にある材料（蜜や花粉）を使用していることが分かります。彼女たちはそこから自分たちの「蟻の巣房（蜜蟻のセル）」を作り出しますが、その代わり、自分たちの栄養そのものをこの花々の液から直接得なければならないという条件に従っています。

スズメバチの場合は、このような巣房の組み立てに使用する材料がミツバチよりもすでに硬くなっており、それがあのような「紙に似た素材」になります。これはより硬い材料ではありますが、薄いために、当然ながらミツバチのハニカム構造（ハチミツの巣）よりも壊れやすくなっています。しかし、物質そのものとしては内面的により硬いのです。

スズメバチはすでにアブラムシに対してちょっとした「美食家」になり始めていますが、それでもまだ、植物の内部にあるものからミツバチのような方法で栄養をとることもしています。

しかし、そもそも非常に硬い材料を使用するため、土の中に通路を掘ったり空洞を作ったりするだけで、もはやセルの並んだ巣房を作ることができないアリは、アブラムシを格別に愛しています。そしてアリたちの場合、アブラムシを丸ごと捕まえて自分たちの巣へと運び込むということが起こります。そのため、アリ塚の内部でアブラムシを見つけることができるのです。

これは非常に興味深いことです。ある村へ行くと、家並みがあり、その裏手にはあちこちに牛舎があって、そこに乳牛がいて、人々がそこから牛乳を得ていますよね。アリたちの場合も、これとまったく同じなのです。アリ塚の至る所に小さな構造物が見つかりますが、そこにはアブラムシがいます。アリたちにとって、彼らは「乳牛」なのです。アリたちがやっていることは、人間の酪農に対応する、より低次のプロセスにすぎません。彼らはそこに小さな牛舎を持っていますが、中にいるのは牛ではなくアブラムシなのです。

図3



アリたちはアブラムシに近づき、触覚で優しくなめます。これはアブラムシにとって並外れて心地よいことであり、そのためアブラムシは甘い液を分泌します。その結果、アリはアブラムシをなでることによって得られたその液を吸い上げることができるのです。アリが自分の栄養として必要とする最も重要なものは、アブラムシをなでて液をもらうことによって得られます。

人間が牛を扱うときもこれと似たようなところがあります。牛もしっかりと撫でてあげなければなりません。しかし、アブラムシはアリたちによって本当に「乳搾り」をされているのです。そして彼らは、自らが生息している花や葉のところでアリに捕獲され、アリたちによって非常に手厚く世話をされます。

ですから、このように言うことができます。「アブラムシが存在してくれているのは、実に素晴らしいことだ」と。つまり、周囲にアリ塚があるとき、アブラムシが存在することは素晴らしいことなのです。そこではアブラムシがアリたちによって丁寧に（植物から）摘み取られ、その後、アリたちの牛舎のなかでさらに活用されるからです。これは自然界における非常に理にかなった仕組みであり、この小さな生き物たちの間で、アブラムシをめぐる本物の「酪農」が行われているのです。

さて、これほど硬い材料を巣作りに用いるアリは、もはや単なる花の蜜だけで満足することはできません。アリは、花の蜜がすでに一度「動物（アブラムシ）」に与えたものを、自分の栄養として利用しなければならないのです。そこでは、花の蜜がすでに一度、その動物の身体を通過していなければなりません。

したがって、このようにまとめることができます。

ミツバチにおいては、それはまだ「純粋な花の蜜」である。

スズメバチにおいては、それは「花の蜜と動物の液」であり、その代わりに巣房（セル）がより硬くなる。

アリにおいては、本来の栄養となるものはもはや「動物の液（アブラムシの甘露）」だけであり、そのためもはや巣房（セル）を作らない。

アリにはもはや巣房を形成する力が残っていません。彼らは花からまだ何らかの恩恵を得ているとしても、生きるためにはこの「小さな動物の家畜小屋」からの補給をどうしても受けなければならないのです。さもないと彼らは生きていくことができません。

花々と、これらの虫たちの間に、実際どれほど興味深い関係が存在しているかがお分かりいただけるでしょう。ミツバチは、花の蜜を純粋なまま利用します。それ以外のもの、すなわちスズメバチや、特にアリは、この花の蜜を自分の栄養とするために、一度動物の身体を通過させなければならない状況にあります。その代わり、彼らは自分たちの住処を組み立てるために、もはや「花の蜜」ではない（より硬い地上的な）物質を使用することができるのです。

蜜蝋によるミツバチのハニカム構造（巣房）、紙によるスズメバチの巣、そしてもはや外側から（土などを）積み上げるしかなく、細胞のような巣房（セル）の形成にまで至ることができないアリの巣の間には、本当に大きな違いがあります。そして、その代わりに、彼らの「食べ物」にもこれほど大きな違いが存在しているのです。

第八講義

「労働者講義」より

〔GA351（第14講）〕ドルナハ、1923年12月15日

●基本的な視点（第八講義全体）

アリ・ミツバチ・スズメバチは血縁関係にある昆虫でありながら、それぞれ全く異なる生態を示している。

アリ塚や巣全体は一つの「統一体としての知性」を持っており、個々の虫は盲目的本能ではなく、環境に柔軟に適應しながら賢く行動している。

ミツバチ・スズメバチ・アリは「略奪者」ではなく、自然界に対して「生き続けるための大いなる可能性」を与え続ける恩人である。

アリ塚全体の知性や昆虫の行動には、宇宙的な英知が宿っており、人智学（精神科学）によって初めてその全貌が理解できる。

●要点（第八講義全体）

1) アリの驚異的な適応力と「農業」

- ・アリは土や朽ち木を巧みに利用して複雑な巣を構築。
家の中に侵入して巨大なアリ塚化することもある。
- ・特定の種（収獲アリ）は周囲の草をすべて排除し、
1種類の草だけを栽培・単一栽培する。
土を硬く踏み固め、種子を「火打ち石のように硬く」変質させる。
- ・これは人間の農業に似ており、
ダーウィンも「農業を営むアリ」と呼んだ。
彼らは種子を加工し、食料や建築資材に利用する。

2) 寄生蜂（スズメバチ類）と毛虫の関係

- ・寄生蜂は毛虫の体内に卵を産み、孵化幼虫が体内を食うが、
致命的な臓器は決して傷つけない。
（毛虫を「養母」として生かしたまま育つ）
- ・これも高度な「英知」の表れにほかならない。

3) 昆虫たちがもたらす「生命の物質」

＝蟻酸（Ameisensäure）と毒

- ・現代の花や植物は、かつての古い地球（古月紀）の
「生きた雲のような植物性」が凝縮されたもの。
- ・当時は宇宙から「動物性」の雲が降り注ぎ、
植物性を「受精」させていた。

その名残が今日の昆虫の毒・酸である。

- ・蟻酸は人間の体内にも微量に必要。
(不足すると痛風・リウマチに)
樹木・植物の内部にも不可欠。
- ・ミツバチの毒、スズメバチの毒、アリの蟻酸は、
植物に「生命力」を与える。
花は蜜を「喜んで」与え、代わりにこれらの酸を受け取る。
(略奪ではなく相互扶助)

4) 死んだ物質への還元と地球の維持

- ・アリは特に、朽ちた樹木・腐植土に蟻酸を大量に注入し、
死に向かう物質を再び生命へ向かわせる。
- ・一つのアリ塚が森全体の土壌
を「一滴の塩がコップの水全体を塩辛くする」ように浸透させる。
- ・これにより地球は「完全に死に絶える」運命を免れている。
昆虫たちは「小さな医師」として、
植物・土壌・生命全体を癒し続けている。

5) 人間と現代科学への示唆

- ・現代科学は「現在ある死んだ物質」だけを見て本質を見失っている。
- ・南部の農民は直感（「鼻の賢さ」）でアリ塚を大切にし、
「腐敗を中和してくれる」と知っている。
- ・自然界は「略奪」ではなく、深く相互につながった
「命の恩返し」のシステムで成り立っている。

●本文-1

皆さん、お早うございます！

私は本日も、前回ドルナハのドリンガー氏の質問に関連して始めた考察をさらに続けていきたいと思えます。もし途中で別の問題などが浮かび上がってきたなら、そちらもあわせてとりあげていくことにしましょう。

私は前回、この問いに答えるために「アリ（Ameisen）」の考察から出発しました。「ミツバチ（Bienen）」、「スズメバチ（Wespen）」、「アリ（Ameisen）」は、互いに親縁関係にある動物種であると言えます。ただ、その生態において、まったく異なるあり方を示しているのです。

そして、こうした生態から、「世界全体の大きな営み」の本質について、文字通り並外れて多くのことを学ぶことができます。

なぜなら、これらの動物たちやその生活様式に踏み込めば踏み込むほど、その労働や、彼らが成し遂げる事柄のすべてが、いかに理にかなって組み立てられているかという事実、ますます気づかされることからです。

私は前回、アリたちがどのように自分たちの巣を組み立てるかをお話ししました。彼らは、土そのものからなる土の山を積み上げるか、あるいは、すでに生命を失って朽ち果てた硬い樹木から集めてきた小さな木片や、そこに混ぜ合わせる他の物を使って巣をつくりあげます。そうして、自らの土の山（アリ塚）を作り上げるのです。

この土の山の中には、極めて多種多様な通路が縦横無尽にめぐらされており、アリたちはその中を大群をなし、あたかも行列を作るようにして移動します。私たちは、彼らがその穴から這い出てきて、周囲の環境のどこかへと向かい、自分たちが集めたいと願うものをせっせと収集している姿を目にすることになります。

しかし、これらの生き物は、必ずしも自分たちで一から巣を組み立てるだけでなく、すでにそこに存在しているものを巧みに利用することもあります。

（ここで黒板に図を描く）

図1



たとえば、どこかの木が切り倒されたと仮定してみましょう。木が切り出された後、その「切り株」がまだ土の中に残っています。そこへアリのコロニーがやって来て、その内部のどこかに部屋を構えるのです。彼らは内部へと穴を掘り進めて部屋を作り、外へと通じるありとあらゆる通路を穿ちます。

彼らはそこに、ほんの少しだけ土を積み上げ、一本の通路を作り、また別の通路を作り、さらに3本目の通路を作り……というように作業を進めます。これらの通路は内部で互いに連結し合っています。その中には、まさに網の目のように複雑に入り組んだ通路のネットワークが存在しているのです。

アリたちはこの中で活発に動き回り、自らの巣の建築資材や食糧として必要なものを、周囲の環境からせっせと運び込んでくるのです。

皆さん、これらすべてを「動物の『本能』によるものだ」と言って片付けるのは、なるほど結構なことではありますが、それではあまり多くを語ったことにはなりません。

なぜなら、もしアリの前にそのような切り株がなければ、彼らは砂の山を積み上げるからです。一方で、ちょうど都合のよい切り株を見つければ、彼らはそこに居を構え、山を積み上げるのに必要な労働を賢く節約します。つまり、この動物は「個々の状況に応じて柔軟に行動を変えている」のです。

したがって、この動物がただ一つの固定された「一般的な本能」を持っていると主張するのは非常に困難です。もしそれが単なる本能であるならば、動物は自らの本能に刻まれた通りに、常に全く同じ方法ですべ

てを行うはずだからです。しかし実際には、動物は「外部の環境条件」に自らを適応させています。これが重要な点なのです。

私たちの地域（中央ヨーロッパ）ではそれほど頻繁には起きませんが、もう少し温暖な南部地域に行くと、アリの存在は完全に独特な「厄介事」になります。

想像してみてください。どこかに一軒の家が建っており、家の住人が長いあいだ全く気づかないような部屋の片隅に、アリたちが侵入したとします。彼らは周囲の環境からありとあらゆる物、つまり土の粒や小さな木片などを運び込み、普段は掃除の手が届かないような場所に、まずは誰にも気づかれないうく小さな部屋を構えます。

そしてそこを拠点として、彼らは非常に複雑なルートをたどりながら、台所や食糧貯蔵庫へと通じる通路を穿ちます。そうして台所や貯蔵庫から、自分たちの食糧や必要なものをせっせと運び出すのです。そのため南部地域では、家全体が実質的に一つの「巨大なアリ塚」によって完全に侵食されてしまう、ということが起こります。

確かに、自分がそのようなアリ塚の「同居人」として暮らしていることには全く気づかず、あるとき偶然その場所に足を踏み入れたり、あるいは食糧貯蔵庫の何かがかじり取られているのを目にしたりして初めて気づくのです。そして、そのアリの行列が作る一本の通路を逆にずっと辿っていくことで、ようやく彼らの巣の本拠地を発見することになります。

ここでもやはり、「本能」という言葉だけでは大した説明になりません。なぜなら、もし本能だと言うなら、「自然がこれらの動物に対して、まさに『この特定の家』の中に巣を組み立てる本能をあらかじめ植え付けたのだ」と言わねばならなくなるからです。しかもその巣は、まさにその家の構造にぴったりと適合するように組み立てられているのです。

ですから、お分かりのように、これらの動物たちは単なる盲目的な本能だけで行動しているのではなく、そこには「英知（Weisheit）」が働いているのです。

しかしその一方で、一匹の個体としてのアリをどれほど詳しく調査してみても、その一匹が格別に賢い（英知に満ちている）という結論には至りません。アリをそのコロニーから引き離して隔離し、何か作業をさせてみても、それは特に賢い行動には見えないのです。

その結果、私たちが考えつかなければならないのは次のような事実です。すなわち、「知性を持っているのは一匹のアリではなく、一つの統一体としてのアリ塚（Ameisenhaufen）そのものなのだ」ということです。

ミツバチの巣箱（Bienenstock）の全体がひとつの統一体として賢いのと同様です。アリ塚の中にいる個々のアリたちが、それぞれ個別の知性を持っているわけではありません。このように、自然界では極めて興味深い方法で労働が行われているのです。

しかし、そこにはさらに多くの、いわば「さらに輪をかけて興味深い事象」が存在しています。

ある種類のアリ（収獲アリの仲間）にいたっては、次のような方法で活動を行います。彼らは地上のどこかに一種の「土手」を築き上げます（黒板の図を参照）。その場所は周囲より高くなっており、そこに円を描くようにして周囲の土を盛り上げます。そして、その内部へと穴を掘り進めていくのです。その中にアリた

ちが暮らしています。この構造物は、時にはまるで「活火山」のような形にまでそびえ立つことがあります。その内部に通路が走っており、それらが周囲の環境へと伸びているのです。



さて、これらのアリたちは、実に特別なことを行います。彼らはその周囲の環境に生えているあらゆる草や植物を、「ただ一つの特定の草の種類」を残して、すべて噛みちぎって排除してしまうのです。この一種類の草以外のものは、すべて根こそぎ噛みちぎります。そのため、時には中央に一種の丘（アリ塚）があり、その周囲はまるで「きれいに舗装されている」かのように見えることすらあります。彼らがすべての草を噛みちぎるため、その場所の土壌が細かく踏み固められて引き締まるからです。そこは非常に緻密で硬い地面になります。つまり、中央にアリ塚があり、その周囲にはまるでアスファルト舗装のようになった（ただしもっと明るい色の）極めて滑らかな平地が広がるのです。

さらに、これらのアリたちは周囲の環境へと出かけていき、その特定の草の種類（の種子）をわざわざ運んできて、自分たちで「栽培」します。風が別の植物の種をそこへ運んできて、芽を出そうものなら、アリたちはすぐさまそれを噛みちぎり、自分たちが平らにしたその領土の外へと放り投げます。その結果、この居住地の周辺全体には、彼らを選んだその一種類の草以外には何も生えなくなるのです。

このように、アリは一種の「私有地（Besitztum）」を自ら確保し、その周囲に自分たちの好みにぴったりの草の種類を正しく栽培しているのです。彼らはそれ以外のものを一切そこには残さず、外へと放り投げ、すべて噛みちぎってしまいます。

そして、そこに育つその草の種類は、居住地の外側に生えている同じ草とは、「まったく異なる外見」を持つようになります。なぜなら、外側の草はたとえばフカフカした柔らかい土壌で育つため、見た目も全く異なりますが、アリの居住地の土壌はアリたちの手によってカチカチに硬くされているため、そこで育ち、アリによって植えられたその草は、「極めて硬い種子」「ケイ石（火打ち石）のようにカチカチに硬い種子」をつけるようになるからです。

皆さん、このようなアリ塚を実際に見つけることができます。その周囲には、まるまる一つの「農業」が展開されているのです。——彼らは文字通り「農業を営むアリたち（ackerbautreibende Ameisen）」なのです！

この事象を特に詳しく観察したダーウィンは、彼らをそのように名付けました。つまり、アリ塚の周辺にはこの農業システム全体が存在しており、その地面は小さな米粒のよう（に整然とした粒）になり、種子は恐ろしいほど硬くなります。

そして、この農業のすべての工程が完了すると、アリたちは中から這い出てきて、植物の先端を噛みちぎり、それを自分たちの巣へと運び込みます。その後、彼らはしばらくのあいだ巣の内部に引きこもるため、

外からは姿が見えなくなります。しかし、彼らは巣の内部で猛烈に働いているのです。

ケイ石のように硬いそれらの果実（種子）のまわりに付着している、自分たちにとって役に立たない小さな茎や籾殻などを、彼らはすべて噛みちぎって分離します。そしてしばらくすると、アリたちは再び外へと這い出てきて、その「農場」の上を歩き回り、自分たちが必要としない不要なゴミをすべて農場の外へと投げ捨て、アリ塚の内部には、あのケイ石のように硬い種子だけを保管するのです。

彼らはその非常に頑丈な大顎を使って、この硬い種子をあるものは自分たちの食糧として 利用し、またあるものは巣の内部のさらなる建築資材（構造の補強）として利用します。彼らは正真正銘の「農民」です。彼らは近隣にあるものが自分たちにとってまさに利用できるものであるかどうかを、しっかりと見定めています。そして役に立たないものは、再び外へと放り投げるのです。

結局のところ、人間がやっていることもこれと大して変わりません。この「農業を営むアリたち」は、自分たちが必要とするものを、極めて洗練されたやり方で作り出しているのです。

これは、思わず次のように自問してしまうようなあり方です。「一体、その根本では何が起きているのだろうか？」と。

皆さん、ご覧の通り、ここでは根本的に「完全に新しい草の種類」が形成されているのです！そこに育つような、ケイ石（火打ち石）のようにカチカチに硬い米粒のような種子は、他には存在しません。それらはただ、アリたちの働きによってのみ生み出されるのです。そして、このアリたちはそれを再び加工します。一体、そこでは本当に何が起きているのでしょうか。この問題に踏み込む前に、このプロセスをもう一つの別の側面から観察してみることにしましょう。

もう一度スズメバチへと戻ってみます。そこには、以前お話ししたように、樹木の葉や樹皮の中に卵を産み付ける生き物（タマバチ）がいます。それによって、いわゆる「虫こぶ（五倍子：Galläpfel）」が大きく育ち、その中から再び若いハチたちが発育して出てくるのです。

しかし、それとは異なるケースもあります。

（ここで黒板に図を描く）

ここにおよそ次のような姿をした「毛虫（Raupen）」がいるとします。皆さんもよくご存知の、全身がびっしりと毛で覆われた、とてもトゲトゲした毛虫のことです。このような毛虫に対して、次のような出来事が起こることがあります。

ある特殊な種類のハチ（ヒメバチやコマユバチなどの寄生蜂）が一匹、あるいは数匹やって来て、この毛虫の体内に、ただ直接自らの卵を産み付けるのです。これらの卵が成熟すると、卵から「幼虫」が孵化します。幼虫というのは、ミツバチであれ、この種の他の昆虫であれ、彼らが最初に現れるときの卵の次の形態のことです。

アリの場合も全く同様です。皆さんもご存知のように、アリ塚を切り開くと、その中にいわゆる白い「アリの卵」が見つかります。これは特定の鳴き鳥（ジュウシマツやカナリアなど）の餌として与えられるものです。しかし、これらの「アリの卵」と呼ばれているものは、本当の卵ではなく「サナギ（Puppen）」なのです。本物の卵は非常に小さく、そこからまずは幼虫が出てきます。したがって、人々がそのサナギを「アリの卵」と呼ぶのは誤りです。

さて、スズメバチ（ヒメバチなどの寄生蜂）がその卵を毛虫の体内に産み付けるとき、非常に奇妙なことが起こります。私は以前にもこのお話をしたことがありますね。

卵から孵化してくる幼虫たちは、もの凄く大食漢です。しかも、この一匹の毛虫の体内には、数え切れないほどの幼虫がひしめいているのです。これらの幼虫は食欲で、毛虫の体内から自らの食糧を貪り食います。

しかし、ここで極めて奇妙なことが起こるのです。——先ほども言ったように、前にもお話ししたことがありますが——、もしこれらのハチの幼虫のどれか一匹でも、毛虫の「胃」を食い破ってしまったなら、その内部にいるハチのすべての幼虫はその時点で全滅してしまい、それ以上生き長らえることはできなくなります。

たとえば眼や、心臓に類するような器官、あるいは毛虫が消化のために使用している内臓、そうした生命維持に不可欠な器官が食い荒らされてしまったなら、毛虫の命はそれ以上まったく続かなくなってしまうのです。

ところが、これらの小さなハチの幼虫たちは、「毛虫が生き延びて成長していくために絶対に必要とするものには、決して噛みついたり食い荒らしたりしない」という知性を示し、長いあいだ傷つけても致命傷にならない器官だけを狙って噛みつき、貪り食うのです。そのため、毛虫は死ぬことはなく、せいぜい衰弱する程度で済みます。そして、ハチの幼虫はその体内でさらにぬくぬくと食べ続けることができるのです。

つまり、ハチの幼虫たちが「毛虫を死に至らしめるような部位には一切手を付けない」というのは、実に見事に、英知を持って仕組まれていることなのです。

皆さんも、これらの幼虫が十分に成熟した後に、そこ毛虫の体から一斉に這い出てくる光景を、すでにご覧になったことがあるかもしれません。彼らは外へと這い出てきます。つまり、その毛虫は自らの肉体そのものを差し出して、このハチの群れを育んだ本物の「養母（Pflegemutter）」だったわけです。

幼虫たちは今や外へと這い出て、外の世界でさらに発育してヒメバチ（Schlupfwespen）になり、花などから自らの食糧を求めます。そして、彼らが再び繁殖の時期を迎えると、また同じように別の毛虫の体内へと自らの卵を産み付けるのです。

これを見て、皆さんはこう言われるかもしれません。「ここには、実は恐ろしいほど頭の良い（巧みな）仕組みが隠されているのだ！」と。

そして実際、私が前に申し上げた通り、これらの現象を細かく観察すればするほど、私たちはますます「驚嘆・賛美」の念を抱かざるを得なくなります。本当にそれ以外にあり得ないのです。人は驚嘆の念に包まれ、そして自らに問いかけることになります。「この全体の背後には、一体どのような相互のつながりが隠されているのだろう？」と。

さて、私たちはここで、いわばこの問題の「根本」へと降りていってみましょう。私たちはまず、自分自身にこう問いかけます。「地上からは、土を突き破って美しく花たちが咲き誇っている。そこには毛虫たちも存在している。そして、そこへこれらの昆虫たちがやって来て、花や毛虫をたらふく貪り食い、そして再び子孫を残していく。このドラマは、常に何度も最初から繰り返されているのだ」と。

そして私たち人間にとっては、一見すると、この「昆虫界の全体」というものは、実はいなくても事足りるのではないか、と思えてしまいます。確かに、ミツバチを見るとき、私たち人間はこう言います。「ミツバ

チは私たちにハチミツを届けてくれる。だから養蜂は私たちにとって有益なのだ」と。素晴らしいことです。しかし、これはあくまで「人間の視点」から見た話にすぎません。

もしミツバチが、ただ植物からハチミツを一方的に奪い取る「略奪者」であり、私たち人間がただそれを利用して、そのハチミツで栄養を補給したり、あるいはそのハチミツで自分の病気を治療したりしているのだとすれば、それは私たちにとっては最高に都合の良いことですが、「花たちの視点」から見れば、それは単なる一方的な略奪であり、私たち人間もまたその強盗のおこぼれに預かっているだけ、ということになってしまいます。

したがって、ここで次のような問いが浮き上がってきます。「花たちの本音は、もしかしたら次のように言っているのではないだろうか？——『外には、私たちの液汁を一方的に奪い取る泥棒ども——ミツバチ、スズメバチ、アリ——がウロウロしている。もしあいつらが私たちの液汁を奪っていかなければ、私たちはもっとはるかに見事に、健康に育つことができるのに！』と。」

この見方は、人間が普段、植物の側にあるだろうと勝手に思い込んでい視点にすぎません。

実際、物事を知らない人々が次のように嘆き悲しんでいるのを、皆さんもよく耳にされることでしょう。「ああ、かわいそうな花たち、ああ、かわいそうな虫たち！そこへあの恐ろしい寄生者ども（昆虫たち）がやって来て、彼らを貪り食い、あれこれの悪さをして、花たちから大切なものを奪い去っていくのだ」と。——しかし、事実はそうではありません。そのようなことは断じてなく、真相はまったく異なっているのです。

私たちが一本の花に近づき、そこに一匹の昆虫、たとえばミツバチが止まって、花やヤナギから液汁（蜜）を吸い上げているのを目にすると、私たちは自らにこう問いかけねばなりません。「もしもミツバチやスズメバチ、あるいは他の昆虫たちがやって来て、この液汁を吸い上げてくれなかったとしたら、この植物はいったいどうなってしまうのだろうか？そのときはどうなるのだろうか？」と。

これは当然ながら、単なる「略奪」として片付ける話よりも、はるかに答えるのが難しい問いです。なぜなら、この問いに答えるためには、「自然界の大きな営み」の全体へと眼差しを向けなければならないからです。そして、地球の進化における「過去の古い状態」へと遡って見つめ直すことができなければ、この問題に関してはどのような正しい見解にも到達することはできません。

地球というものは、最初から今のような姿をしていたわけではありません。もしも地球が常に今のような姿であり、外には死んだ石灰岩や死んだ石英、死んだ片麻岩や雲母片岩などがただ転がっており、そこから現代の種子をもとに植物が芽を吹き、動物が生きている……もし地球が常にそのような場所であったとしたら、そもそもこの世界の生命のシステムは存在することすらできなかったでしょう。およそあり得ないことなのです！

自分たちの科学を「ただ今日そこに存在しているもの」だけでスタートさせている現代の学者たちは、完全に重大な「錯覚」に陥っています。なぜなら、そのような方法では、生命というものはそもそも成り立ち得ないからです。

皆さん、現代の科学が探求しているような（目に見える死んだ物質の）データから地球の秘密や法則性を探ろうとする人物は、たとえるなら、次のような「火星の住人」と全く同じです。その火星人が地球へ降りてきたのですが、彼には「生きている人間」を認識する感覚が全くありません。そのため、彼はただ遺体安置所へと向かい、そこに横たわっている「死体」だけを観察するのです。

しかし、これらの死体というものは、彼らが「かつて生きていた」からこそ、そこに存在できているのではないのでしょうか！ 生きている人間をまだ一度も見たことがなく、死体だけを見ている火星に対しては、まず彼を「生きている人間のところ」へと連れて行ってあげなければなりません。そうして初めて、彼は自分自身にこう言うことができるようになるでしょう。「なるほど、今なら分かったぞ。あの死体たちがなぜあのような形をしているのかが理解できた。以前の私には分からなかった。なぜなら、その前に存在していた『生きている状態』を知らなかったからだ」と。

これと全く同様に、私たちが地球の進化の法則を知りたければ、必ず「過去の古い状態」へと遡らなければならないのです。

ご覧の通り、現在の地球の前には、これとは「まったく異なる形態」が存在していました。私はそれを一貫して「古月紀（Mondgestaltung）」の形態と呼んできました。私の著書『神秘学概論』の中でも、これは「月紀」と呼ばれています。なぜなら、夜空に浮かぶ現在の月というものは、この「かつての古い地球」が残していった残渣だからです。

そして、それ以外にも、さらに別の状態が地球の前に存在していました。地球は自らを変容させてきたのであり、根源においては、今とはまったく異なる別の存在だったのです。

かつて地球には、現在私たちが目にするような植物や昆虫がそもそも存在しない、次のような状態がありました。

（ここで黒板に図を描く）

いわば、今日の地球の土壤に相当するものがここにありました。そこから、植物に類するような構造物（植物のようなもの）が芽を吹いていたのですが、それらは今日の植物のように固定されたものではなく、まるで「雲」のように、絶え間なくその形態を変化させ、変容し続ける存在だったのです。当時の地球の周囲には、そのような雲のような植物が漂っていました。

しかし、それらは今日外に見られるような雲、つまり死んでいる雲（少なくとも見た目には死んでいるように見える雲）ではありませんでした。それは、今日の植物が生きているのと同じように、自ら生きて躍動している「生きた雲」だったのです。もし皆さんが、今日の空にある雲が生命を獲得して青々と緑色に染まっていく様子を思い描くことができるなら、当時の植物界がどのような姿をしていたか、そのイメージを掴むことができるでしょう。

この（生命の全体性を捉えるという）点において、現代の科学者の中には、恐ろしく滑稽で面白い人々がいます。

先日も、新聞に実に奇妙で愉快的な短い記事が載っていました。まさに現代のスタイルにぴったりな、新しい科学的発見がなされたというのです。本当に笑ってしまうような内容でした！

それによると、ある特定の方法で処理された「牛乳」が、壊血病という非常に厄いな病気に対して優れた治療薬になる、ということが明らかになったのだそうです。

さて、皆さん、現代の科学者はそこでいったい何をするのでしょうか？ 私は以前にも皆さんに注意を促したことがあります、彼はまずその牛乳を「成分分析」するのです。そうして、牛乳の内部にこれこれの化学成分が含まれていることを突き止めます。

しかし、これも前に皆さんにお話ししたことです、牛乳の内部に含まれている状態のこれらの化学成分であれば、ハツカネズミに与えて栄養にすることができます。ところが、それらの成分を（牛乳からバラバラに抽出して）単体だけでハツカネズミに与えると、ネズミたちはほんの数日のうちに全員死んでしまうのです！

（生理化学の）ブンゲ教授の門下生たちもまさにこの事実を確認し、そしてただ単にこう言ったのです。「なるほど、牛乳やハチミツの内部には、一種の『生命の物質』が入っているのだ。それこそが『ビタミン』だ！」と。——ご存知のように、私はこの例を以前にも一度挙げました。これはまるで、「貧困の原因はフランス語のポヴレテ（貧しさ）にある」と言っているのと同じことです。ここでは、「そこにビタミンが入っているからだ」と言って済ませているわけです。

つまり、彼らは次のような「重大な発見」をしたわけです。牛乳の内部には、非常に人工的な名前のついたあらゆる物質が含まれている、と。そして、ある方法で調合されたその牛乳は、確かに壊血病の治療薬になります。

しかしその後、極めて厳密な実験によって、牛乳の内部にあるそれらのもったいつけた名前の物質を「単体」で壊血病の患者に与えた場合でも、はたして壊血病が治るかどうか調査されました。

結果はどうだったのでしょうか。それらの成分のどれ一つをとっても、患者は「何一つとして治らなかった」のです！ どの成分も単体では効きませんでした。しかし、それらの成分が、特別に調合された牛乳という「一つの全体」としてまとまっているときには、壊血病の患者を治すことができるのです。個々の成分はそれぞれ単独では癒しません。ただ「全体」だけが癒すのです。

しかし、学者は自らにこう問いかけます。「もし、これらの化学成分をすべて取り去ってしまったら、一体何が残るといふのだ？」と。

（彼にとっては目に見える物質しか存在しないため）彼は今やそれらの成分をすべて差し引いてしまいます。これらの成分が「エーテル体」の中に包まれているのだということは、彼は決して認めようとしません。しかし、彼はそれらをすべて差し引いていくのです。では、何が残るのでしょうか？

彼は言います。「それこそが『ビタミン』だ！」と。つまり、壊血病を治さなければならない肝心のビタミンは、これら個々の成分のどこにも入っていないということになります。では、それは一体どこにあるのでしょうか？

そこで人々は、次のような素晴らしい（突飛な）結論を持ち出してくるのです。「他のすべての成分の中に含まれていないのだから、これはきっと牛乳の『水分』の中に溶けているに違いない」と。したがって、壊血病を癒しているのは「水」なのだ、ということになってしまいます！

これは途方もなく滑稽な話ですが、現代（1923年当時）においては極めて学術的な事象として扱われているのです。なぜなら、もし水の中にビタミンが含まれているのだとすれば、私たちの学問は、文字通り「空にある雲が生きていた時代」の領域にまで到達してしまったことになるからです。なぜなら、私たちは空を見上げて「あの水（雲）のいたるところにビタミンが入っているのだ」と言わねばならなくなるからです。もしそうなら、それこそが、かつて地球がかつて存在していたあの古い状態そのものにほかなりません。ただ、現在の地球はもはやそのような状態ではないのです。

かつての地球には、いわば「植物性」そのものというべき、生きて躍動する植物の絨毯が広がっていました。そして、この生きて動く植物の絨毯は、いたるところで周囲の宇宙環境からやって来るものによって受精させられていたのです。

当時は、現在のようにカチカチに締めくくられた個別の動物はいませんでした。スズメバチがどこからか飛んでくるようなことはなく、周囲の宇宙空間から、ただ「動物として生きている物質（Substanz, die tierisch lebte）」が（雲のように）押し寄せていたのです。

（ここで黒板に図を描く）

つまり、かつての私たちの地球は、およそ次のように描写できる状態にありました。地球は植物としての命を宿した「植物の雲」に包まれており、その雲のところへ、宇宙の彼方から別の雲が近づいてきました。その宇宙からの雲が植物の雲を受精させていたのであり、それらは「動物的な性質（tierischer Art）」を持った雲だったのです。

宇宙空間（Weltenraum）からは「動物性（Tierheit）」が降り注ぎ、地球からは「植物性（Pflanzenheit）」が立ち昇っていました。

これらすべてが、長い歴史の中で変化を遂げました。当時の（雲のように流動的だった）植物たちは、現在のように地球から生え出してくる、明確に固定された輪郭を持つ「花」へと姿を変え、もはや巨大な雲を形成することはありませんでした。しかし、これらの花たちの内側には、「周囲の環境（宇宙）からの影響を受け入れたい」という太古の切なる欲求がそのまま残り続けているのです。

（ここで黒板に図を描く）

ここに、地球から一本のバラが生え出くると想像してみてください。ここにバラの葉があり、あそこに別の葉があり、3枚目の葉があります。そこへ、一匹のスズメバチがやって来ます。このハチは、バラの葉から文字通り自らの大顎で小さな破片を丸く切り取り、それを自分たちの巣へと持ち帰って、巣の建築材料にしたり、あるいは幼虫たちの栄養にしたりします。それはただハチによって切り取られ、あちらへと運ばれていくのです。

先ほども言ったように、現代のバラの木はもはや流動的な雲ではありません。それらは明確な輪郭を持った固形物になりました。しかし、かつてその雲の内部で生きており、宇宙のあらゆる方向から押し寄せていたあの「動物性の雲」と深く結びついていたものは、現代のバラの葉や花の中にも依然として厳然と残り続けているのです！ それは確かにそこに居座っています。

すべてのバラの葉の内部には、ある意味で「宇宙の環境全体のすべてによって受精させられずにはいられない」という、根源的な性質（絆）が眠っているのです。

これらの花たちが（生きていくために）必要としているもの、それも絶対に不可欠なものとして求めている物質は、実は人間の身体の内側においても極めて大きな役割を果たしている物質なのです。

人間の身体を詳細に調査してみるなら、その体内にはありとあらゆる多種多様な物質が存在していることが分かります。これらの物質のすべては、体内で絶えず変化を繰り返しています。しかし、人間の身体の内側で、それらの物質は最終的に「ある特定の物質」へと変化し、それは常に一定の分量として人間の体内に含まれているのです。人間の身体はそれを必要としています。

それこそが、まさに「蟻酸（Ameisensäure）」なのです。

もし皆さんが外へ出かけて行って、一つのアリ塚からアリを集め、それらをすり潰してみるなら、そこから一種の液汁を抽出することができます。この液汁には、蟻酸と、そしていくらかのアルコールが含まれています。この液汁がアリたちの体内に宿っているのです。

しかし、これと全く同じ液汁（蟻酸）は、極めて微細に分散された（希釈された）形で、皆さんの身体の内部にも存在しているのです。皆さんが生涯を通じて食べるものは、体内で常に変化を遂げていきますが、その一部は（すべてではありませんし、当然他にも様々な物質が形成されますが、その僅かな一部は）必ずこの「蟻酸」へと変化しているのです。この蟻酸が、皆さんの身体の全体を満たしています。

もしあなたが病気になり、体内の蟻酸が不足してしまうなら、それは身体にとって非常に深刻な事態を招くことになります。なぜなら、体内に十分な蟻酸が存在しないがゆえに、身体は——ここで先ほどのミュラー氏の質問に改めて言及することになり、同時にその質問への回答ともなるのですが——、痛風（gichtisch）やリウマチ（rheumatisch）の状態へと傾いていってしまうからです。蟻酸が不足すると、身体は「尿酸（Harnsäure）」を過剰に形成し、逆に「蟻酸」を十分に作ることができなくなってしまうのです。

つまり、アリたちは「人間の身体もまた必要としているもの」をその身に宿しているわけです。しかし、この蟻酸というものは、そもそも自然界の全体において必要とされている物質なのです。

皆さんは、その内部に僅かばかりの蟻酸を含んでいないような「樹皮」を、どこを探しても見つけることはできないでしょう。人間の身体がそうであるように、樹木の全体のいたるところに蟻酸が存在しています。すべての葉の内部、いたるところに蟻酸が含まれていなければならないのです。

しかし、体内に含まれていなければならないのは蟻酸だけではありません。蟻酸と深い親縁関係にある物質として、スズメバチが持っているもの、そしてミツバチがその体内に宿しており、後に「ミツバチの毒」となる物質もまた同様です。これらの昆虫たちは皆、毒性を持ったある特定の物質をその体内に携えているのです。

ミツバチに刺されれば炎症が起きますし、スズメバチに刺されれば、時には本当にひどい目に遭うことになります。このスズメバチの刺傷にまつわる話には、実に凄まじいものがあります。動物学者のブレーム（Brehm）の著書の中に、これらの昆虫たちが、あるとき人間や動物たちに対して本当にひどい悪戯を仕掛けたという、微笑ましくも壮絶な一幕が描かれています。

それはおよそ次のような事件でした。まだ若い一人の牛飼いの少年が、放牧地にたくさんの牛を連れてきていました。しかし、その放牧地の地面のいたるところには、これら昆虫たちの巣（地中のハチの巣など）が埋まっていたのです。

そこへ、彼が連れていた牧羊犬が走り回っていました。ところが突然、この犬がまるで狂ったようになり、狂人のようにあちこりを駆け回り始めたのです。周囲の人間には、犬の身に一体何が起きたのか全く分かりません。

犬は全速力で、その近くを流れていた小川へと向かって走り、そのままドボンと小川の中に飛び込みました。そして、水の中で自らの身体を何度も激しくブルブルと揺さぶり続けたのです。

牛飼いの少年はそれを見てすっかり狼狽し、犬を助けようと駆けつけましたが、川の外から助けようとして、彼は川の中には飛び込まず、岸から手を差し伸べようとしたのです。しかし不幸なことに、彼は（先ほどの犬がそうしたように）まさに昆虫の巣を踏みつけて立ってしまったのです。すると今度は、ハチたちが一斉に彼を刺し始めました。

今度は少年までもが狂ったように走り回り、最終的には彼もまた小川の中へと飛び込んでしまいました。こうして犬がいなくなり、牛飼いもいなくなってしまったため、残された牛の群れのなかに、徐々に混乱が広がり始めました。

牛たちもまた、歩き回るうちにこのような昆虫の巣を踏みつけてしまい、次々と刺されて、まるで狂ったように暴れ始めました。そして最終的には、牛の群れの大部分までもが、まるで気が変になったかのように、その小川の中に一斉に浸かっているという事態になってしまったのです！

このように、昆虫たちの刺傷というものは、人間に本当にひどい災難をもたらすことがあります。これらの動物たちは皆、最終的にはこのような毒性のある物質を体内に持っているのです。そして結局のところ、皆さんが一匹のアリに噛まれたときにも小さな炎症が起きますが、それはアリがその傷口の中に「蟻酸」を流し込んでいるからにほかなりません。

しかし、この蟻酸というものは、正しい比率で希釈されている状態であれば、あらゆる生命体の内部に必ず含まれている物質なのです。

皆さん、もしもこの地上に、これら毒素（酸）の精製者である「アリ」も「ミツバチ」も「スズメバチ」も存在しなかったとしたら、一体何が起こるのでしょうか？

そのとき起こることは、人類の生殖において、あるとき突如としてすべての男性の首をはねて、地上に女性だけを残したときに起こる事態と「全く同じこと」です。男性という（命を繋ぐ）種のストックが存在しなくなるため、人類はそれ以上、子孫を残すことができなくなってしまいます。

さて、これらの昆虫たちはそれぞれ、これとは別に（個体としての）精子（種）を持っています。それでもなお、彼らの生命にとっては「これらの毒素（酸）から生じるもの」が絶対に不可欠なのです。なぜなら、これらの毒素は、かつての（古い地球である）「旧月紀」の環境に存在していたものの名残だからです。宇宙空間から植物を通じて地上へと流れ込んできた、極めて微細に分散されたミツバチの毒、スズメバチの毒、そして蟻酸、これらはかつて（地球の全域に）存在していました。そして、その残渣が今日でもなお残されているのです。

ですから、皆さんが外へ出かけて行って、どこかのヤナギの木や一本の花の上にミツバチが止まっているのを目にすると、次のように言うてはなりません。「あの昆虫は、花からただ一方的に何かを奪い取っているだけだ」と。

そうではなく、次のように言わねばならないのです。「あの小さなミツバチが花の上に止まって蜜を吸っているとき、花はあまりの心地よさゆえに、ミツバチが吸っているまさにその場所へと、自らの液汁を喜んで奔流させているのだ」と。

皆さん、これは本当に興味深い事実です！ ミツバチがそこで蜜を吸うとき、花は自らその液汁をそこへと流れ込ませます。そして、ミツバチが花から蜜という物質を受け取るのと同時に、この液汁の流れを通じて、

ミツバチの側から花（植物）の側へと、ミツバチの「毒（酸のプロセス）」が注ぎ込まれているのです。

また、スズメバチ（タマバチ）が植物を刺すときにもスズメバチの毒が流れ込みます。そして特に、アリがもはや生命を失ってしまった樹木の幹などに群がって活動するときには、そこへ「蟻酸」が注ぎ込まれます。つまり、一匹のアリがやって来ることによって、花の液汁（植物の生命力）とアリの液汁（蟻酸）が、そこで美しく結合するのです。これは絶対に不可欠なことです。

なぜなら、もしもこのことが行われず、これらの植物界を絶えず訪れてはそこをかじるミツバチ、スズメバチ、アリたちが存在しなかったとしたら、花たちには「必要な蟻酸」や「必要な毒素」が一切供給されなくなってしまう、花（植物）はしばらくの後に、すべて絶滅してしまうからです。

人々が普段「生命の物質」と呼んでいるような物質、——ええ、人々はこうした物質をありがたがりますが——、本来、この蟻酸のような物質こそが、真の「生命の物質」にはかならないのです。

人間が「ベラドンナ（Tollkirsche / 毒ナスビ）」に近づくとき、その内部には強烈な毒が入っています。これは（人間にとっては）有害な物質です。しかし、ベラドンナは何をしているのでしょうか？ 彼女はまさに、宇宙の環境から「精神（霊）」をその体内に集めているのです。

「毒（Gifte）」というものは、精神（霊）を集める磁石（Geistsammler）」なのです。だからこそ、毒は「治療薬」にもなり得るのです。

根本的に言うならば、地上の花たちは、放っておけば絶えずどんどん病気がちになり、衰弱していつてしまう運命にあります。そして、これらの小さなミツバチ、スズメバチ、アリたちは、花たちがどうしても必要としている蟻酸を絶えずそこへと運び、その病を内側から綺麗に癒してくれる、大自然の中の「小さな医師たち」にはかならないのです。それによって、すべては再び癒やされます。

お分かりのように、これらのミツバチ、スズメバチ、アリというものは、単なる「略奪者」などでは決してなく、同時に、花たちに対して「生きるための大いなる生命力」をもたらしてくれている恩人なのです。

そして、それは最終的には毛虫（Raupen）たちにいたるまで全く同様ののです。

（ここで黒板に図を描く）

彼らもまた、もしその営みがなければ絶滅してしまい、しばらくの後には地上からいなくなってしまうでしょう。まあ、皆さんは「そんなものは絶滅したところで大した痛手ではない。毛虫なんか絶滅してしまえばいいのだ」と言われるかもしれません。——しかし、そのような毛虫を、今度は小鳥たちが自らの栄養として食べて生きているのです！ 自然界の全体というものは、まさにこのような密接な内部の相互のつながりによって成り立っています。

そして、私たちがここで、たとえばアリたちが自らの「蟻酸」によってあらゆるものをどのように貫き、浸透させているかを見るとき、私たちは「自然界の大きな営み」の内奥を文字通り目撃していることになるのです。これは本当に、どこまでも驚くべき、壮大な事象です。いたるところで、生命と世界を維持するために「絶対になくてはならない不可欠なこと」が日々行われているのです。

ここに一本の樹木があります。樹木には樹皮があります。私がある木を切り倒すと、この樹皮は今や朽ち果てていきます。そこに「腐植土」が生じるわけです。

(ここで黒板に図を描く)

ここで人間はこう言います。「まあ、放っておいて自然に朽ち果てさせよう」と。そして人間はただ平然とそれを見つめ、森の中に残されたあらゆる残渣がそのまま朽ちていくのに任せます。森のなかで、毎年どれほど膨大な量の落ち葉や植物の死骸が朽ち果てていつていることでしょうか！人間はそれをただ、そのまま朽ちるに任せているのです。

しかし、この世界の仕組みは、まったく異なるアプローチを取っています。そのような場所の近くのいたるところには、必ずこれらの「アリ塚」が配置されているのです。そして、これら組織されたアリ塚の内部から、森の土壌の奥深くへと、絶えず「蟻酸」が送り込まれているのです。

ここに森の土壌があり、そこに一つのアリ塚があるとします。これはちょうど、皆さんの手元に水がなみなみと入った一杯のコップがあり、そこへ何かを「一滴」だけぽつんと落としたとき、その一滴が瞬時にコップの水全体のすべてへと行き渡るのと同じ現象です。もしそこに塩をひとつまみ投入すれば、コップの水全体がすぐさま均一に塩辛くなりますよね。

(ここで黒板に図を描く)

ここに一つのアリ塚があるだけで、蟻酸はこれと全く同じように、森の土壌全体のすべて、あの朽ち果てていく腐植土の内部へと、深く深く浸透していくのです。そうして、もはや「死」へと向かっている森の土壌の全体が、この蟻酸によって瑞々しく潤され、満たされることになります。

つまり、蟻酸やミツバチ・スズメバチの毒というものは、現在まだ生きている植物の内部や、現在まだ生きている毛虫の内部へと（昆虫が花に止まり、花がハチから受け取ったものを自ら吸い上げることによって）注入されるだけでなく、まさに「死に瀕して崩壊していく地球の土壌」の内部へと、ダイレクトに還されているのです。

これらすべての秘密は、まさに「精神科学（人智学）」を通じてのみ、初めて正しく探究し、解き明かすことができる事象です。

なぜなら、それ以外のもう一方の科学、すなわち現代の物質的な「物理学的科学」というものは、ミツバチが花から何を「奪い去ったか」という片側のデータにしか興味を示さないからです。しかし、もし植物の側が、ハチたちに自らを囓らせることによって、彼らを逆に対価として養い、育ててあげるという命の恩返しをしていなかったとしたら、ミツバチたちは何千年間もの長きにわたって、花の上に止まり続けることなどそもそも不可能だったはずなのです。

そして、この生命の恩返しの法則は、森の中にある「生命を持たない死んだ材料（有機物の死骸）」に対してすら、全く同様に働いています。

皆さん、一度よく考えてみてください。現代の物理学的科学（唯物論科学）でさえ、自らの前提として「地球はいずれいつの日か、完全に死に絶える運命にある」と主張していますよね。

もし本当に放っておくならば、地球は確かにそうになってしまうはずです。なぜなら、いつかは地上において「朽ち果てて死んだ物質」が完全に優勢になり、地球の全体が物質として完全に死亡してしまうような状態が訪れるに違いないからです。

しかし、そのような最悪の未来は「決して訪れません」。なぜなら地球は、自らが朽ち果てて崩壊していくまさにその場所において、同時に、ミツバチ、スズメバチ、アリたちが惜しみなく提供してくれるエッセンス（酸・毒）によって、いたるところで絶えず新しく満たされ、貫かれているからです。

確かに、ミツバチはその力を生きている花たちにしか与えませんし、スズメバチもまた、ほぼ生きている花たちにしかそれを与えません。しかし、「アリ」という存在は、自らの体内から湧き出るこの「蟻酸」という素晴らしいギフトを、まさに『朽ち果てて死んでしまったもの』に対して、同時に、ダイレクトに注ぎ込んであげているのです。

アリたちはこの活動によって、死へ向かう物質をある一定の段階において再び「生命」へと向けて激しく触発しています。彼らは、地球が自らの朽ち果てていく死の物質の内部において、およそ「生き生きとした生命力」を保ち続けることができるよう、大いなる貢献をしてくれているのです。

ですから、私たちは確かに次のように言うことができます。「これらすべての内奥に宿っている、大いなる精神（霊）の英知には、ただ驚嘆せざるを得ない」と。物事の真実の歴史へと深く踏み込んでいくとき、私たちは、これらの小さな営みのすべてが、どれほどまでに巨大で重大な宇宙的な使命を背負っているかを知ることになるのです。

さて、ここで改めて、あの「農業を営むアリたち」に目を向けてみましょう。彼らは自分たちの小さな農場を構え、野生の植物の姿を全く異なるものへと変容させていました。

なるほど、人間は彼らがそこで栽培している種子（穀物）を食べて栄養にすることはできません。なぜなら、もし人間が、あのケイ石（火打ち石）のようにカチカチに硬い小さな米粒のような種子を口にすれば、第一に、体内にあまりにも過剰な（許容量を超えた）蟻酸を取り込んでしまうことになるため、完全に奇妙な大病を引き起こしてしまうからです。そればかりか、そんなものを噛めば自分の歯が恐ろしい勢いでボロボロに砕け散ってしまい、しばらくのあいだ歯医者たちが大繁盛して大忙しになることでしょう。そして最終的に、人間はこのような方法で収穫されたカチカチの種子のせいで、哀れにも命を落としてしまうに違いありません。

しかし、アリたち、あるいは「アリ塚の全体という一つの知性」は、自らに対して次のような計画を語りかけているのです。「もし私たちが、ただ大自然の中へと漫然と出かけていって、いたるところにある植物から普通に蜜を吸うだけだとしたら、私たちの体内には、あまりにもわずかな量の蟻酸しか形成されないだろう。それでは、私たちが『地球（土壌）に対して恩返しとして還してあげなければならない蟻酸の量』も、あまりにも少なすぎて足りなくなってしまう。

だからこそ、私たちは特定の植物だけを自分たちで厳選して単一栽培し、それらを完全に緻密に、まるで石のようにカチカチに凝縮した形で引き締まるように育て上げるのだ。そうすれば、私たちはこの極限まで凝縮された硬い物質の内部から、『圧倒的に大量の、極上の蟻酸』を爆発的に抽出して手に入れることができるようになるからだ！」と。

つまり、この「農業を営むアリたち」がこのような驚異的な農業を行っている本当の目的は、「自らの体内に、できる限り限界まで大量の蟻酸を精製して生み出すため」にほかならないのです。

そして、こうして自らの体を最高濃度の蟻酸で満たしたアリたちこそが、今度はその蟻酸を、地球の土壌の内部へと「これでもかというほど大量に注ぎ込んで還してあげる」という大仕事を担っているのです。

これこそが、大自然における「命の真の相互のつながり」の正体なのです。

したがって、このことから次のことがお分かりいただけるでしょう。毒素（酸）というものは、たとえそれが（局所的な）炎症などを引き起こすものであっても、実は同時に、「死（崩壊）に対抗するための、絶えざる治療薬（Heilmittel）」にほかならないのだということです。

そしてこう言うことができます。まさに「ミツバチ」という存在は、この点において、花たちの内部にあるすべてのものを維持するために途方もなく重要な役割を担っているのだ、と。なぜなら、ミツバチと花たちのあいだには、それほどまでに深い親縁関係が存在しているからです。

そして、この「維持」が示しているのは、これらの昆虫たちがこのような方法で地球（土壌）のなかで活動するたびに、地球がその都度いわば「解毒されている（aufgegiftet / 毒の力によって活力を吹き込まれている）」という事実なのです。これこそが、目に見えない精神的（霊的）な相互関係の正体です。

私は、誰かから「霊的な関係はどうなっているのか」と尋ねられたとき、決して単に「それはこれこれこういうものです」と言葉だけで片付けるような真似はしたくありません。私は皆さんに、常に具体的な「事実」を提示します。そして、その事実から、そこに意味があるかないかを、皆さん自身で判断していただきたいのです。なぜなら、自然界の事実、いたるところに英知が満ち溢れているということ、見事なまでに証明しているからです。ただ、今日「学者」と自称している現代の人々は、皆さんにこのような話を教えてはくれません。

しかし、実際のリアルな生活（現場）においては、この仕組みが確固たる役割を果たしています。私たちの地域（中央ヨーロッパ）では、もしかしたらこうした事柄はあまり尊重されていない（忘れられている）かもしれませんが、もう少し南部の地域へと行けば、農民たち、すなわち素朴な現地の人が、今度は**「本能的な知恵（科学）」**をもって次のように語るのを実際に耳にすることができます。「これらのアリ塚（Ameisenhaufen）を決して破壊してはならない。なぜなら、アリ塚というものは、森の腐植土（モダー）が（植物にとって）有害なものになってしまうのを防いでくれている（中和してくれている）からだ」と。

そして、そうした地域に住む本当に聡明な人々は、さらに別のことで口にしつづけます。彼らと一緒に森の中を散策すると、とりわけ「伐採地（樹木が切り倒されて、ちょうど若い木々がこれから新しく育とうとしている場所）」を通る際、彼らは——彼らは頭脳ではなく、まさに「鼻」が利く賢い人々です。実は、人間は頭だけでなく『鼻』でも賢くなることができるのです——、若い木々がこれから再び育てられようとしているその伐採地を歩きながら、ある場所に差し掛かると、こう言うのです。

「うむ、ここは極めて見事に木が育つだろう。ここからは、普段よくあるようなあの不快な腐敗臭が漂ってこない。きっとこの近くに、大いなる恵みをもたらしてくれているアリ塚があるに違いない」と。

現地の人は、文字通りこれを「匂い」で嗅ぎ分けるのです。彼らは鼻によって賢いのです。このような「鼻による賢さ」から、極めて有益な、多くの素晴らしい「民衆の知恵」が生まれてきたのです。

残念なことに、現代の新しい文明というものは、ただひたすらに「頭脳の文化」ばかりを追い求め、こうした身体的な本能の領域を完全に切り捨ててしまいました。その結果、「本能（直感）」という言葉すら、中身の無い単なるお題目（記号）に成り下がってしまったのです。

しかし、ここにいる動物たち、とりわけ彼らが集団を形成している状態である「巣箱」や「アリ塚」と

いう一つの巨大な生命体は、その根本において、これら宇宙と地球のすべての秘密をあらかじめ完璧に熟知しています。そして彼らは、ある種の「匂い」を通じて、それを完全に制御し、動いているのです。先ほども申し上げた通り、多くの本能的な知恵の内部には、まさに「鼻の賢さ」が宿っているのです。

さて、私たちは来週、次の時間にこの続きをさらに進めていくことにしましょう。本日、私が皆さんにただお伝えしたかった結論は次のようなことです。

「ミツバチ、スズメバチ、アリという生き物たちは、単に自然界から何かを一方的に奪い去る略奪者などでは決してなく、逆に、自然界に対して『今後もさらに生きながらえ、美しく繁栄していくための大いなる可能性（生命のビタミン）』を惜しみなく与え続けてくれている恩人なのだ」ということです。

第九講義-1

「労働者講義」より

〔GA351（第15講）〕ドルナハ、1923年12月22日

●基本的な視点

自然界には物質（酸素・窒素など）だけでなく、
いたるところに本物の「知性」が満ちている。
人間が空気を吸うように、感覚を通じてその知性を取り入れている。

昆虫（特にミツバチ・スズメバチ・アリ）の営みは、
その知性を最も鮮やかに示している。
さらに、昆虫が持つ毒素（蟻酸など）は、
希釈して適切に用いれば優れた治療薬となり、
人間の体内・地球全体の生命プロセスと深く対応している。

昆虫の働きを通じて自然界の知性が明らかになり、
蟻酸（シュウ酸からの変容）が人間と地球双方で
「魂・精神を物質に結びつける生命のエンジン」であることが示される。

分蜂は人間の死と再生のシンボルであり、
ネズノ木の伝統はそれを聖夜の愛と再生のイメージに重ねている。

●要点

1) クマバチ（大工蜂）の巣作り

加工された木材（杭・柱など）に斜めの通路を掘り、
縦に積み重ねた10～12階建ての部屋を作る。

各部屋に柔らかい敷物を敷いて卵を産み、天井中央に穴を残した蓋をする。

幼虫は下層から順に成熟し、上の蜂は下の部屋の穴を通して落下して外へ出る。

タイミングがずれているため衝突せず、完璧な幾何学的設計になっている。
これは自然に宿る知性の典型例である。

2) 蟻酸の重要性

アリ・スズメバチ・ミツバチの毒は治療薬になる。
人間の身体（筋肉・臓器、特に脾臓など）にも蟻酸が満ちており、
「生きたアリ塚」のようなもの。
不足すると記憶力低下などの症状が出る。

3) シュウ酸から蟻酸への変容

肺の不調には直接蟻酸、
肝臓・腸の不調にはシュウ酸（カタバミやクローバー由来）を用いる。

体内でシュウ酸＋グリセリン様のプロセスにより蟻酸が生成され、
二酸化炭素が排出される。
これは実験室のレトルト反応と人間の内臓・呼吸のプロセスが一致する。

生命は「物質の詰め込み」ではなく「内なる労働・変容」にある。

4) 小宇宙（人間）と大宇宙（地球）の対応

植物のシュウ酸を昆虫が蟻酸に変え、大気・土壌を満たす。
これが地球の生命を保ち、冬の死から春の再生を可能にする。

人間体内でも同じプロセスが
魂・精神を肉体に結びつける「霊的な土台・磁石」となる。
不足すれば老化・死や化膿などが起きる。

5) 分蜂と人間の死・再生

若い女王の出現で古い群れが
毒（高度に変容した蟻酸）の主権を失い巣を去る様子は、
人間の魂が肉体を離れる死のドラマの写し絵である。

群れが塊になるのは霊界への憧れを示すが、
物質化しすぎて自力では入れず、
人間が新しい巣箱に移すことで「再受肉」する。

6) クリスマスとの結びつき

古くはモミではなく
セイヨウネズ（ジュニパー）が聖夜の木として用いられた。
その実の微量な酸のプロセスが、
小鳥との関わりを通じて冬の地球を若返らせる。
これはキリストによる人類の利己主義の「冬」からの再生・復活の象徴。

●本文

皆さん、お早うございます！

実のところ、私たちはドルナハのドリナー氏の質問について、まだもう少し話ししておかねばなりません。氏は皆さんの代表として——これはおそらく誰にとっても興味深いことだからですが——、活発に動き回り、植物へと近づいていくこれら昆虫の群れと、植物の内部にあるものとの間に、一体どのような「精神的（霊的）な関係」があるのかを知りたがっていたからです。

私は以前にも皆さんにお伝えしたことがあります。私たちの周囲には、単に酸素や窒素のような物質的なものだけが存在しているわけではありません。実は、自然界の全体のいたるところに、「知性」が、文字通り正真正銘の知性が満ち溢れているのです。

「私たちは空気を吸い込んで生きている」と言われても、今では誰も驚きません。なぜなら空気はいたるところに存在しており、いわば現代の科学がすでに教科書にしっかりと載っているため、人々は「どこにでも空気があり、お前はその空気を吸っているのだ」と教えられているからです。

しかし、たとえば私がかつて田舎で出会った人々の中には、そんな話を単なる「空想」だとみなす人もいました。彼らは外に空気が存在しているという事実を、物質的に理解していなかったからです。これは、現代の人々が「いたるところに知性が満ち溢れている」という事実を知らないのと全く同じです。

ですから、私たちが次のように言うと、現代人はそれを空想だとみなしてしまいます。「私たちが肺を使って空気を吸い込むのと全く同じように、私たちは、たとえば『鼻』や『耳』を使って、自然界の知性を吸い込んでいるのだ」と。

しかし、私は以前にも、知性というものがいたるところに存在していることを皆さんが実感できるような例を、すでに豊富にお見せしてきました。

私たちはここ最近、自然科学における極めて興味深い一章、すなわちミツバチ、スズメバチ、アリについて議論してきました。自然界に存在するもののなかで、これら昆虫たちの活発な営みほど、大自然そのものの内奥へと、これほどまでに徹底的な眼差しを投げかけさせてくれるものは、他にはほとんど存在しないでしょう。

昆虫というものは、どこまでも本当に奇妙で驚くべき動物であり、彼らはこれからも、さらなる多くの秘密を世の中に暴き出していくことになるはずなのです。

私たちがこうしていれば「昆虫の章」を議論しているまさにこの時期が、偉大な昆虫研究者であるジャン＝アンリ・ファブール（Jean-Henri Fabre）の生誕100周年にあたるというのは、実に奇妙で興味深い巡り合わせです。彼はちょうど1世紀前の12月22日（今日）に生まれました。彼はまさに（19世紀の）唯物論の時代に生きたため、すべての現象を唯物論的に解釈してしまいましたが、昆虫の生態から途方もなく多くの事実を光の中に引き出しました。ですから、今日私たちが昆虫について語るにあたり、彼を回想するというのは極めて自然なことなのです。

さて、まずはミツバチとの関連において、皆さんが並外れて興味を惹かれるであろう、ある昆虫の種類（ハチ）の例を一つ挙げてみたいと思います。

ミツバチは極めて高度な完成度をもって働きます。そして、ミツバチにおける最も驚くべき点は、最終的に蜂蜜を生み出すということではなく、あの見事に建築された「巣房のネットワーク」を、完全に自分自身の分泌物だけで作り出すという点にあります。ミツバチたちは材料として使用するものを、自らの身にまとうて巣箱へと運び込まねばなりません。そして、その材料を本来の形態のまま使うのではなく、自らの体内で完全に変容させてから巣箱へと持ち込むのです。彼女たちはこのように、自分自身の内なる力から出発して働きます。

しかし、世の中にはこのような方法では働かないものの、その労働を通じて「大自然の全体にいかんにか途方

もない知性が満ち溢れているか」を、まさにまざまざと証明してくれるミツバチの親戚がいます。

一般に「クマバチ（大工蜂／木蜂：Holzbiene）」と呼ばれているハチの労働を、ここで一度観察してみましょう。クマバチたちは（蜂蜜を大量に作らないため）在来セイヨウミツバチ（Hausbiene）ほど注目されず、むしろ人間にとっては大抵の場合「厄介者」扱いされてしまいます。しかし、この蜂は並外れた「働き者」であり、自分自身の個体ではなく「種の全体」が生きながらえるために、文字通り凄まじい労働を成し遂げなければならない生き物なのです。

このハチは、もはや樹木にくっついて生きてはいない、すでに木から切り出されて「加工された木材」を搜索します。皆さんは、私がこれから説明するこのクマバチの巣を、たとえば地面に打ち込まれた「木の杭」のような場所で見つけることができます。つまり、樹木から切り離されて、一見すると生命を失ったように見える木材、杭や木製の柱などの内部です。彼女たちはそうした場所や、あるいは庭のベンチ、庭の門扉（木製のドア）などの中に潜んでいます。人間が木材を利用しているまさにその場所に、クマバチは自らの巣を構えるのです。しかし、その建築方法は完全に独特で奇妙なものです。

ここに一本の木柱があると想像してみてください（ここで黒板に図を描く）。これはすでに樹木から切り出された木材です。そこへクマバチがやって来て、まずは外側からこのように斜め方向に向けて、内部へと一本の通路を穿ちます。

図 1



そして内部に到達し、その通路をきれいに削って、一種の運河のような一本の縦穴を掘り進めると、今度は「まったく異なる方向」に向けて穴を掘り始めます。彼女はまず、そこに小さな「円筒状の空洞」を掘り上げます。

それからこの昆虫は一度外へと飛び立ち、周囲の環境からあらゆる物（植物の繊維など）を集めてきて、この掘った空洞の内部にふかふかの「敷物」を施して詰め物をします。そして、部屋の内装を整え終わると、そこに一つの卵を産み落とすのです。この卵から、後に幼虫が生まれます。卵は今、この部屋の内部に鎮座しているわけです。

卵を産み落とすと、この小さなハチは、その部屋の真上にひとつの「蓋（Deckel）」を作ります。ただし、その蓋のちょうど中央には、一つの「穴（Loch）」が開けられたまま残されます。

そしてクマバチは、今作ったその蓋のさらに真上の空間において、再び上へと向かって穴を掘り進め、新しく孵化してくる2匹目のクマバチのために、上層階に「2番目の住处（部屋）」を構築するのです。そして同様にふかふかの敷物を敷き、中央に一つの穴を残した上で、再びそこに一つの卵を産み落とします。

クマバチはこの作業を、このように縦に積み重ねられた階層構造の部屋（空洞）を、10階建て、あるいは

12階建てのタワーとして垂直に建築し終えるまで、根気強く延々と繰り返すのです。そして、そのすべての部屋の内部には、一つの卵が大切に格納されています。

こうして（格納された）幼虫は、この木柱の内部で成長していくことができます。親である昆虫は、いつも幼虫のすぐ隣にあらかじめ栄養となる食糧を置いておくのです。幼虫はまず、自分のために用意されていたその食糧を食べて育ち、やがて外へと這い出てくる成熟の時期を迎えます。そして、幼虫がサナギになり、羽の生えた成虫のハチへと変態を遂げ、いよいよ外へと飛び立つべき時がやってくるのです。

この内部においては、幼虫が順調に発育し、一定の時間が経てば正しく外へと飛び立てるような仕組みになっています。幼虫が成熟し、サナギを経て成虫の昆虫になったとき、出来上がった成虫は、クマバチの職人技によってあらかじめ最初に外側から掘り進められていた、あの「一本の通路」を通して外の世界へと飛び出していくことができるのです。

なるほど、それは素晴らしいことです。しかし、ここで上層の部屋にいる、つまり最下階のハチよりも「遅れて産まれた」2番目のハチ、そしてさらにその上にいる3番目のハチにいたっては、母親のハチが順番に上へと部屋を積み重ねて産卵していったわけですから、誕生のタイミングが異なります。しかも、これらの上層のハチたちには、外へ出るための「側面の出口」がどこにもありません。

そうすると、普通にいけば「上層階のハチたちは外に出られず、体内で次々と閉じ込められて死んでしまう」という、極めて致命的な事態が起きてしまうはずです。

しかし、母親のハチは、その大惨事を「完璧な幾何学の知恵」によってあらかじめ防止しているのです。彼女は、より若い（上層の）幼虫が成虫になって部屋を這い出てきたとき、先ほど私がお話ししたあの「天井の仕切り壁にある中央の穴」を見つけられるように卵を配置しています。上層の若いハチは、成虫になるとその穴から「下の部屋へとポトリと落下して降りていく」のです。

3番目の部屋にいたハチは、2つの穴を通り抜けて下へと落下し、そうして（最下階のメイン通路から）外へと這い出ていきます。そして、上層のハチが這い出てくるタイミングは、下層のハチよりも常に「少しずつ遅れて」やってくるため、先に旅立つべき下のハチの邪魔をすることは決してありません。彼らが狭い通路で鉢合わせして衝突することはなく、上のハチが落ちてくる頃には、下の先長男のハチは「いつもすでに外の世界へと飛び去った後」なのです。

この巣全体の設計は、人間がただ驚嘆せざるを得ないほど、どこまでも「理にかなって」組み立てられています。現代の人間が機械や工業製品で何かを再現しようとする際、その多くはこうした自然の仕組みを真似ているにすぎませんが、人間のやることは、自然の職人技に比べれば大抵の場合、はるかに不器用で洗練されていません。

自然界に存在している仕組みというものは、並外れて巧妙に、器用に作られており、私たちは次のように言わねばならないのです。「そこには紛れもなく『知性』が、正真正銘の知性が生きているのだ」と。

昆虫たちのこのような巣の建て方や、彼らの労働における身のこなしのなかに、いかに確固たる知性が宿っているかということについては、それこそ何百、何千もの実例を挙げることができます。先日お話しした、自分たちの農場を完璧に経営し、その全体の家政を途方もない知性をもって組み立てている「農業を営むアリ（収穫アリ）」の姿を思い浮かべるだけでも、そこにどれほどの英知が潜んでいるかがお分かりいただけるはずです。

しかし、私たちはこれら昆虫（ミツバチ、スズメバチ、アリ）に眼差しを向けた際、さらにもう一つの別の極めて重要なテーマについても考察してきました。

私は皆さんに申し上げました。これらの動物たちは皆、その体内に一種の「毒性のある物質（毒素）」を秘めており、この毒性物質というものは、人間がそれを正しい用量（比率）で希釈して適切に投与してあげらるれば、同時に「極めて優れた素晴らしい治療薬」になるのだ、と。

ミツバチの毒は、卓越した治療薬になります。スズメバチの毒も、卓越した治療薬になります。そして、アリたちによって分泌される「蟻酸」にいたっては、言うまでもなく最高の治療薬なのです。

しかし、私はこの蟻酸について、以前に次のようなことも仄めかしました。私たちがこの蟻酸を手に入れようと思えば、通常はアリ塚に近づいていき、アリたちを採集して、それらをすり潰して絞り出さねばなりません。つまり、蟻酸という物質は、一見すると「アリ特有の物質」として、彼らのなかに優先的に存在しているように思えます。

しかし、もし皆さんが、この部屋（講堂）の内部に——もちろん相対的な比率においてですが——、どれほど膨大な量の「蟻酸」が今この瞬間にも充満しているかを知ったなら、文字通り本当に腰を抜かして驚くに違いありません！

皆さんはきっとこう言われるでしょう。「いや、しかし私たちは、この講堂の部屋の片隅のどこを探しても、アリ塚なんてものは見つけられませんよ」と。

ここに座っていらっしゃる皆さんのすべては、実のところ、自分自身の肉体そのものが「一つの生きたアリ塚」にほかならないのです！

なぜなら、皆さんの四肢の内部、筋肉の内部、あるいは他のあらゆる組織の内部——心臓の組織、肺の組織、肝臓の組織、そしてとりわけ「脾臓の組織」の内部にいたるまで——、そのすべてのいたるところに、「蟻酸」が厳然と充満しているからです。

もちろん、それはアリ塚の内部のようにドロドロに濃縮された高濃度で入っているわけではありません。しかしそれにもかかわらず、皆さんの肉体の全体は、頭から爪先にいたるまで、この蟻酸によって完全に満たされ、満杯に充たされているのです。

これこそが、人間の生命における極めて驚くべき、神秘的な真実なのです。

では、私たちは一体何のために、自分たちの身体の中にこの「蟻酸」を持っているのでしょうか。

もしある人の体内でこれが不足しているなら、それを見抜かなければなりません。誰かが病気として現れるとき——人間というものは大抵、多かれ少なかれどこかしら病んでいるものですが——、その人は外見上はどれも同じように見える何百種類もの病気を抱えている可能性があります。その人に「本来、一体何が欠けているのか」を見極めなければならないのです。顔色が青白いとか、食事が喉を通らないといったことは、あくまで外側の表面的な症状にすぎません。本質的に何が不足しているのかを突き止める必要があります。

そして、ある人々の場合、その原因はシンプルに「自分自身の内部が十分に『アリ塚』になっておらず、十分な蟻酸を自発的に作り出すことができていない」という点にあるかもしれないのです。

アリ塚の内部で蟻酸が精製されるのと全く同じように、人間の身体の内側、そのすべての四肢や、特に「脾臓」の内側において、蟻酸が強力に生み出されていなければならないのです。もし人間が作り出す蟻酸の量が少なすぎるならば、その人に対してある種の製剤、すなわち、十分な蟻酸を自ら作り出せるように外側からサポートしてあげるための「治療薬」を投与してあげなければなりません。

ここで私たちは、体内の蟻酸がまさに不足してしまっている人間の身に、一体何が起きているのかを克明に観察しなければなりません。

しかし、このような観察は、それを観察しようとする人々が、真に優れた「人間通（人間を深く知る者：Menschenkenner）」である場合にしか成り立ちません。私たちは、最初は十分な蟻酸を体内に宿していたのに、その後、蟻酸が不足してしまった人間の「魂」の内側で一体何が起きているのかを、ありありと思い描くことができないからなのです。これは非常に奇妙で、興味深い現象です。

そのような患者に対して、あなたが正しい方法で問いかけるなら、彼は自らの病の本質について、完全に的を射た正しい答えをあなたに告げてくれるでしょう。

たとえば、あなたが誘導して引き出した結果、次のように打ち明けてくれる患者がいると仮定してみましょう。「ああ、おっと驚いた。ほんの数ヶ月前までは、私はあらゆることを鮮明に思い出すことができたし、どんなことでも実に見事に頭の中で熟考して解決することができたんです。ところが今では、それがさっぱり出てこない。もう頭が働かないのです。何かを一生懸命思い出そうとしても、どうしてもできなくなってしまったのです……」と。

皆さん、この魂の告白は、現代の私たちが当然ながら（正当な手続きとして）行うべきあらゆる「外的な（肉体的な）医学検査」が与えてくれるデータよりも、はるかに重大で決定的な病気のサイン（兆候）であることがしばしばあるのです。

もちろん今日では、尿を検査してタンパク質が出ているか、膿があるか、糖が出ているか、などを調べることで、極めて興味深いデータを得ることができます。しかし状況によっては、患者があなたに向かって、いま私がお話ししたような「精神的な衰え」を語ってくれることの方が、はるかに重要な意味を持つことがあるのです。なぜなら、彼がそのような体験をあなたに語ってくれたとき、（当然他にもいくつかの要素を調べる必要はありますが）そこから次の事実を突き止めることができるからです。すなわち、「ここ最近、彼自身の体内の内側において、蟻酸が著しく減少してしまっているのだ」と。

ここで、まだ物質的にしか物事を考えられない現代的な人物であれば、次のように言うでしょう。「この人間は蟻酸が不足している。ならば、アリをすり潰して蟻酸を抽出するか、あるいは化学的な別の方法で蟻酸を製造し、それを適切な用量で彼の体内に直接投与してやればいいのだ」と。

なるほど、あなたはそれをしばらくのあいだ実践するかもしれません。しかし、その患者はあなたのところへ戻ってきて、こう言うことになるでしょう。「先生、あれを飲んでも、私にはさっぱり効果がありませんでした（gar nichts geholfen）」と。

一体、ここで再びどのような問題が立ち塞がっているのでしょうか？確かに患者には効果がありませんでした。彼に蟻酸が不足していたという診断は「完全に正しかった」のです。それなのに、あなたが（不足しているはずの）蟻酸を直接与えたにもかかわらず、それは何の役にも立たず、文字通り「これっぽっちも効かなかった」のです。

さあ、ここには一体、どのような秘密が隠されているのでしょうか？

さらに深く探究を進めていくなら、あなたは次のような事実に突き当たることになります。「ある人間には蟻酸が全く効かなかったが、また別の人間には、それは絶大な効果を発揮し続けた」と。——ここで、皆さんも徐々にその決定的な違いに気づかれることでしょう。

蟻酸が劇的に効くタイプの人々は、とりわけ「肺」の内部にカタルや粘液の滞りを示していることが多いのです。その一方で、蟻酸がこれっぽっちも効かなかった人々の場合は、「肝臓」や、あるいは「腎臓」、あるいは「脾臓」の内部に粘液の滞りを示しています。これは極めて特異で、奇妙な事実です。

つまり、たとえば「肺」に蟻酸が不足しているのか、それとも「肝臓」に蟻酸が不足しているのかによって、そこには天と地ほどの重大な違いが存在するのです。その違いとは、アリ塚の内部にある（外から抽出したそのままの）蟻酸に対して、肺であれば、すぐにそれを受け入れて活用し、何かを始めることができるという点にあります。しかし、肝臓にいたっては、その外からの蟻酸を前にしても、全く役に立たないのです。

皆さん、ここからがもう一つの別の本質的なテーマです！もしあなたが、その患者の「肝臓」や、とりわけ「腸」の調子が完全に正常ではなく、かつ彼の体内の蟻酸が不足しているにもかかわらず、外からの蟻酸がこれっぽっちも効かないということに気づいたなら、あなたはその人に対して、蟻酸の代わりに「シュウ酸（Kleesäure / クローバーの酸）」を与えなければなりません。

つまり、私たちが普段よく目にする野生の「カタバミ（Sauerklee / サウアクローバー）」や、あるいは畑に生えているクローバー全般をすり潰して絞り、その植物の酸（シュウ酸）を抽出して、それを患者の体内に投与してあげなければならないのです。

ご覧の通り、まとめると次のようになります。

「肺」に不調（蟻酸の不足）を抱えている人には、直接「蟻酸（Ameisensäure）」を投与しなければならない。

「肝臓」や「腸」に不調（蟻酸の不足）を抱えている人には、代わりに「シュウ酸（Kleesäure）」を投与しなければならない。

しかし、ここで最も奇妙で神秘的な現象が起こります。あなたが「シュウ酸（クローバーの酸）」を体内に注入してあげたその患者は、あなたがシュウ酸を投与してしばらくの時間が経過した後に、そのシュウ酸を材料にして、なんと自分自身の体内の内部で、自発的に「蟻酸」を作り出す（変化させる）のです！

つまり、ここで決定的に重要になるのは、単に外側から（不足しているとされる既製品の物質を）機械的に人間の体内に放り込めばいいという話ではない、ということです。私たちは、「人間の有機体そのものが、自らの力で一体何を作り出そうとしているのか」という内なるプロセスを知らねばならないのです。

もしあなたが（肝臓や腸が弱っている人に対して）最初から完成された既製品の蟻酸をそのまま与えてしまえば、人間の生体は次のように言ってへそを曲げてしまいます。「おいおい、こんなものは私のための仕事じゃない。私は自ら自発的に『労働』をしたいんだ！——それなのに、最初から完成された蟻酸をそのまま差し出されたって、私にはそれを加工する余地がどこにも残されていないじゃないか。こんな既製品を、私は胃からわざわざ上の肺へと運び上げるような面倒な大仕事はしないぞ」と。

当然ながら、葉というものは胃に投与せねばならず、それは最終的に腸へと届きます。すると腸の側は、今まさに自発的に働こうと意欲している人間の肉体に向かって、不満を漏らすわけです。「一体、俺の前に何を突き出しているんだ？俺は自分の力で一から蟻酸を作り出したいんだ。それなのに、あらかじめ用意されたこの蟻酸を、ただ胃から肺へと素通りさせて運べというのか？そんな下請け大工のような真似は真っ平ごめんだね！」と。

生体（肝臓や腸）は、最初から完成された蟻酸ではなく、原材料としての「シュウ酸」を求めているのです。そして、彼らはそのシュウ酸を自らの力でこねくり回し、労働することによって、初めて自分たちの意志で、最高の「蟻酸」を体内で生み出すことができるのです。

そうです、皆さん。「生命（Leben）とは労働によって成り立つものであり、物質そのもののの中に存在しているわけではない」のです。

私たちが絶対に知っておかねばならない最も重要な事実とは、生命というものは、単にキャベツやカブをただ胃の中に詰め込んで消費することにあるのではなく、「そのキャベツやカブの物質が体内に侵入してきたときに、身体の外がどれほど必死になって働かなければならないか」という、その内なる労働のプロセスの中にこそ存在している、という点にあります。

いずれにせよ、人間の身体は（キャベツを食べたからといって）自分の体内でふたたびキャベツを再製造するような真似は決してしません。しかし、物質そのもののばかりをありがたがる現代の私たちの文明（唯物論科学）の根底には、まさにこのような（物質の足し算引き算という）奇妙な錯覚が居座っているのです。

しかし、このことから、大自然のなかにいかに驚くべき相互関係が存在しているかがお分かりいただけるでしょう。外には植物たちが生い茂っています。クローバーは、ただその性質が「特に際立っている」というだけの代表例にすぎません。

実のところ、「シュウ酸」はあらゆる植物の内部に含まれているのであり、ただクローバーの中に最も大量に含まれているというだけの理由で、私たちはこれを便宜上「クローバーの酸（シュウ酸）」と呼んでいるだけなのです。しかし、蟻酸が自然界のいたるところ、そして人間の身体のいたるところに見つかるのと全く同様に、このシュウ酸もまた、大自然の全体、そして人間の身体のすべてのいたるところに厳然と存在しているのです。